

名寄市立大学道北地域研究所30年の歩み

道北地域研究所企画委員会

1. 道北地域研究所設置に関わる「3つの願い」とこれまでの歩み

1982年4月に開所した名寄女子短期大学道北地域研究所（名寄市立大学道北地域研究所の前身）は32年の歴史を刻み、地域問題を解決するためにさまざまな地域の研究課題に取り組んできた。この間、道北地域研究所では節目ごとに記念講演の実施や記念号の出版を行い、現在に至っている。開所以来、毎年発行してきた道北地域研究所年報「地域と住民」全31号を振り返りながら、これまでの活動を整理する。

（1）道北地域研究所の開所にあたっての「3つの願い」

道北地域研究所の初代所長に就任した美土路達雄名寄女子短期大学長は、開所にあたっての「3つの願い」を提示した。以下は、1982年6月5日、開所記念講演会での美土路所長の挨拶を収載した「地域と住民」第1号、2-4ページの要約である。

第一の「願い」は、本学教職員による研究の一層の推進、ならびに共同研究の場の構築である。本学は家政栄養系の大学であることから、自然科学・社会科学・人文科学にいたるまで1人1研究領域で、その相互研鑽のための学内組織が不十分であった。そこで、本研究所の設置により、研究費導入などその他の研究条件を整備することを通じて、学際的に各人の専門研究を関連付け、地域生活に即した研究および教育を進展させる必要がある。そういった意味で、本学教職員全員が研究所所員を兼任し、全構成員で本研究所を運営していく体制としたい。

第二の「願い」は、道北地域住民の地域振興の願いと、本学教職員の研究推進の願いとの接点を見出すため、共通共同の場を相互に拡大することである。道北地域の過疎化は地域社会に様々なひずみを生み出しつつスパイラル的に深化しているが、この過疎地域に21人の専門研究者集団がいることは地域住民にとって大きな知的財産である。本学教職員が大学人として、国民に対して責任をもって高等専門教育と研究に取り組んでいるとすれば、それは同時に地域住民に対しても責任をもっていることを意味する。わが国で最北、そして道内で唯一の公立短期大学である本学には、研究面での地域への寄与がとりわけ求められていると考える。

第三の「願い」は、道北地域に存在する、北海道大学演習林をはじめとする各種試験研究機関、地域の学校教員、自治体職員、その他団体職員と、種々の地域課題をめぐって、研究交流・提携を深め、共同研究の取り組みまで発展させることである。地域に存在する課題は多岐に渡るため、本学教職員の研究力量では地域住民の要求に無制限に応じていくことは難しい。よって、道北地域の各種機関・団体に所属する専門研究者との連携、共同研究が必至となる。また、道北地域に係る調査研究成果資料を本研究所に蓄積していくことは、これら地域の専門研究者にとっても有益であろう。

本学が開設されて20年余りが経過した。本学教職員は不十分な研究条件下ながら、自らの専門性を活かして、例えば食品加工問題・水質問題など地域と結びついた地道な研究・教育に取り組み、その成果を直接間接に地域に還元してきた。こうした努力が本研究所の設立によって、より組織的かつ計画的な営みへと前進していくことが望まれる。道北地域で芽生えつつある各市町村における地域振興の運動グループと連動して、本学教職員が本研究所に結集し、教育研究水準の向上に向けて尽力したい。教育研究の内容豊かな発展を通じて、地域振興の学問的一翼を担っていくことを決意する。

以上のように、公立短期大学における研究体制と相補いつつ、科学の発展に即応する地域的研究を実施するための組織として道北地域研究所を開所したという、美土路所長の強い信念が「3つの願い」に込められている。

(2) 道北地域研究所開所5・10年を振り返って

1987年6月、道北地域研究所の開所5周年記念講演会が八木健三氏（北海道大学名誉教授）を講師として開催された。記念講演の題目は「北海道の自然と人-知床・幌延・千歳川放水路-」であり、当時の北海道が抱えている環境問題について自然保護との関連から話題を提供した。記念講演の内容は1988年4月に発行された「地域と住民」第6号、107-117ページに掲載され、八木氏は「我々はかつては、自然は無限に強いものと考えていましたが、実は自然というものは、発達した人間の科学力、技術力によって、非常に損なわれやすいものである。それが損なわれてしまうと、取り返しのつかないものになってくる。そして、人間自身にしっぺ返しが帰ってくるということを、多くの事柄でみてきました。」と、講演をまとめた。2011年3月11日に発生した東日本大震災の惨状を目の当たりにした現在、今一度、八木氏の警鐘を真摯に受け止めるべきであろう。

1993年4月、道北地域研究所開所10周年記念号として「地域と住民」第11号が発行された。道北地域研究所の開所10年を振り返り、本学の現職および元教員による4編の原稿を掲載した。すなわち、鈴木松朗氏による「開設10年後の提案」、中嶋信氏による「地方自治の前進と道北地研」、飯澤理一郎氏による「地方自治と道北地域研究所に期待する」、木村純氏による「市立名寄短期大学道北地域研究所の10年」であった。それぞれの立場から、道北地域研究所への強い期待とともに、さまざまな提言が寄せられた。美土路初代所長の「3つの願い」を実現するための課題について、木村氏は次のことを指摘した。先ず、地域研究の進展のためには、なお道北地域研究所の経常的な研究費の増額が必要であり、また専任の研究員も必要である。次いで、共同研究のより活発な推進を目指すために、現在の社会・生活・自然部会を基礎とする運営体制の見直しについて検討する。三つ目は、地域の共同研究の成果を踏まえた研究会やシンポジウムを開催し、また研究報告会を復活させる。四つ目は、委託研究について応諾の基準等の規則整備を行い、研究所に相応しい一方的な依存の関係ではない地域の関連研究者・職員・住民との共同のあり方を検討する。五つ目は、資料の収集と整備の方針を確立し、系統的に進める。そのためには、専任のスタッフの配置も重要である。最後に、これらの課題を解決するためには長期的な計画を確立することが重要である。道北地域研究所開所以降のこの10年間（1982-1992年）で、名寄市の人口は5千人も減少し、道北地域の過疎化はますます深刻になりつつある。したがって、道北地域研究所に託された地域の期待はますます大きくなることを踏まえると、研究の力量を高めつつ、地域の人々とともに成長していく営みを今後も継続していかなければならない。

(3) 道北地域研究所開所15年を振り返って

1998年4月、道北地域研究所開所15周年記念号として「地域と住民」第16号が発行され、企画委員会（牧野幹男所長、津田美穂子次長、大坂祐二・岡林靖子・芝田和子・三国和子・吉川由希子企画委員）による「道北地域研究所15年の歩み」が173-176ページに掲載された。

開所以来、道北地域研究所の定期的な活動は、学外講師による年1回の記念講演会、北海道大学演習林との共催による講演会およびシンポジウム開催等であるが、これらの講演会のテーマは地域社会の問題、地場産業の振興および環境に関するものがほとんどであった。しかし、1994年4月に看護学科が新設されるに伴い、福祉や保健問題も主題として取り上げるなどの変化も少しずつ見られるようになった。研究所の設置当時は独自予算もなく、また研究員である教員の多くは地域を研究フィールドとすることを非常に狭い意味で考える傾向にあった。そうした流れを踏まえて、美土路所長は「現代の道北の過疎問題が資源利用と環境保全という人類史的課題の地域的表出にほかならぬとすれば、それにかかわりのない学問研究は有り得ない」と述べ、まさに昨今の地域社会状況を見抜いた上での研究所の目指すべき方向性を明確に示した。

この時期の研究活動の特徴は、研究員間および学外研究者との共同研究、地域専門家や自治体職員との共同研究が次第に活発化したことであった。研究成果も毎年5本程度の研究論文として発表され、文部省や北

海道などの科学研究費助成を得られる研究も増加した。しかし、道北地域は第一次産業の衰退、投資や社会資本の不足に伴う雇用機会の減少、商業の不振、広域行政機関の統廃合など、人口減少地域特有の現象もいっそう進行した。こうした地域の現状を反映した研究に特化しようという、道北地域研究所の姿勢が定着した時期でもあった。

開所当時から、名寄市からの委託研究にも取り組んできたが、1991年からはようやく独自の研究費が予算化されるようになった。1997年には、これまでの自然・社会・生活部門の3部会を解散し、研究活動を横断的に実施可能な体制にするために、企画委員を研究員協議会全体から選出するように組織改革を行った。この間、研究活動も徐々に活発に行われるようになってはきたが、地域研究の在り方が常に解決すべき課題として残った。物理的に近い距離にいる住民や学生を対象とすることだけでは、地域研究とはいえないという反省でもあった。美土路所長が述べた「人類史的課題の地域的表出」という原則の意味を常に思い出し、地域研究に取り組む必要があった。

上記のような課題は残るが、道北地域研究所の15年の歩みを振り返ると、地域研究所の活動スタイルの定着（諮問会議の設置、地域住民と共に学ぶ講演会・シンポジウム・研究会の実施、年報の発行等）、教員兼任の40名の研究員と特別研究員の協力による研究の推進、予算や人員の整備の点でもそれぞれ一定の前進をした時期と位置づけることができる。地域人口の減少や景気の低迷など地域をめぐる情勢は厳しい状況ではあるが、開所後の15年間は校舎の増改築、学科数や学生数も増えるなど学内的には発展してきた時期であった。この中で、道北地域研究所は地域からの期待の大きさを強く意識して活動を続けた。

（4）道北地域研究所開所20年を振り返って

開所20年を記念して、企画委員会（前田憲所長、鈴木文明次長、伊藤道子・津田美穂子・松藤瑠美子・結城佳子企画委員）では「大学付置研究所の活動と展望」を特集し、2003年3月、「地域と住民」第21号、93-130ページに道北地域研究所を含めた4つの研究所・研究センターの活動等について掲載した。この特集にご協力いただき、玉稿をお寄せいただいた研究機関は、北海学園大学開発研究所（小田清所長）、旭川大学地域研究所（竹中英泰所長）および釧路公立大学地域経済研究センター（福田芳弘リサーチアシスタント）であった。ここでは、前田所長による「市立名寄短期大学道北地域研究所の20年」に基づき、地域研究活動の推進と公開講座・シンポジウムについて整理する。

地域研究活動を推進するにあたり、1991年から費目化された「特別研究費」の導入は道北地域研究所の運営上、有効であった。特別研究費は前年度提出の研究課題に即して研究費を予算化するという性格のものであり、実体的には定額が予算化され、各教員・研究グループの状況を勘案しながら予算執行された。特別研究費による研究成果は、原則として年報「地域と住民」に公表された。特別研究費対象の研究課題は多岐・多様であったが、特別研究費の存在は地域的に身近な課題を研究課題として掘り起す契機ともなった。また、経常的に予算化されるために、研究の継続性が確保されるという利点もあった。

研究組織体制は、1996年度までは自然・社会・生活の三部会制をとり、研究員は何れかの部会に属する形態であったが、1997年度からは部会制を廃止し、研究員の繋がりによる分野を超えた共同研究が追求されることになった。研究組織のあり方はその時期的状況に即した多様なものがあり、固定的に捉えるべきものではないが、部会の廃止は一面では道北地域研究所と各研究員との距離が遠のくという側面もあった。研究組織体制のあり方については、今後も議論されていく課題となった。なお、1994年度から道北地域研究所に嘱託職員1名の配置があり、研究所の日常業務が円滑に遂行できる体制になった。

開所以来、講演会や公開のシンポジウムを毎年実施してきたが、学務分掌上、公開講座については学内の「公開講座係」が所管してきた。しかし、講演会やシンポジウムは状況によって一体的に運営する方が効果的であることを踏まえ、2000年以降は公開講座を道北地域研究所の事業として位置づけた。開所以来の20年

間に企画した講演会、シンポジウムおよび公開講座の数は、それぞれ25件、28件、24件に及んだ。

「市立名寄短期大学道北地域研究所の20年」の原稿の結びにおいて、前田所長は今後の道北地域研究所のあり方についていくつかの論点を整理した。一つ目は、地域と大学および研究所のあり方に関わるものであった。二つ目は、研究所が目指す研究の方向性についてであり、「地域研究所における研究は、それに対する遠近を含みながら地域課題の何らかの解決を志向するものでなければならない。そうでなければ敢えて研究所による研究は必要ではなく、共同研究・研究一般でこと足りるはずである。従来、個人研究として地域課題を設定し研究を進めてきたが、地域研究所としてのこれに対する戦略はなお不透明であるといえる。(中略) いずれにせよ、研究所としての研究戦略の構想立案は現時の重要な課題であるといえる。」と言及した。最後に、道北地域研究所の組織形態について、今後の市立名寄短期大学の方向性との関連から見直しが迫られていることを指摘した。すなわち、研究所運営の決議機関である研究員協議会の構成員は40名余りであるが、これ以上の構成員数の拡大は研究所運営に無理を来し、一定の組織的再編を検討することも必要となる。

2. 道北地域研究所の最近の活動

2003年3月に発行された「地域と住民」第21号の中で前田所長が一部言及しているように、2000年3月、市立名寄短期大学教授会は将来構想策定委員会が作成した報告書に基づき、短期大学から4大化への改組転換の方向を打ち出した。その後、紆余曲折を経て2003年9月、名寄市議会は市立名寄短期大学の4大化について「早期実現に向けて、地域を挙げて推進する」との決議を採択し、名寄市は本格的に4大化実現計画に取り組むことになった。2004年4月には大学設置準備室を開設し、4大化に向けた多くの課題を解決し、2006年4月、栄養・看護・社会福祉の3学科からなる名寄市立大学保健福祉学部を開学した。

名寄市立大学の開学に伴い、道北地域研究所の機能拡充が求められた。名寄市立大学設置認可申請書には、道北地域研究所の機能拡充について「(前略) 地域研究の推進を主眼とし、年報を発刊して研究成果を公表している他、地域住民を対象とする公開講座や講演会を主催している。研究員は本学教員であるが、学外研究者も特別研究員として研究活動に参加している。この機関の機能を拡充し、大学の基本理念を実現するための方策とする。保健・医療・福祉に係わる複合的共同研究の実施、過疎や高齢化が進行した地域を対象とする研究成果の地域還元、地域への実践的な学術支援の推進が目的である。保健・医療・福祉に係わる行政課題に関する研究や各種団体・企業からの委託研究、住民の生涯学習や地域で実践に携わる人材の卒後教育活動を効果的に実施できる体制を整備する。(後略)」と謳った。また、機能拡充に応える道北地域研究所の機構等についても検討を重ね、2008年5月の教授会において規程の大幅な改正を行った。その主な改正点は、研究所の名称を「名寄市立大学道北地域研究所」とすること、研究所の研究プロジェクトに参加する学内教員を研究員として学長が委嘱すること、名寄市職員を含む学外者を特任研究員として学長が委嘱すること、教授会構成員全員からなる評議員会を最高の決定機関とすること、研究員会議と企画委員会が日常の研究所運営に当たること、顧問制度を廃止し学外者からの助言・提言を諮問会議に一本化することなどであった。また、研究所活動を支援するために1990年に設立された「道北地域研究所友の会」は、ここ数年ほとんど活動の実体がないことから、関係者の協議によって廃止されることになった。

(1) 研究プロジェクトの推進

毎年5月頃、道北地域研究所では学内教員に対して課題研究の公募を行い、評議員会によって了承された5件程度の課題研究を研究プロジェクトとして実施した。研究プロジェクトでは、地域課題の解決に貢献可能と思われる課題研究を選定した。また、研究プロジェクトに関連した研究例会を学内で開催し、地域に関わるさまざまな課題について教員間の認識の共有化を図った。2008年以降の課題研究の一例を次に示すが、

さまざまな地域課題を研究対象として取り上げた。道北地域の人々のQOLを向上させるためのヘルスプロモーション戦略-「名寄市民のQOL実態調査」結果の公表とQOL向上実現の検討-（寺山和幸、2008年）；性教育スキルアップ講座の開催とその効果の分析-名寄市立大学学生を対象にして-（加藤千恵子、2008年）；上川北部地域の看護職員確保対策に関する研究（播本雅津子、2009-2011年）；道北地域資源を活用した地域ブランドの形成と管理に関する研究（清水池義治、2009年）；北海道における子どもの権利と教育について（松倉聡史、2010・2011年）；福祉系大学生の進路としての高齢者福祉事業所のニーズ・意識調査（佐藤みゆき、2012年）；学校給食における地場産物の活用と栄養士業務に関する研究（久保田のぞみ、2012年）。

道北地域研究所（三島徳三所長）では、2008・2009年度の名寄市立大学教育研究費特別枠の支援を受け、「地域資源（油糧作物を含む）活用による道北地域のアグリビジネス起業化戦略に向けた基礎的調査研究」に取り組んだ。この研究プロジェクトには、研究員会議や企画委員会のメンバーの他に、特任研究員である木村洋司参事も参画した。2008年、道北地域研究所が中心となり、油糧用新品種である高オレイン酸ひまわりを名寄市内5か所で試験栽培し、スクリュウ式中型電動搾油機を用いて乾燥種子から搾油を行った。2009年3月、その研究成果を「地域と住民」第27号、49-59ページに発表した。また、2008年3月、本学は名寄市内に本店を構える北星信用金庫との間に、研究成果等の地域社会への還元および緊密な情報交換を通じた産学連携の推進、地域中小企業・地域社会の発展・活性化に寄与することを目的とした産学連携協定を締結した。この産学連携協定に基づき、道北地域研究所は2009年に名寄市内の3ヘクタールの農地で油糧用ひまわりの本格栽培に取り組んだ。さらに、2009・2010年には本学と名寄農業高等学校との高大連携協定に基づき、高校生による油糧用ひまわりの栽培管理と搾油試験についての教育支援も行った。道北地域研究所が取り組んだ油糧用ひまわりの基礎研究成果に基づき、2009年、食農連携促進施設整備事業（農林水産省）の補助を受け、地元企業の（株）名寄給食センターが搾油工場を建設し、ひまわり油「北の耀き」の製造・販売に至った。これら一連の研究成果を「地域と住民」第28号、37-51ページ（2010年3月）と第29号、89-98ページ（2011年3月）に発表した。2011年には、地元養豚業者との産学共同研究により、ひまわり種子の搾油残渣の飼料化についても検討し、品質の高いブランド豚肉（ひまわり畑ポーク）の生産技術の確立に貢献した。

（2）地域シンポジウム

本学の4大化後も、道北地域研究所では市民公開の地域シンポジウムを定期的で開催した。地域シンポジウムには、毎回100名前後の参加があった。

2008年は本学と北星信用金庫との間で締結した産学連携協定に基づき、シンポジウムの統一テーマを「地域資源の掘り起こしと産業化の課題-食料とエネルギー資源を中心に-」として開催した。第一部では木村参事による報告「食料とエネルギーをめぐる内外情勢」と秋田県立大学生物資源学部長の佐藤了氏による講演「地域活性化をめざした秋田菜の花プロジェクト」、第二部では三島所長をコーディネーターとするパネルディスカッションを行った。

2009年のシンポジウムの統一テーマは「地域と大学」であり、第一部は東海大学副学長西村弘行氏による講演「地域と大学-アカデミズムと大学の社会的責任-」、第二部は名寄市立大学の実践として石川みどり氏の報告「地域の小学校・中学校・農業高校・大学が連携した食育への取組み」と大坂祐二氏の報告「障がいのある人たちと『陽だまり』への関わりを中心に」があった。第三部では道北地域研究所諮問会議委員の有識者3氏から本学が地域で果たすべき役割について貴重な提言をいただいた。

2010年のシンポジウムのテーマは「地域と大学-大学・学生と連携した地域活動-」であった。第一部では旭川医科大学医学部教授の吉田貴彦氏による講演「旭川地域における産学官連携の取組み-旭川ウェルビーイング・コンソーシアムの活動-」、第二部では4人のゲストスピーカーから地域と大学に関わる実践報告があった。最後に、松倉所長をコーディネーターとして全体討議を行った。

2011年、北星信用金庫と本学の主催による産学連携地域シンポジウムを行った。テーマ「地域資源の掘り起こしと産業化の取組み-第六次産業化による地域の活性化をめざして-」のもと、(独)医薬基盤研究所薬用植物資源研究センター北海道研究部の柴田敏郎氏による基調講演「薬用植物の寒冷地栽培の確立をめざして」、3人のパネラーによる地域資源の利用状況に関する報告が行われた。

2012年のシンポジウムのテーマは「子育て支援のネットワークづくり-親の育ちを支えあう-」であり、第一部では北星学園大学社会福祉学部准教授の河野和枝氏による基調講演「ネットワークづくりと『親育ち』-さっぽろ子育てネットワークの経験から-」、第二部では支援の現場から見える子育ての現状と課題についてパネルディスカッションを行った。

2013年12月、道北地域研究所は道北の地域振興を考える研究会（神沼公三郎会長）との間で北海道北部の地域振興に関する研究に係る覚書を締結し、道北の地域振興を考える講演会を共催している。

(3) 市民公開講座

道北地域研究所企画委員会では、地域住民の関心が高いと思われる共通テーマを設定し、毎年、3回程度の市民公開講座を実施した。各市民公開講座の参加者数は50名程度であった。2006年以降の市民公開講座の共通テーマは、次の通りである。名寄で考えるスローフード・食育・カントリーライフ（2006年）；子育てで考えること（2007年）；地域の医療・福祉を考える-自立を目指して-（2008年）；いま、生存権を問う（2009年）；子どものしあわせを保障するまちづくり（2010年）；安全・安心なまちづくり（2011年）；地域資源を利用したまちづくり（2012年）。

(4) 道北地域研究所評議員の社会貢献

道北地域研究所評議員でもある本学教員の2008-2012年度の社会貢献の状況を次の表にまとめた。

2008(平成20)年度～2012(平成24)年度 学外委員、講演会・研修会、社会貢献等一覧

平成20年度 学外委員

学科	氏名	委員会等名	期 間	発令先	
栄養	石川みどり	名寄市食育推進協議会委員	委嘱日～平成22年3月末	名寄市長	
		上川北部食育情報連絡会委員	平成20年6月2日	上川北部食育情報連絡会	
		愛別町健康増進計画策定アドバイザー		愛別町長	
		独立行政法人 国際協力機構 技術専門委員	平成20年4月1日～平成21年3月31日	国際協力機構	
		平成20年度市町村健康増進計画策定支援に係るスーパーバイザー	平成20年11月27日 実施日	北海道紋別保健所長	
	大見広規	社会福祉法人道北センター福祉会 評議員	2008.4.1～2010.3.31	道北センター福祉会	
		第47回全国大学保健管理研究会運営委員会委員	平成21年3月1日～平成22年2月28日	第47回全国大学保健管理研究会運営委員会	
	工藤慶太	旭川家庭裁判所名寄支部参与員	平成21年1月1日～平成21年12月31日	旭川家庭裁判所名寄支部長	
		名寄商工会議所 天塩川流域「なよろブランド」創造研究委員	平成21年3月5日	名寄商工会議所	
	小平洋子	社団法人北海道栄養士会理事	平成20年5月26日～平成22年5月25日	北海道栄養士会	
	辻玲子	名寄市図書館協議会委員兼名寄市プラネタリウム館運営委員兼名寄市天文台運営委員	平成20年4月1日～平成22年3月31日	市立名寄図書館	
		名寄市水道事業審議委員	平成20年8月～9月	名寄市水道事業	
	長谷部幸子	名寄市給食センター運営委員	平成20年4月1日～平成22年3月31日	名寄市学校給食センター	
		ネパール・学校保健・栄養改善プロジェクト短期派遣	平成21年3月6日～平成21年3月29日	国際協力機構	
	山本愛子	調理師試験委員会委員	委嘱日～平成21年3月31日	北海道保健福祉部長	
		札幌市外食料理栄養成分表示推進協議会	平成20年7月11日	札幌市保健福祉局保健所	
	看護	太田知子	日本精神科看護技術協会 面接官、口頭試問試験官	平成21年1月24～25日	日本精神科看護技術協会
名寄保健所 精神障がい者地域生活支援事業(上川北部圏域)委託業務に係るプロポーザル審査会委員				北海道上川保健福祉事務所名寄地域保健部長	
加藤千恵子		雄武町保健事業における助産師	平成20年4月1日～平成21年3月31日	雄武町長	
		名寄市思春期保健対策委員会	2008/5/21、平成21年2月24日	北海道名寄保健所長	
久保田宏		過疎地勤務医総合臨床研修運営委員会委員	平成20年7月1日～平成22年6月30日	北海道地域医療振興財団	
坂田三允		日本精神科看護技術協会 政策業務委員会	2008/6/14、7/27、9/14、10/18、11/16、11/23、11/29、3/7	日本精神科看護技術協会	
		日本精神科看護技術協会 教育認定委員会	平成20年7月～9月	日本精神科看護技術協会	
		日本精神科看護技術協会 面接官、口頭試問試験官	平成21年2月14～15日	日本精神科看護技術協会	
		日本精神科看護技術協会 認定審査会委員	平成21年1月1日～平成22年3月31日	日本精神科看護技術協会	
篠原百合子		日本アディクション看護学会 第7回学術大会実行委員	平成20年12月6～7日	日本アディクション看護学会	
寺山和幸		名寄市公害対策審議会委員	平成20年5月20日	名寄市長	
根本和加子		北海道看護協会上川北支部 教育委員	平成20年度	北海道看護協会上川北支部	
播本雅津子		北海道看護協会上川北支部 保健師職能委員長	平成20年度	北海道看護協会上川北支部	
深澤圭子		北海道大学大学院学位論文審査員	平成21年1月13日	北海道大学大学院教育学院長	
村上正和		北海道看護協会上川北支部 広報委員	平成20年度	北海道看護協会上川北支部	
社福		大坂祐二	名寄市社会教育委員	平成20年4月1日～平成22年3月31日	名寄市教育委員会
			名寄市地域包括支援センター運営協議会委員	平成20年4月～平成22年3月31日	名寄市長
	忍博次	財団法人ノーマライゼーション住宅財団 評議員	平成20年3月31日～平成22年3月30日	財団法人ノーマライゼーション住宅財団	
		北海道後期高齢者医療審査会委員	平成20年5月12日～平成23年5月11日	北海道知事	
	北村博幸	留萌教育局管内特別支援連携協議会委員・専門家チーム委員		北海道教育庁留萌教育局長	
		筑波大学教育開発国際協力研究センター学外共同研究員	平成20年7月1日～平成21年3月31日	筑波大学教育開発国際協力研究センター長	
		名寄市特別支援連携協議会	平成20年7月9日	名寄市教育委員会	
		名寄農業高校外部研究委員	平成20年度	北海道名寄農業高等学校長	
		名寄市総合療育センターケース検討会議委員	平成20年度	名寄市福祉事務所長	
	小山充道	社会福祉士試験委員及び精神保健福祉士試験委員	平成20年7月1日～平成21年6月30日	社会福祉振興・試験センター	

学科	氏名	委員会等名	期間	発令先
	松岡是伸	北海道天塩高等学校スクールカウンセラー	平成20年度	北海道天塩高等学校校長
		名寄高校スクールカウンセラー	平成21年1月15日	北海道名寄高等学校校長
		スクールソーシャルワーカー活用事業エリア・スーパーバイザー	平成20年8月19日～平成21年3月31日	北海道教育委員会
		社会福祉法人道北センター福祉 評議員		道北センター福祉会
教養	八幡剛浩	宗谷支庁道営農業農村整備事業等環境情報協議会委員	委嘱日～平成21年3月31日	北海道宗谷支庁長
		名寄市保健医療福祉推進協議会委員	平成20年4月1日～平成22年3月31日	名寄市長
児童	三島徳三	名寄市地産地消推進協議会委員	委嘱日～平成22年3月末	名寄市長
		名寄市特別支援連携協議会	平成20年7月9日	名寄市教育委員会
	家村昭矩	上川北部保健医療福祉連携推進会議小児・周産期医療専門部会委員		北海道上川支庁長
		死亡事例等の検証に係る臨時委員		北海道旭川児童相談所
	糸田尚史	名寄市特別支援連携協議会	平成20年7月9日	名寄市教育委員会
名寄市就学指導委員会委員		平成20年4月1日～平成21年3月31日	名寄市教育委員会	

平成21年度 学外委員

学科	氏名	委員会等名	期間	発令先	
栄養	石川みどり	青年海外協力隊技術専門委員	平成21年4月1日～平成22年3月31日	国際協力機構	
		北海道名寄高等学校学校評議員	平成21年4月1日～平成22年3月31日	北海道名寄高等学校校長	
	大見広規	名寄保健所管内新型インフルエンザ対策医療専門家会議委員			
	工藤慶太	旭川家庭裁判所名寄支部参与員	平成22年1月1日～平成22年12月31日	旭川家庭裁判所名寄支部長	
	千葉昌樹	平成21年度地域保健総合推進事業委員	平成21年5月11日～平成22年3月31日	日本公衆衛生協会	
		日本公衆衛生協会地域保健総合推進事業委員	平成21年7月10日	日本公衆衛生協会	
	西村直道	科学研究費委員会専門委員	平成21年12月1日～平成22年11月30日	日本学術振興会研究事業部	
		三輪孝士	国際協力機構国際緊急援助隊医療チーム中級研修	平成21年12月6日	国際協力機構
	看護	市川正人	日本看護技術学会第8回学術集会実行委員	2009年9月26～27日	日本看護技術学会 第8回学術集会
			北海道看護協会上川北支部教育委員	平成21年度	北海道看護協会上川北支部
久保田宏		第15回地域福祉実践研究全国セミナー 実行委員	平成21年8月28日～29日	名寄市社会福祉協議会	
		上川北部保健医療福祉圏域連携推進会議委員	平成21年9月14日	上川保健福祉事務所	
高岡哲子		市立旭川病院経営委員会外部委員	平成21年11月5日	市立旭川病院経営委員会	
		北海道立衛生学院平成21年度通信制看護学科添削指導員	平成21年度	北海道立衛生学院長	
根本和加子		日本質の心理学会第6回大会実行委員	平成21年4月～平成21年9月末	日本質の心理学会	
		北海道看護協会上川北支部教育委員	平成21年6月24日	北海道看護協会上川北支部	
播本雅津子		北海道看護協会上川北支部拡大役員会委員	平成21年11月11日	北海道看護協会上川北支部	
		名寄保健所自殺予防対策地域連絡会議	平成21年12月4日	北海道名寄保健所長	
細野恵子	日本看護技術学会第8回学術集会実行委員	2009年9月26～27日	日本看護技術学会 第8回学術集会		
	第30回日本看護科学学会学術集会企画委員	平成21年11月～平成23年1月末日	第30回日本看護科学学会学術集会		
村上正和	北海道看護協会上川北支部拡大役員会委員	平成21年度	北海道看護協会上川北支部		
	安田美弥子	板橋区障がい者介護給付費等審査委員会委員	平成21年4月1日～平成23年3月31日	板橋区福祉障がい者福祉課長	
岡部和夫		順天堂大学医学部附属浦安病院倫理委員会委員	平成21年4月1日～平成23年3月31日	順天堂大学医学部附属浦安病院	
	忍博次	第15回地域福祉実践研究全国セミナー 実行委員	平成21年8月28日～29日	名寄市社会福祉協議会	
全国民生委員児童委員連合会作業委員会委員		平成22年1月14日～平成22年10月31日	全国民生委員児童委員連合会		
社福	北村博幸	北海道社会福祉協議会理事	平成21年3月13日～平成23年3月12日	北海道社会福祉協議会	
		北海道名寄農業高等学校特別支援教育校内委員会外部研究委員	平成21年4月～平成22年3月	北海道名寄農業高等学校校長	
	留萌教育局特別支援教育専門委員	平成21年度	北海道教育庁留萌教育局長		
	筑波大学教育開発国際協力研究センター学外共同研究員	平成21年7月1日～平成22年3月31日	筑波大学教育開発国際協力研究センター長		
	名寄市教育委員会特別支援教育専門家チーム委員	平成21年度	名寄市教育委員会		

学科	氏名	委員会等名	期間	発令先	
		名寄市就学指導委員会委員	平成22年3月15日、18日	名寄市就学指導委員会	
	小銭寿子	旭川児童相談所検証委員会アドバイザー 名寄市高齢者虐待防止ネットワーク会議委員	平成22年3月18日	北海道旭川児童相談所長 名寄市長	
	小山充道	放送大学客員教員	平成21年6月1日～ 平成22年3月31日	放送大学学園理事長	
		社会福祉士試験委員、精神保健福祉試験委員	平成21年5月1日～ 平成23年4月30日	社会福祉振興・試験センター	
		日本臨床心理士資格審査委員	平成21年4月1日～ 平成22年3月31日	日本臨床心理士資格認定協会	
		北海道天塩高等学校スクールカウンセラー	平成21年7月16日	北海道天塩高等学校長	
	高田哲	第15回地域福祉実践研究全国セミナー 実行委員	平成21年8月28日～29日	名寄市社会福祉協議会	
	松岡是伸	北海道教育庁スクールソーシャルワーカー活用 事業エリア・スーパーバイザー	委嘱日から平成22年3月 31日	北海道教育庁学校教育局学校安全・健康課長	
	松倉聡史	旭川地方裁判所名寄支部調停委員、旭川家庭裁判所名寄支部家事調停委員	平成21年10月1日～ 平成23年9月30日	旭川地方裁判所名寄支部長、旭川家庭裁判所名寄支部長	
		全国自治体シンポジウム2009札幌 実行委員会委員	平成21年9月3～4日	札幌市長	
	村本徹	宗谷支庁農業農村整備事業環境情報協議会委員	委嘱日から平成22年3月 31日	北海道宗谷支庁長	
	教養	石川貴彦	北海道大学情報基盤センター研究員	2010/2/2～3	北海道大学情報基盤センター長
		白井暢明	石狩川上流川づくり懇話会委員	年1回程度	北海道開発局旭川開発建設部
寺山和幸		名寄市公害対策審議会委員	平成21年度	名寄市長	
三島徳三		北海道立サンピラーパーク指定管理者候補者選 定委員会委員		北海道知事	
八幡剛浩		第15回地域福祉実践研究全国セミナー 実行委員	平成21年8月28日～ 29日	名寄市社会福祉協議会	
児童	家村昭矩	名寄市特別支援連携協議会委員	平成21年11月5日	名寄市特別支援連携協議会	
		旭川家庭裁判所民事調停委員・家事調停委員	平成21年4月1日～ 平成23年3月31日	旭川地方裁判所名寄支部長・旭川家庭裁判所名寄支部長	
	鈴木文明	北海道教育大学教員選考専門分野研究業績員		北海道教育大学副学長	
	傳馬淳一郎	上川教育局子育て支援アドバイザー	平成21年11月26日	北海道教育庁上川教育局長	
名寄市保健医療推進協議会専門部会（児童部会）委員		平成21年度	名寄市保健医療福祉推進協議会		
鹿嶋桃子	美深育成園非常勤こども心理士	平成21年4月1日～ 平成22年3月31日	美深育成園		

平成22年度 学外委員

学科	氏名	委員会等名	期間	発令先	
栄養	安藤清一	特別研究員等審査会専門委員	平成22年8月1日～ 平成23年7月31日	日本学術振興会	
		国際事業委員会書面審査員	平成22年8月1日～ 平成23年7月31日	日本学術振興会	
	石川みどり	北海道栄養士会理事	平成22年5月23日～ 平成24年5月22日	北海道栄養士会	
		幌延町健康増進計画策定事業アドバイザー	平成22年4月1日～ 平成23年3月31日	幌延町長	
		第8回日本栄養改善学会北海道支部学術総会座 長	平成22年12月4日	第8回日本栄養改善学会北海道 支部学術総会、日本栄養改善学 会北海道支部	
		独立行政法人国際協力機構技術専門員	平成22年4月1日～ 平成23年3月31日	国際協力機構	
	大見広規	幌延町健康増進計画策定事業アドバイザー	平成22年4月1日～ 平成23年3月31日	幌延町長	
	工藤慶太	旭川家庭裁判所名寄支部参与員	平成23年1月1日～ 平成23年12月31日	旭川家庭裁判所名寄支部長	
		新たなよるブランド商品開発プロジェクト委員	平成22年6月21日	名寄商工会議所	
	高橋正子	名寄市食育推進協議会委員	平成22年7月28日～ 平成24年3月31日	名寄市長	
		日本公衆衛生協会地域保健総合推進事業検討会 委員	平成23年2月22日、 平成22年10月28日	日本公衆衛生協会	
	千葉昌樹	なよる健康まつり実行委員会委員	平成22年度	なよる健康まつり実行委員会	
		長谷部幸子	北海道幼児の生活習慣改善事業検討会委員	平成22年7月～ 平成24年3月31日	北海道保健福祉部長
			名寄市学校給食センター運営委員	平成22年4月1日～ 平成24年3月31日	名寄市学校給食センター
	三輪孝士	北海道栄養士会理事	平成22年5月23日～ 平成24年5月22日	北海道栄養士会	
	看護	小野善昭	北海道看護協会上川北支部教育委員	平成22年7月13日、 10月22日、30日	北海道看護協会上川北支部

学科	氏名	委員会等名	期間	発令先
		北海道看護協会上川北支部教育委員	平成23年2月5日、平成22年10月12日、9月14日、8月6日、6月22日	北海道看護協会上川北支部
	澤田成子	北海道立衛生学院通信制看護学科添削指導員 北海道看護協会理事	平成22年度 平成22年度	北海道立衛生学院 北海道看護協会
	水野芳子	北海道看護協会上川北支部拡大役員会	平成23年2月15日	北海道看護協会上川北支部
	長谷川博亮	上川北部地域自殺対策連絡会議作業部会	平成23年3月14日	北海道名寄保健所長
	播本雅津子	北海道看護協会上川北支部拡大役員会 上川北部地域自殺対策連絡会議作業部会	平成23年2月15日 平成22年12月2日	北海道看護協会上川北支部 北海道名寄保健所長
	村上正和	北海道看護協会上川北支部拡大役員会	平成23年2月15日	北海道看護協会上川北支部
	結城佳子	北海道看護教育施設協議会上川・宗谷地区会	平成23年2月25日	北海道看護教育施設協議会
社福	青木紀	(財)服部国際奨学財団選考委員	平成22年4月1日～平成23年3月31日	服部国際奨学財団
		北海道子どもの未来づくり審議会会長	平成22年7月9日	北海道保健福祉部子ども未来推進局長
		上川北部保健医療福祉圏域連携推進会議委員	平成22年4月1日～平成24年3月31日	北海道上川総合振興局長
	大坂祐二	名寄市総合計画策定審議会委員	平成22年2月21日～平成23年10月末	名寄市長
	小野寺理佳	北海道大学大学院教育学院博士学位論文審査員	平成23年2月17日	北海道大学大学院教育学院長
		名寄市総合計画策定審議会委員	平成22年2月21日～平成23年10月末	名寄市長
		北海道国土利用計画審議会委員	平成23年2月1日～平成26年1月31日	北海道知事
		北海道名寄高等学校学校評議員	平成22年度	北海道名寄高等学校長
	小銭寿子	名寄保健所養育支援体制運営会議助言者	平成23年3月3日4日	北海道上川総合振興局保健環境部名寄地域保健室長
		名寄市高齢者虐待防止ネットワーク会議委員	平成23年3月17日	名寄市長
		北海道教育庁スクールソーシャルワーカー エリア・スーパーバイザー	平成22年5月25日～平成23年3月31日	北海道教育庁学校教育局参事
		社会福祉法人道北センター福祉会評議員	平成22年4月1日～平成24年3月31日	道北センター福祉会
	小林宏	北海道天塩高等学校スクールカウンセラー	平成23年2月14日、平成22年7月15日	北海道天塩高等学校長
	佐藤みゆき	名寄市第3期地域実践計画策定委員(社会福祉協議会)	平成22年12月から平成24年度	名寄社会福祉協議会
		名寄市保健医療福祉推進協議会地域福祉部会委員	平成22年12月～平成24年3月31日	名寄市長
		名寄市総合計画推進市民委員会委員	平成22年4月1日～平成24年3月31日	名寄市長
	瀬戸口裕二	名寄市総合計画策定審議会委員	平成22年2月21日～平成23年10月末	名寄市長
		名寄市特別支援連携協議会委員		名寄市教育委員会、名寄市特別支援連携協議会
		名寄市特別支援教育専門家チーム委員		名寄市教育委員会
名寄市総合療育センターケース会議アドバイザー			名寄市健康福祉部	
村本徹	名寄市総合計画策定審議会委員	平成22年2月21日～平成23年10月末	名寄市長	
李相済	名寄市地域包括支援センター運営協議会委員 名寄市保健医療福祉推進協議会委員	平成22年度	名寄市長	
教養	石川貴彦	北海道大学情報基盤センター協同研究員	平成23年3月2日～5日	北海道大学情報基盤センター長
	清水池義治	名寄市総合計画策定審議会委員	平成22年2月21日～平成23年10月末	名寄市長
	関朋昭	名寄市スポーツ審議会委員	平成22年4月1日～平成24年3月31日	名寄市教育委員会
	寺山和幸	名寄市公害対策審議会委員	平成22年度	名寄市長
		天塩川水系及び道北河川水質調査員	平成22年7月1日、2日	名寄市長
		名寄市保健医療福祉推進協議会委員	平成22年4月1日～平成24年3月31日	名寄市長
古牧徳生	関西倫理学会委員	平成22年11月6、7日		
児童	家村昭矩	名寄市特別支援連携協議会会長		名寄市教育委員会、名寄市特別支援連携協議会
		旭川家庭裁判所名寄支部民事調停委員、家事調停委員	平成23年4月1日～平成25年3月31日	旭川地方裁判所名寄支部長、旭川家庭裁判所名寄支部長
		名寄保健所上川北部圏域連携推進会議小児・周産期医療専門部会委員	平成22年9月28日	北海道名寄保健所長
		北海道立旭川肢体不自由児総合療育センター苦情解決第三者委員	平成22年4月1日～平成25年3月31日	北海道立旭川肢体不自由児総合療育センター院長
		北海道専門里親認定研修講師	平成22年9月15日～平成23年2月14日	北海道保健福祉部子ども未来推進局長

学科	氏名	委員会等名	期間	発令先
	糸田尚史	就学時健康知的発達スクリーニング検査心理発達検査員	平成22年11月1日～平成23年3月31日	名寄市教育委員会
		名寄市特別支援連携協議会委員	平成22年度	名寄市教育委員会、名寄市特別支援連携協議会
		名寄市就学指導委員会委員(部会)	平成22年度	名寄市教育委員会
		北海道立特別支援教育センター研究協力者	平成22年8月6日～平成23年3月20日	北海道立特別支援教育センター所長
	中島常安	全国保育士養成協議会北海道ブロック協議会理事	平成22年4月1日～平成24年3月31日	全国保育士養成協議会北海道ブロック協議会
三国和子	名寄市青少年問題協議会委員	平成22年4月1日～平成24年3月31日	名寄市長	

平成23年度 学外委員

学科	氏名	委員会等名	期間	発令先	
栄養	石川みどり	技術専門委員	平成23年4月1日～平成24年3月31日	国際協力機構	
		AIN委員	平成23年4月1日～平成25年3月31日	味の素株式会社	
	梅澤敦子	上川北部食育情報連絡会委員	平成23年10月～現在		
	大見広規	名寄地区介護認定審査会委員	平成23年4月1日～平成25年3月31日	名寄市長	
		名寄市立総合病院倫理委員会委員	平成23年4月1日～平成25年3月31日	名寄市立総合病院院長	
	工藤慶太	一般社団法人食物繊維学会評議員	平成23～24年度	食物繊維学会	
		天塩川流域「なよろブランド」創造研究事業委員	平成21～22年度	名寄市商工会議所	
		旭川家庭裁判所名寄支部参与員	平成24年1月1日～12月31日	旭川家庭裁判所名寄支部長	
	久保ちづる	一般社団法人 日本病態栄養学会評議員	平成20年1月～	日本病態栄養学会	
		日本臨床栄養学会北海道地方会幹事	平成20年2月～	日本臨床栄養学会北海道地方会	
	久保田のぞみ	社団法人北海道栄養士会研究教育栄養士協議会運営委員	平成22年4月1日～平成24年3月31日		
	千葉昌樹	全国保健所管理栄養士会副会長	平成22年4月1日～	全国保健所管理栄養士会	
		財団法人日本公衆衛生協会地域保健総合推進事業検討委員	平成22年4月1日～平成24年3月31日	日本公衆衛生協会	
	長谷部幸子	なよろ健康まつり実行委員会委員	平成22年4月1日～	名寄市	
		名寄市学校給食センター運営委員	平成22年4月1日～	名寄市教育委員会	
		幼児の生活習慣改善事業検討委員	平成22年7月8日～平成24年3月31日	北海道保健福祉部	
		北海道保育問題研究集会身体づくり分科会運営委員	平成22年4月1日～平成24年3月31日	北海道保育問題研究会	
	看護	市川正人	NPO法人 SIDS家族の会 北海道地区 医学アドバイザー	平成23年度～現在	
			社団法人北海道看護協会上川北支部教育委員		北海道看護協会上川北支部
		小野善昭	社団法人北海道看護協会上川北支部教育委員	平成21年6月～平成23年5月	
加藤千恵子		日本母性衛生学会評議員	平成23・4年度		
		北海道公衆衛生学会評議員	平成23・4年度		
		北海道助産師会勤務助産師部会長・教育部担当名寄東小学校評議員	平成23・4年度		
鉢呂美幸		北海道看護協会上川北支部 保健師職能委員	平成23年6月～平成24年4月	北海道看護協会上川北支部	
播本雅津子		北海道看護協会上川北支部保健師職能委員長	平成23年度	北海道看護協会上川北支部	
		上川北部地域看護職員確保にかかる企画検討委員	平成23年度	名寄保健所	
細野恵子		なよろ市立天文台きたすばる運営委員会副委員長	平成22～23年度	名寄市教育委員会	
		北海道看護協会上川北支部 監事	平成23年6月～現在	北海道看護協会上川北支部	
水野芳子		北海道成育看護研究会 評議員	平成23年9月～現在	北海道成育看護研究会	
		北海道温養法研究会 世話人会副代表	平成21年1月～現在	北海道温養法研究会	
村上正和		北海道看護協会上川北支部 会計	平成22年6月～現在	北海道看護協会上川北支部	
		北海道看護協会上川北支部 広報委員長	平成23年6月～平成24年5月	北海道看護協会上川北支部	
社福		青木紀	選考委員	平成23年4月1日～平成24年3月31日	服部国際奨学財団
			博士学位論文審査員		北海道大学大学院教育学院長
		大坂祐二	教育委員会事務の管理及び執行状況の点検評価に係る評価委員	平成22年度分評価	名寄市教育委員会

学科	氏名	委員会等名	期間	発令先
	忍正人	名寄市風連地区地域振興審議会委員	平成23年7月～2年	名寄市長
	小野寺理佳	北海道子どもの未来づくり審議会会長		
		北海道名寄高等学校学校評議員	平成23年4月1日～平成24年3月31日	北海道名寄高等学校
	小銭寿子	北海道国土利用計画審議会委員		
		北海道教育庁スクールソーシャルワーカー活用事業・エリアスーパーバイザー	委嘱日～平成24年3月31日	北海道教育庁学校教育局
		北海道障がい者就労推進委員会委員	就任日～平成24年5月19日	北海道知事
		社会福祉法人道北センター福祉会 評議員		
	小林宏	北海道公立学校スクールカウンセラー	平成23年度	北海道名寄高等学校校長
		北海道公立学校スクールカウンセラー	平成23年度	北海道天塩高等学校校長
		北海道公立学校スクールカウンセラー	平成23年度	北海道名寄産業高等学校校長
	清野茂	名寄市保健医療福祉推進協議会障害者部会委員	平成23年6月～平成24年3月31日	名寄市保健医療福祉推進協議会
	瀬戸口裕二	特別支援教育専門家チーム委員		名寄市教育委員会
		名寄市特別支援連携協議会委員		名寄市教育委員会
	黄京性	平成23年度北海道公立学校スクールカウンセラー		北海道遠別農業高等学校長
		名寄市保健医療福祉推進協議会高齢者部会委員	平成23年度～	
	松倉聡史	民事調停委員、家事調停委員	平成23年10月1日～平成25年9月30日	旭川地方裁判所名寄支部、旭川家庭裁判所名寄支部
	村本徹	名寄市プロポーザル選定委員会委員	2011年10月～2013年3月	
		日本農村計画学会評議員 2011年度		
	吉中季子	日本建築学会論文集査読委員 2011年度		
		名寄市国民健康保険事業安定化推進本部委員		名寄市国民健康保険事業安定化推進本部
北海道名寄市高等学校評議員		平成23年度	北海道名寄市高等学校	
李相済	ホームレス支援人材育成委員会 委員	承認日～2011年6月末	ホームレス支援全国ネットワーク	
	名寄市保健医療福祉推進協議会委員			
	名寄市地域包括支援センター運営協議会委員			
	名寄市地域密着型サービス運営委員会委員			
教養	石川貴彦	日本商工会議所、日商PC検定試験委員	2011年度	
	清水池善治	「webベースシステムの円滑な運用を目的としたシステムの分割・統合技術に関する研究」共同研究者		北海道大学情報基盤センター長
		名寄市公設地方卸売市場運営委員会委員	平成22年12月～平成24年12月	名寄市
		名寄市総合計画策定審議会産業経済部会委員	平成23年2月～10月	名寄市
		天塩川学セミナーコーディネーター	平成23年6月～平成24年3月	天塩川流域活性化コンソーシアム
		名寄市農業・農村振興計画検討委員会委員	平成23年6月～平成24年3月	名寄市
	北・北海道中央圏定住自立圏共生ビジョン懇談会	平成23年12月から平成25年3月	北・北海道中央圏定住自立圏共生ビジョン懇談会	
	関朋昭	スポーツ推進委員会委員	2010年度から2011年度	名寄市
	寺山和幸	名寄市保健医療福祉推進協議会委員	平成22年4月1日～現在	名寄市
		名寄市公害対策研究班代表	平成8年4月1日～現在	名寄市
		治験審査委員会委員	平成10年4月1日～現在	名寄市立総合病院
		臨床研修管理委員会委員	平成16年4月1日～現在	名寄市立総合病院
平成23年度北海道旭川高等看護学院学校関係者評価委員		平成23年4月28日～平成24年3月31日	北海道旭川高等看護学院	
児童	糸田尚史	こども心理士	平成23年4月1日～平成24年3月31日	美深育成園
		名寄市特別支援連携協議会委員		名寄市教育委員会
	中島常安	名寄市就学指導委員会委員		名寄市就学指導委員会
		平成23年度専門委員会委員		全国保育士養成協議会

平成24年度 学外委員

学科	氏名	委員会等名	期間	発令先
栄養	安藤清一	名寄市ボランティアセンター運営委員会委員長	平成24年4月1日～平成26年3月31日	名寄市社会福祉協議会
	大見広規	名寄地区介護認定審査会委員	平成25年4月1日～平成27年3月31日	名寄市長 加藤剛士
		名寄市立総合病院倫理委員会委員	平成25年4月1日～平成27年3月31日	名寄市立総合病院長 和泉裕一

学科	氏名	委員会等名	期間	発令先
	工藤慶太	旭川家庭裁判所名寄支部参与員	平成25年1月1日～ 平成25年12月31日	旭川家庭裁判所名寄支部
	千葉昌樹	なよろ健康まつり実行委員会 平成24年度地域保健総合推進事業「保健所管理 栄養士の検証に基づく栄養・食生活支援の評価 と人材の育成に関する研究事業」委員	承諾の日から 平成25年3月31日	日本公衆衛生協会
	長谷部幸子	名寄市学校給食センター運営委員	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市教育委員会
看護	市川正人	北海道看護協会上川北支部教育委員	24.4.1～25.2.23	北海道看護協会
	岩坂信子	北海道看護協会常任委員会 学芸委員会	承認した日から 平成26年5月31日	北海道看護協会
	加藤千恵子	名寄東小学校評議委員	H22-H26年3月	名寄教育委員会
		北海道公衆衛生学会評議員	H17-H26年11月30日	北海道公衆衛生学会
		日本助産師会北海道支部勤務助産師部会長	H23-H25年定時総会ま で	北海道助産師会
		日本母性衛生学会評議員	H23-H25年定時総会ま で	社団法人日本母性衛生学会
	佐藤郁恵	名寄保健所地域在宅緩和ケア連絡会		北海道上川総合振興局保健環境 部名寄地域保健室
	鉢呂美幸	北海道看護協会上川北支部 保健師職能委員	24.4.1～25.3.31	北海道看護協会
	播本雅津子	名寄市天文台運営委員（委員長）	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市教育委員会
		名寄保健所看護職員確保にかかる企画検討会議 委員	平成18年3月～現在	名寄保健所
		北海道看護協会上川北支部保健師職能委員（委 員長）	平成23年4月～ 平成25年3月	北海道看護協会
	細野恵子	北海道看護協会上川北支部監事	24.4.1～25.2.23	北海道看護協会
水野芳子	北海道看護協会上川北支部会計	24.4.1～24.6.16	北海道看護協会	
村上正和	北海道看護協会上川北支部広報委員	24.4.1～24.6.16	北海道看護協会	
社福	青木紀	財団法人 服部国際奨学財団 選考委員	平成24年4月1日～ 平成25年4月1日	財団法人 服部国際奨学財団
	大坂祐二	名寄市総合計画推進市民委員会委員	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市
	忍正人	名寄市社会福祉協議会 総務部会委員	平成24年4月1日～ 平成25年3月31日	名寄市社会福祉協議会
		風連地区地域振興審議会 委員	平成24年4月1日～ 平成25年3月31日	名寄市役所 風連支所 住民課
		風連地区まちづくり協議会 委員	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市役所 風連支所 住民課
		北海道地域福祉学会 理事	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	北海道地域福祉学会
	小野寺理佳	北海道国土利用計画審議会委員	平成20年4月1日～	北海道
	小銭寿子	北海道教育委員会スクールソーシャルワーカー 活用事業 エリアスーパーバイザー	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	北海道教育庁学校教育局
		北海道障がい者就労支援推進委員	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	北海道保健福祉部福祉局
		社会福祉法人道北センター福祉会評議員	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	社会福祉法人道北センター福祉 会
		専門職	平成24年7月1日～ 平成26年3月31日	社会福祉法人あさひかわ いの ちの電話
	小林宏	北海道遠別農業高等学校スクールカウンセラー	平成24年度	北海道遠別農業高等学校
		北海道天塩高等学校スクールカウンセラー	平成24年度	北海道天塩高等学校
		北海道公立学校スクールカウンセラー	平成24年度	北海道名寄高等学校
		北海道名寄産業高等学校スクールカウンセラー	平成24年度	北海道名寄産業高等学校
	清野茂	名寄市障害者自立支援協議会委員	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市
	瀬戸口裕二	名寄市総合計画推進市民会議委員	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市
		名寄市特別支援連携協議会委員長	平成23年4月1日～ 平成25年3月31日	名寄市
名寄市総合療育センター運営委員長		平成23年4月1日～ 平成25年3月31日	名寄市	
名寄市特別支援教育専門家チーム		平成23年4月1日～ 平成25年3月31日	名寄市	
鹿児島大学附属特別支援学校研究助言				
筑波大学附属大塚特別支援学校研究助言				
北海道美深高等支援学校研究助言				
岩手県立気仙光陵特別支援学校研究会講演				
旭川市特別支援教育専門性向上事業講師		平成24年6月20日	旭川市教育委員会	
名寄市立大学免許法認定公開講座講師 ジョブコーチ養成講座（厚労省認定）講師		平成24年6月10日	特定非営利活動法人なよろ地方 職親会	

学科	氏名	委員会等名	期間	発令先	
		北海道紋別養護学校研究助言者	平成24年4月1日～ 平成25年3月31日	北海道紋別養護学校	
		道北地区養護教諭研究会講師			
		音威子府町教育研究会講師	平成24年11月12日	音威子府村教育推進協議会	
		北海道言語教育研究会講師			
		道北地区ことばと聞こえ教育研究会講師			
		北海道士別翔雲高校スクールカウンセラー		北海道士別翔雲高校	
			北海道遠別農業高校		
	田中利宗	上川北部地域職業訓練等推進協議会員	平成24年11月～	名寄市社会福祉協議会	
	黄京性	名寄市保健医療福祉推進協議会高齢者部会委員	平成20年7月～	名寄市	
		特別養護老人ホームタサラン運営委員	平成24年11月～	韓国イチョン市	
		ノトルダム福祉館諮問委員	平成25年3月～	韓国ノトルダム福祉館	
	松倉聡史	北海道観光大使	平成25年4月～	北海道	
		旭川家庭裁判所所属家事調停委員	平成15年4月1日～ 現在に至る	旭川地方裁判所	
		旭川地方裁判所及び名寄簡易裁判所所属民事調停委員	平成15年4月1日～ 現在に至る	旭川地方裁判所	
		司法委員	平成25年1月1日～ 現在に至る	旭川地方裁判所	
		社会福祉法人道北センター福祉会評議員	平成24年4月1日～ 現在に至る	社会福祉法人道北センター福祉会	
		社会福祉法人美深育成園理事	平成23年4月1日～ 平成25年3月	社会福祉法人美深育成園	
	吉中季子	平成24年度北海道名寄高等学校学校評議員	平成24年4月1日～ 平成25年3月31日	北海道名寄高等学校	
	教養	加藤隆	独立行政法人日本学生生活支援機構 評価委員会評価委員	平成23年4月1日～ 平成25年3月31日	独立行政法人日本学生生活支援機構
			学校法人光華学園北見北光幼稚園 理事	平成20年4月1日～ 平成25年3月31日	学校法人光華学園北見北光幼稚園
		清水池義治	名寄市総合計画推進市民委員会・委員	平成24年4月～ 平成26年3月	名寄市長 加藤剛士
北・北海道中央圏定住自立圏共生ビジョン懇談会・座長			平成24年12月～ 平成26年3月	北・北海道中央圏定住自立圏	
天塩川「環境・交流」リンゲージプロジェクト・タスクフォース・メンバー			平成24年4月～ 平成26年3月	上川総合振興局	
関朋昭		名寄市スポーツ振興審議会委員	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市教育委員会	
寺山和幸		名寄市公害調査研究班調査研究員（現在、代表）	平成8年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市長 桜庭康喜	
		名寄市保健医療推進協議会委員	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市長 加藤剛士	
		名寄市立総合病院治験審査委員	平成10年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市立総合病院長 久保田宏	
		名寄市立総合病院臨床研修管理委員	平成16年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市立総合病院長 佐古和廣	
	北海道立旭川高等看護学院学校関係者評価会議委員	平成25年4月26日	北海道立旭川高等看護学院長 竹内徳男		
マーティン・メドウズ	平成24年度文部科学省指定事業「英語力を強化する指導改善の取組」運営指導委員		北海道豊富高等学校		
児童	糸田尚史	名寄地域子ども発達支援推進連絡協議会委員（研修部会長）	平成24年4月1日～ 平成25年3月31日	名寄市（健康福祉部こども未来課）	
		名寄市就学指導委員会（副委員長）	平成24年4月1日～ 平成25年3月31日	名寄市教育委員会（教育部学校教育課）	
		名寄市特別支援教育連絡協議会委員	平成24年4月1日～ 平成25年3月31日	名寄市教育委員会（教育部学校教育課）	
	今野道裕	名寄市社会福祉協議会評議員	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	社会福祉法人名寄市社会福祉協議会（会長 中村稔）	
	中島常安	運営委員	平成24年4月1日～ 平成25年3月31日	学童保育コロボックル所長	
	三国和子	名寄市青少年問題協議会委員	平成24年4月1日～ 平成26年3月31日	名寄市長	
	宮内俊一	上川北部保健医療福祉圏域連携推進会議小児・周産期医療専門部会	平成24年6月28日～ 平成26年6月27日	北海道上川総合振興局（会長 越前雅裕）	

平成20年度 講演会・研修会（学会等の講演は除く）、社会貢献等

学科	氏名	名称	実施日	依頼先	
栄養	石川みどり	平成20年度上川支庁管内町村老人クラブリーダー研修会 講師	平成20年10月22日	上川支庁地区老人クラブ連合会	
		平成20年度名寄保健所管内行政栄養士研修会 講師	平成20年11月28日	北海道名寄保健所長	
		北海道栄養士会留萌支部 第2回研修会講師	平成20年10月25日	北海道栄養士会 留萌支部	
		平成20年度市町村健康増進計画策定支援研修会 講師	平成21年1月30日	北海道紋別保健所長	
		愛別町健康増進計画策定委員会 講師	平成20年12月15日	愛別町長	
	太田徹	「調理師試験事前講習会」講師「食文化概論・食品学」	平成20年7/26, 8/2	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	大見広規	平成20年度上川管内学校給食研究協議会栄養士部会研修会講師	平成20年5月20日	上川管内学校給食研究協議会	
		北海道中標津保健所 母子保健研修会 講師	平成21年2月13日	北海道中標津保健所長	
	工藤慶太	旭川市「あさひかわ食育セミナー」講師	平成20年9月21日	旭川市長	
		北海道高等学校PTA連合会名寄支部 安全対策研修会 講師	平成20年11月28日	北海道高等学校PTA連合会名寄支部長	
		製麺起業科（再チャレンジコース）講師「食品衛生学」	平成20年10/2, 10/3, 10/6, 10/16	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		「調理師試験事前講習会」講師「食品衛生学」	平成20年7/26, 8/2	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	小平洋子	機動職業訓練（介護ビジネス）講師「家事援助の方法」	平成20年9月1日～11月14日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		住民講座（ホームヘルパー2級養成講座）講師「家事援助の方法」	平成20年8月1日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	西村直道	「調理師試験事前講習会」講師「栄養学」	平成20年7/26, 8/2	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	長谷部幸子	第32回札幌市私保連保育研究大会助言者	平成20年10月4日	札幌市私立保育所連合会	
		北海道保育協議会 平成20年度北海道保育研究大会 課題別講義・討議講師	平成20年6月5, 6日	北海道保育協議会	
	三輪孝士	美深町教育委員会 美深町伝承遊学館まつり「ふるさと記念日」講演講師	平成20年8月10日	美深町教育委員会	
		平成20年度名寄保健所管内行政栄養士研修会 講師	平成20年11月28日	北海道名寄保健所長	
		「調理師試験事前講習会」講師「調理理論」	平成20年7/26, 8/2	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		製麺起業科（再チャレンジコース）講師「調理理論」	平成20年10/2, 10/3, 10/6, 10/16	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	看護	池田正子	看護部研修会 講師	平成20年8月8日	市立土別総合病院
			北海道看護協会「今、求められている新人教育研修会」（稚内市担当）講師	平成20年7月30, 31日	社団法人 北海道看護協会
		太田知子	平成20年度精神障がい者家族学習会 講師	平成20年8月26日	北海道名寄保健所長
			植草学園短期大学連続セミナー 講師	平成20年7/31, 8/1, 10/23, 10/24	植草学園短期大学長
		加藤千恵子	雄武町 平成20年度 母乳育児相談 講師	平成20年4月10日	雄武町長
			雄武町 平成20年度 母乳育児相談 講師	平成20年6月26日	雄武町長
美深町 育児支援事業「ままの会」講師			平成20年6月12日	美深町長	
性教育講座（ピアエデュケーション）講師			平成20年9月12日、16日、19日	北海道名寄光凌高等学校長	
名寄東小学校 5年、6年授業 講師			平成20年9月26日、10月5日、11月19日	名寄市立名寄東小学校長	
平成20年度 パパママ学級、母乳育児相談 講師			平成20年11月4日	雄武町長	
美深高等養護学校 講演会 講師			平成20年11月21日	北海道美深高等養護学校長	
就学前家庭教育セミナー「タッチケア」講師			平成21年2月10日	下川町公民館	
平成20年度 母乳育児相談、児童ふれあい事業 講師			平成21年2月16日	雄武町長	
平成20年度 パパママ学級、母乳育児相談 講師	平成20年8月19日		雄武町町		
住民講座（ホームヘルパー2級養成講座）講師「腰痛の予防等援助者の健康管理」	平成20年8月1日～9月30日		上川北部地域人材開発センター運営協会		
機動職業訓練（介護ビジネス）講師「腰痛の予防等援助者の健康管理」	平成20年9月1日～11月14日	上川北部地域人材開発センター運営協会			
久保田宏	訪問介護員2級および居宅介護従業者2級 講師	平成20年12月11, 12日	北海道名寄光凌高等学校長		
小林美子	「一般精神科看護研修会」講師	平成21年2月9日	日本精神科看護技術協会		
紺谷英司	ガイドヘルパー養成講座講師	平成20年11月29日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
	住民講座（ホームヘルパー2級養成講座）講師「障害・疾病の理解」	平成20年8月1日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
坂田三允	日本精神科看護技術協会 北海道支部 第47回支部総会・研修会 講師	平成20年4月18日	日本精神科看護技術協会 北海道支部		
	日本精神科病院協会 北海道支部 平成20年度日精協北海道支部看護部長会第16回研修会講師	平成20年5月31日	日本精神科病院協会 北海道支部		

学科	氏名	名称	実施日	依頼先
		国立病院機構さいがた病院 看護部院内教育講師	平成20年6月20日	国立病院機構 さいがた病院
		日本精神科看護技術協会 広島県支部 第3回支部研修会 講師	平成20年8月28日、29日	日本精神科看護技術協会 広島県支部
		精神障害者ケースマネジメント事業協力病院職員向け研修会 講師	平成20年8月7日、8日	静岡市こころの健康センター
		砂川市立病院 新人看護師教育研修会、講師	平成20年10月10日	砂川市立病院
		国立病院機構 さいがた病院 看護部院内教育講師	平成20年11月14日	国立病院機構 さいがた病院
		日本精神科看護技術協会 宮城県支部 一般研修会 講師	平成20年11月15日	日本精神科看護技術協会 宮城県支部
		さっぽろ香雪病院 学術研修会 講師	平成20年8月21日	五風会 さっぽろ香雪病院
		静岡市こころの健康センター 平成20年度静岡市保健師対象地域精神保健研修会 講師	平成20年11月21日	静岡市こころの健康センター
		北海道 平成20年度看護教員養成講習会 講師	平成20年10月1日	北海道保健福祉部長
		「エキスパートナース養成研修Ⅰ」講師	平成20年6月19日	日本精神科看護技術協会
		済生会横浜市南部病院 「リーダーシップ研修」講師	平成20年12月20日	済生会横浜市南部病院
		「第2学年出前授業」講師	平成20年12月4日	北海道深川西高等学校長
		第13回「精神科認定看護師」認定審査会	平成21年3月6日	日本精神科看護技術協会
		「精神科看護管理コースⅡ（教育担当者）」講師	平成20年11月17日	日本精神科看護技術協会
		「精神科看護実習指導者研修会Ⅱ」講師	平成20年11月10日	日本精神科看護技術協会
		社団法人日本精神科看護技術協会「一般精神科看護研修会」講師	平成20年12月1日	日本精神科看護技術協会
		社団法人 日本精神科看護技術協会 政策業務委員会	2009/1/10、2/7	日本精神科看護技術協会
篠原百合子		医療法人社団 榎会 榎本クリニック アルコールデイケア学習会 講師	平成20年8/2、9、16、23、9/6、13	榎本クリニック
		秋元病院 看護課程学習会 講師	平成20年10月23日	秋元病院
		医療法人社団 榎会 アルコールデイケア学習会 講師	平成20年10/25、11/1、11/8、11/21、11/28、12/13、12/20、12/27	榎本クリニック
		秋元病院「院内症例研究発表会」講師	平成21年2月16日、23日	秋元病院（千葉県鎌ヶ谷市）
		石川県立看護大学 大学院講師	平成20年10月10日	石川県立看護大学
澁谷恵子		北海道看護協会道南支部 研修会講師	平成20年9月26、27日	北海道看護協会道南支部
		名寄市立総合病院 看護職員研修 講師	平成20年5月27日、6月24日	名寄市立総合病院
		砂川市立病院 臨床実習指導者研修会 講師	平成20年7月28日、10月10日	砂川市立病院
		国立病院機構 函館病院 看護部特別講演会 講師	平成20年12月22日	独立行政法人国立病院機構 函館病院
		「プリセプター研修」講師	平成21年3月3日	士別市立病院
		平成20年度看護教員養成講習会 講師「看護教育方法（臨地実習）」	平成20年8/28、8/29、9/3、9/9、9/17	北海道保健福祉部長
須藤桃代		子どもと性の健康教育 講師	平成20年6月14日	北海道名寄保健所長
		平成20年度看護教員養成講習会 講師「看護学校管理」	平成20年9/19、10/3、11/7、11/14、11/21	北海道保健福祉部長
寺山和幸		製麺起業科（再チャレンジコース）講師「衛生法規・公衆衛生学」	平成20年10/2、10/3、10/6、10/16	上川北部地域人材開発センター運営協会
		「調理師試験事前講習会」講師「衛生法規・公衆衛生学」	平成20年7/26、8/2	上川北部地域人材開発センター運営協会
根本和加子		北海道重症心身障害児(者)を守る会 滝川地区中空知地区守る会介護研修会 講師	平成20年10月11日	北海道重症心身障害児(者)を守る会 滝川地区
畑瀬智恵美		住民講座（ホームヘルパー2級養成講座）講師「食事の介護、排泄・尿失禁」	平成20年8月1日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会
播本雅津子		北海道宗谷保健福祉事務所 管内市町村・保健所新任保健師研修会 講師	平成20年8月1日	北海道宗谷保健福祉事務所
		市民公開講座 講師	平成20年11月1日	北海道社会福祉士会道北支部
		管内市町村・保健所新任保健師研修会	平成20年10月30日	北海道宗谷保健福祉事務所
		平成20年度 北海道介護支援専門員 実務研修・更新研修（実務未経験者）・再研修の研修指導者	平成20年1月15、16日、2月16日、17日、21日、22日	北海道社会福祉協議会
		平成20年度看護職員確保に係る企画検討会議	平成21年1月30日	北海道 上川保健福祉事務所名寄地域保健部長
		機動職業訓練（介護ビジネス）講師「障害・疾病の理解、高齢者・障害者（児）等の理解、在宅看護の基礎知識Ⅰ」	平成20年9月1日～11月14日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		住民講座（ホームヘルパー2級養成講座）講師「高齢者・障害者（児）等の家族の理解、在宅看護の基礎知識Ⅰ」	平成20年8月1日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会
舟根妃都美		「高齢者福祉施設職員研修会」講師	平成21年3月25日	下川町長

学科	氏名	名称	実施日	依頼先
		住民講座（ホームヘルパー2級養成講座）講師 「車椅子への移動等の介護、体位・姿勢交換の 介護、視聴覚障害者の歩行介助」	平成20年8月1日～ 9月30日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
社福	大坂祐二	機動職業訓練（介護ビジネス）講師「サービス 提供の基本視点」	平成20年9月1日～ 11月14日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
	岡部和夫	社会福祉法人 紋別市社会福祉協議会 第33回 紋別市住民福祉大会 名寄保健所 平成20年度名寄保健所家庭看護普 及教室「支えあいの地域づくり in しもかわ」 講師	平成20年10月26日 平成21年2月26日	社会福祉法人 紋別市社会福祉 協議会 北海道上川保健福祉事務所名寄 地域保健部長
	忍博次	平成20年度十勝地域市町村長・社協会長懇談会 講師	平成21年1月23日	北海道社会福祉協議会十勝地区 事務所
北村博幸		平成20年度上川管内高等学校教育相談研究会講 演会講師	平成20年6月26日	上川管内高等学校教育相談研究 会
		校内研修会 講師	平成20年7月2日	北海道名寄農業高等学校長
		研修会講師	平成20年8月28日	道北地区特別支援教育ネットワーク推 進協議会
		2008年度空知言語障害児教育研究協議会 第3 回独自研修会 講師	2008年11月5日	空知言語障害児教育研究協議会
		第37回研究大会 講師	平成21年1月9日	北海道高等学校教育相談研究会
		寄宿舎全体研修 講師	平成20年11月13日	北海道美深高等養護学校長
		平成20年度上川管内北部高等学校養護教諭研究 協議会第3回研究協議会	平成20年12月15日	上川管内北部高等学校養護教諭 研究協議会
		校内研修会（特別支援教育）講師	平成20年11月26日	士別市立多寄中学校長、士別市 特別支援学級設置校連絡協議会
		平成20年度 特別支援教育コーディネーター夏 季研修会講師	平成20年8月1日	北海道美唄養護学校長
		平成20年度上川管内高等学校教育相談研究会講 師	平成20年6月19日	上川管内高等学校教育相談研究 会
		平成20年度10年経験者研修「課題別研修」講師	平成20年7月28日	北海道教育庁宗谷教育局長
		中名寄小学校1年巡回相談	平成20年12月1日	名寄市教育委員会
		外部研究委員	平成20年12月8日	北海道名寄農業高等学校長
		平成20年度生涯学習セミナー講師	平成20年12月10日	遠別町教育委員会
		北海道教育委員会 平成20年度10年経験者研修 「生徒指導等研修」（特別支援学校）講師	平成21年1月8日	北海道教育庁学校教育局義務教 育課長
		美唄養護学校 平成20年度 特別支援教育コー ディネーター冬季研修会講師	平成21年1月15日	北海道美唄養護学校長
		名寄農業高校 教育相談講師	平成20年 4/14, 5/12, 6/9, 7/ 8/, 9/8, 10/ 11/10, 12/8, 1/ 11	北海道名寄農業高等学校長
		名寄市立名寄西小学校巡回相談	平成21年1月26日	名寄市教育委員会
		平成20年度高等学校における特別支援教育に関 する研修会 講師	平成21年2月24日	北海道遠別農業高等学校
	小山充道		平成20年度北海道高等学校家庭に関する学科設 置校教頭会研究協議会講師	平成20年6月5日、6日
		平成20年度なよろ家庭生活カウンセラークラブ 研修会 講師	平成20年6月24日	なよろ家庭生活カウンセラーク ラブ
		平成20年度上川管内北部高等学校養護教諭研究 協議会第4回研究協議会	平成21年2月6日	上川管内北部高等学校養護教諭 研究協議会
		北海道高等学校家庭学科設置校教頭会研究協議 会 講師		北海道名寄光凌高等学校
高田哲		学習・市民集会 講師	平成20年4月6日	生活保護不正問題の「住民監査 請求」をすすめる会
		平成20年度名寄ピヤシリ大学第3回公開講座	平成20年8月19日	名寄ピヤシリ大学
		前期研究大会 講師	平成20年7月5日	旭川精神衛生協会
		課題別研修/第3回生活保護と精神障害者支援 講師	2008年11月26日	社団法人 日本精神保健福祉士 協会
		第55回北海道平和婦人会総会 講師	平成20年12月6日	北海道平和婦人会
		園内研修 講師	平成20年10月22日	児童養護施設美深育成園
		保護司会下川支部 研修会 講師	平成21年2月10日	保護司会下川支部長、下川町更 生保護女性会長
		勤医協2009春闘学習会 講師	2009年1月24日	北海道勤医協労働組合
		住民講座（ホームヘルパー2級養成講座）講師 「サービス提供の基本視点」	平成20年8月1日～ 9月30日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
	田中利宗		根室管内平成20年度民生委員児童委員専門研修 講師	平成20年10月15日
		北・北海道知的障がい福祉協会 新任職員研修 会 講師	平成20年10月29日	下川町立知的障害者更生施設山 びこ学園
		文部科学省委嘱事業「キャリア教育の在り方に 関する調査研究」「ゼミナール」講師	平成21年2月6日	北海道湧別高等学校長
		機動職業訓練（介護ビジネス）講師「福祉理念 とケアサービスの意義」	平成20年9月1日～ 11月14日	上川北部地域人材開発センター 運営協会

学科	氏名	名称	実施日	依頼先
教養	千葉安代	住民講座（ホームヘルパー2級養成講座）講師 「福祉理念とケアサービスの意義」	平成20年8月1日～ 9月30日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
		浦河向陽園 職員研修会 講師	平成20年9月5日	社会福祉法人 浦河向陽会
		名寄ビヤシリ大学 講師	平成20年10月14日	名寄ビヤシリ大学
		訪問介護員2級および居宅介護従業者2級 講師	平成20年12月4,5日	北海道名寄光凌高等学校長
		ガイドヘルパー養成講座講師	平成20年11月22日	(社)上川北部地域人材開発センター運営協会
		「介護実技研修会」講師	平成21年2月14日	社会福祉法人 徳美会 特別養護老人ホーム寿都寿海荘
		「介護福祉士のための実技講習会」講師	平成21年2月19日	知的障がい者更生施設 つくも園
		「介護福祉士のための実技講習会」講師	平成21年2月14日	特別養護老人ホーム 緑ヶ丘ハイ イツ(寿都郡黒松内町)
	北海道下川商業高等学校 介護技術実習講師	平成20年10/14～10/16	北海道下川商業高等学校長	
	住民講座（ホームヘルパー2級養成講座）講師 「入浴の介護、身体の清潔の方法、衣服着脱介 助」	平成20年8月1日～ 9月30日	上川北部地域人材開発センター 運営協会	
	黄京性	名寄光凌高校 訪問介護員2級および居宅介護 従業者2級 講師	平成20年11月21日、 12月15日	北海道名寄光凌高等学校長
		機動職業訓練（介護ビジネス）講師「老人福祉 の制度とサービス」	平成20年9月1日～ 11月14日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
		住民講座（ホームヘルパー2級養成講座）講師 「老人福祉の制度とサービス」	平成20年8月1日～ 9月30日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
	松岡是伸	第47回北海道社会福祉学会大会 シンポジスト	平成21年2月28日	北海道社会福祉学会長
北海道教育庁宗谷教育局 稚内市東地区子育て 支援ネットワーク「研修会」指導助言		平成21年1月28日	北海道教育庁学校教育局学校安全・健康課参事	
松倉聡史	和寒九条の会 講演会 講師	平成21年2月28日	和寒九条の会	
村本徹	機動職業訓練（介護ビジネス）講師「住宅・福 祉用具に関する知識」	平成20年9月1日～ 11月14日	上川北部地域人材開発センター 運営協会	
清水池義治	大学との連携についてミニ講演会・懇談会 講 師	平成21年3月10日	名寄商工会議所	
	高齢者学級「士別市九十九大学」講師	2008年10月17日	士別市中央公民館	
	議会改革研修会 講師	平成20年8月7日	名寄市議会	
	「高温耐性FOKラットシンポジウム2008-環境ス トレス生物学の新たな展開を目指して-」講演 講師	平成20年9月13日	F O Kラット研究会	
	三島徳三	名寄市議会新年研修会 講師	平成21年1月8日	名寄市議会議長
児童	家村昭矩	平成20年度紋別地区民生委員児童委員協議会総 会講演講師	平成20年5月19日	西紋別地区民生児童委員連絡協 議会
		財団法人 北海道民生委員児童委員連盟 平成 20年度全道児童委員活動研究集会助言者	平成20年8月25日	北海道民生委員児童委員連盟
		北海道中央児童相談所 平成20年度北海道専門 里親認定研修 講師		北海道中央児童相談所
	糸田尚史	機動職業訓練（介護ビジネス）講師「高齢者・ 障害者（児）等の心理」	平成20年9月1日～ 11月14日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
		住民講座（ホームヘルパー2級養成講座）講師 「高齢者・障害者（児）等の心理」	平成20年8月1日～ 9月30日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
		平成20年度第9回全国児童家庭支援センター研 究協議会北海道大会 講師	平成20年9月12日	北海道児童家庭支援センター協 議会
		南十勝こども発達支援センター親の会 研修会 講師		
		平成20年度北海道私立幼稚園中堅教員研修会 助言者	平成21年1月14日	社団法人 北海道私立幼稚園協 会
	今野道裕	子育て研修会 講師	平成20年10月23日	愛別町青少年育成協議会
		平成20年度ほっかいどう「子育てメソッド」形 成事業「子育て支援ふれあい読書推進事業」講 師	平成20年12月23日	北海道教育庁網走教育局長
	鈴木文明	第43回上川管内教育研究会北部地区研究大会 助言者	平成20年10月7日	上川管内教育研究会
		家庭教育支援講座「親子であそぼう」講師	平成20年11月16日	名寄市公民館
	傳馬淳一郎	北海道保育協議会 平成20年度北海道保育研究 大会 課題別講義・討議講師、助言者	平成20年6月5,6日	北海道保育協議会
		士別市 児童厚生員研修会 講師	平成20年10月24日	士別市長
士別市 平成20年度保育士研修会 講師		平成20年10月2日	士別市保健福祉部長	
平成20年度道北地区児童館連絡協議会児童厚生 員研修会 講師		平成20年10月24日	道北地区児童館連絡協議会	
平成20年度北海道保育研究大会 課題別講義・ 討議講師		平成20年6月5,6日	北海道保育協議会	
	「町内保育士研修会」講師	平成21年3月11日	剣淵町住民課長	

平成21年度 講演会・研修会（学会等の講演は除く）、社会貢献等

学科	氏名	名称	実施日	依頼先	
栄養	石川みどり	士別市立士別中学校 食育に関する授業講師	平成21年7月21日	士別市立士別中学校	
		北海道栄養士会「保健指導担当者研修会」講師	平成21年8月2日	北海道栄養士会	
		愛別町健康に関する講演会講師	平成21年12月17日	愛別町長	
	太田徹	「調理師試験事前講習会」講師	平成21年7/18, 7/25	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		大見広規	ガイドヘルパー養成講座講師	平成22年2月23日	上川北部地域人材開発センター運営協会
	工藤慶太	「調理師試験事前講習会」講師	平成21年7/18, 7/25	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		社会福祉法人 北翔会 札幌あゆみの園園内職員研修会講師	平成21年10月14日	社会福祉法人 北翔会	
		伝承遊学館まつり「ふるさと記念日」講演講師	平成21年8月13日	美深町教育委員会	
	千葉昌樹	ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		栄養士・調理員研修講師	平成21年9月10～11日	道北地区老人福祉施設協議会	
		平成21年度給食施設等栄養業務担当者研修会講師	平成21年12月8日	北海道宗谷保健福祉事務所保健福祉部長	
		平成21年度食の安心・安全（北の大地のめぐみ愛食総合推進事業 スローフード推進事業（食育推進事業））研修会講師	平成21年11月21日	北海道栄養士会	
		平成21年度石狩管内栄養部会研修会講師	平成22年3月26日	石狩管内学校給食研究協議会	
		食生活改善協議会上川ブロック研修会講師	平成21年7月27日	北海道上川保健所長（北海道上川保健福祉事務所保健福祉部長）	
		緊急再就職訓練（介護ビジネス科）講師	平成21年11月2日～平成22年2月5日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		西村直道	「調理師試験事前講習会」講師	平成21年7/18, 7/25	上川北部地域人材開発センター運営協会
	沼口晶子	平成21年度「冬休み子ども料理教室」講師	平成21年12月25日	名寄市公民館	
	長谷部幸子	平成21年度北海道保育研究大会 課題別講義・討議講師	平成21年5月21, 22日	北海道保育協議会	
		第34回全道保育団体合同研究集会助言者	平成21年7月5日	第34回全道保育団体合同研究集会実行委員会	
		第3回 後志保健福祉事務所保健福祉部における幼児の生活習慣改善事業検討会議講師	平成22年3月19日	北海道倶知安保健所長（北海道後志保健福祉事務所保健福祉部長）	
	三輪孝士	2009年度臨地実習に関わる講演会講師	2010年2月21日	天使大学	
		「すこやか北海道21」講演会講師	平成21年7月24日	北海道栄養士会旭川支部	
	看護	池田正子	「調理師試験事前講習会」講師	平成21年7/18, 7/25	上川北部地域人材開発センター運営協会
			旭川厚生病院看護部院内研修「ステージIV看護研究」講師	平成21年6/5、6/12、平成22年2/12	JA北海道厚生連旭川厚生病院
			「看護研究研修会」講師	平成21年7月30日	士別市立病院
		小野善昭	士別市立病院看護研究研修会講師		士別市立病院
			ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会
北海道看護協会（上川北支部）患者参加型の看護計画研修教育委員			平成21年9月25日～26日	北海道看護協会	
緊急再就職訓練（介護ビジネス科）講師			平成21年11月2日～平成22年2月5日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
加藤千恵子		雄武町パパママ学級、母乳育児相談講師	平成21年5月8日	雄武町長	
		「性教育講話」講師	平成21年7月8日	北海道留辺蘂高等学校長	
		6年保健授業講師	平成21年7月15日	名寄市立名寄東小学校	
		5年理佳授業講師	平成21年7月23日	名寄市立名寄東小学校	
		ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	（社）上川北部地域人材開発センター運営協会	
		平成21年度母乳育児相談講師	平成21年8月18日	雄武町長	
		思春期保健研修会講師	平成21年9月15日	北海道留萌保健福祉事務所保健福祉部長	
		性教育講座講師	平成21年9月24～25日	北海道名寄産業高等学校長	
久保田宏		母乳等育児相談講師	平成21年12月3日	雄武町長	
		緊急再就職訓練（介護ビジネス科）講師	平成21年11月2日～平成22年2月5日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		四町高齢者大学（学級）交流研修会講師	平成21年10月9日	名寄市教育委員会	
小林美子		「精神科身体合併症看護Ⅱ」講師	平成21年10月14日	日本精神科看護技術協会	
紺谷英司		ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		瀧谷恵子	臨床実習指導者研修会講師	平成21年6月10日	砂川市立病院
瀧谷恵子		臨床実習指導者研修会講師	平成21年9月3日	砂川市立病院	
		臨地実習指導者研修講師	平成21年12月15日	名寄市立総合病院看護部長	

学科	氏名	名称	実施日	依頼先	
	高岡哲子	「新人・後輩育成に関わる指導者への支援」研修会講師	平成21年11月9～10日	北海道看護協会道南南支部	
		「プリセプター研修」講師	平成22年2月9日	士別市立病院	
	高岡哲子	ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		緊急再就職訓練（介護ビジネス科）講師	平成21年11月2日～平成22年2月5日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	千葉安代	ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	播本雅津子	ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		北海道看護協会（上川北支部）患者参加型の看護計画研修助言者	平成21年9月26日	社団法人北海道看護協会	
		緊急再就職訓練（介護ビジネス科）講師	平成21年11月2日～平成22年2月5日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		平成21年度北海道介護支援専門員実務研修講師	平成22年1月14～15日、2月16～17日	北海道社会福祉協議会	
	舟根妃都美	平成21年度「こんにちは赤ちゃん事業研修会」講師	平成21年12月15日	稚内市長	
		ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	村上正和	名寄市立総合病院臨地実習指導者研修講師	平成21年9月14日	名寄市立総合病院看護部長	
		ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	安田美弥子	緊急再就職訓練（介護ビジネス科）講師	平成21年11月2日～平成22年2月5日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		北海道看護協会 上川北支部支部講演会講師	平成21年11月7日	北海道看護協会 上川北支部	
	結城佳子	名寄東小コミュニティカレッジ講師	平成21年10月6日	名寄東小コミュニティセンター運営委員長	
		平成21年度北海道看護研究学会座長	平成21年4月26日	社団法人北海道看護協会	
		市立稚内病院看護研究研修会講師	平成21年4/20、5/25、6/15、7/27、8/17、9/16	市立稚内病院看護部看護研修室	
	社福	大坂祐二	「倫理に関する事例集作成のための検討プロジェクト」委嘱	平成21年8月～平成22年3月	日本精神科看護技術協会
			3・8国際女性デー士別集会講師	2010年3月7日	新日本婦人の会士別支部
岡部和夫	忍博次	平成21年度社会福祉士受験応援講座講師	平成21年10月3日	北海道社会福祉士会道北地区支部	
		緊急再就職訓練（介護ビジネス科）講師	平成21年11月2日～平成22年2月5日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
小野寺理佳	北村博幸	第27回ふれあい社会福祉研修会講師	平成21年12月1日	音威子府村社会福祉協議会	
		平成21年度町内会長交流研修会講師	平成22年1月21日	名寄市町内会連合会	
	小野寺理佳	平成21年度全道市町村社協事務局長連絡会議講師	平成21年11月20日	北海道社会福祉協議会	
		第37回社会福祉士セミナー講師	平成22年3月13日	北海道社会福祉士会	
	北村博幸	平成21年度科学研究費補助金における連携研究者（研究代表者 品川ひろみ）	平成21年9月7日～12日（愛知県知立市）	札幌国際大学短期大学部	
		第31回北海道特別支援教育研究協議会第三部会助言者	平成21年7月29日	第31回北海道特別支援教育研究協議会	
		北村博幸	校内研修会講師	平成21年6月8日	北海道士別翔雲高等学校長
			名寄市総合療育センターケース検討会議	平成21年5/20、6/24、7/24、8/19、9/2、9/30、10/28、11/18、12/16、平成22年1/20、2/3、3/24、3/31	名寄市福祉事務所
		北海道新篠津高等養護学校研修会講師	平成21年7月27日	北海道新篠津高等養護学校校長	
		第1回名寄市特別支援連携協議会議	平成21年7月23日	名寄市教育委員会	
		特別支援教育スキルアップ講座講師	平成21年8月29日	北海道稚内養護学校校長	
		平成21年度上川管内北部高校養護教諭研究協議会第2回研究協議会	平成21年9月17日	上川管内北部高校養護教諭研究協議会会長・北海道士別翔雲学校校長	
		平成21年度校内研修会講師	平成21年9月3日	北海道札幌国際情報高等学校校長	
		平成21年度発達障害等支・特別支援教育総合推進事業「上川管内高等学校特別支援教育セミナー」講師	平成21年8月27日	北海道教育局上川教育局長	
		士別市特別支援学習会講師	平成21年9月25日	士別市特別支援学習サークル	
		校内研修会講師	平成21年10月8日	北海道名寄農業高等学校校長	
		第3回独自研究会講師	平成21年11月4日	空知言語障害児教育研究協議会	
		研修会講師	平成21年9月15日	当麻町特別支援教育連絡協議会	
		平成21年度上川管内名寄地区高等学校PTA生徒指導連絡協議会講師	平成21年10月29日	名寄地区高等学校生徒指導連絡協議会	
平成21年度公開授業研究会講師		平成21年12月4日	北海道紋別高等養護学校校長		

学科	氏名	名称	実施日	依頼先
		講演会講師	平成21年11月27日	音威子府村立学校等生徒指導担当者協議会
		平成21年度2学期研究授業・校内研修会講師	平成21年11月12日	北海道名寄農業高等学校
		平成21年度研修講座講師	平成22年1月9日	北海道立特別支援教育センター
		平成21年度10年経験者研修「生徒指導等研修」(特別支援学校)講師	平成22年1月7日	北海道教育庁学校教育局義務局郁課長
		平成21年度発達障害等支援・特別支援教育総合推進事業「幼稚園・保育所特別支援教育セミナー(第2期)」講師	平成22年1月13日	北海道教育庁上川教育局長
		剣淵町特別支援教育合同研修会講師	平成22年2月4日	剣淵町特別支援教育連絡協議会
		風連小・中学校PTA教育講演会講師	平成22年1月24日	風連中学校PTA会長、風連中央小学校PTA会長
小銭寿子		幌加内町 平成21年度「幌加内町高齢者虐待防止研修会」講師	平成22年2月23日	幌加内町長
		(有)NAVIRE 平成21年度主任介護支援専門員研修講師	平成22年1月21～23日	有限会社NAVIRE
		緊急再就職訓練(介護ビジネス科)講師	平成21年11月2日～平成22年2月5日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		平成21年度主任介護支援専門員研修講師	平成21年12月9～11日 平成22年1月27～29日 平成22年2月4～6日	北海道総合研究調査会
		第20回研修会講師	平成21年5月16日	北空知介護支援専門員連絡協議会
		ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		平成21年度養育者支援体制強化事業 養育者支援検討会講師	平成21年8月12日	北海道網走保健福祉事務所紋別地域保健部長(北海道紋別保健所長)
		滝川市高齢者虐待防止研修会講師	平成21年10月20日	滝川市長
		平成21年度社会福祉士受験応援講座講師	平成21年10月4日	北海道社会福祉士会道北地区支部
		網走保健福祉事務所紋別保健所 平成21年度養育者支援体制強化事業「養育者支援検討会」講師	平成22年1月6日	北海道網走保健福祉事務所紋別地域保健部長(北海道紋別保健所長)
		高齢者虐待防止研修会講師		標茶町長
		平成21年度養育支援体制強化事業「養育支援体制強化会議」「養育者支援検討会」講師	平成22年3月19日	北海道網走保健福祉事務所紋別地域保健部長(北海道紋別保健所長)
小山充道		校内研修会講師	平成21年5月7日	北海道風連高等学校長
		平成21年度北海道高等学校PTA連合会名寄支部研修会講師	平成21年6月3日	北海道高等学校PTA連合会名寄支部長
		第1回スクールカウンセリング園内研修会講師	平成21年7月16日	北海道天塩高等学校長
		園内研修会講師	平成21年10月8日	美深成園
佐藤みゆき		平成21年度都道府県運営適正化委員会相談研修会講師	平成21年7月17日	全国社会福祉協議会
		平成21年度福祉サービスに関わる苦情解決研修会講師	平成21年11月28日	秋田県運営適正化委員会
		平成21年度社会福祉士受験応援講座講師	平成21年10月4日	北海道社会福祉士会道北地区支部
高田哲		社会福祉法人 美深成園園内研修会講師	平成21年6月26日	美深成園
		ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		名寄ピヤシリ大学講師	平成21年12月10日	名寄ピヤシリ大学
田中利宗		ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		平成21年度社会福祉士受験応援講座講師	平成21年10月4日	北海道社会福祉士会道北地区支部
		緊急再就職訓練(介護ビジネス科)講師	平成21年11月2日～平成22年2月5日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		文部科学省委嘱事業「キャリア教育の在り方に関する調査研究」ゼミナール講師	平成22年2月4日	北海道湧別高等学校
黄京性		上川北部地域人材開発センター ホームヘルパー2級養成講座講師	平成21年8月3日～9月30日	(社)上川北部地域人材開発センター運営協会
		智恵文公民館 友朋学級講座講師	平成21年9月17日	智恵文公民館
		北海道社会福祉士会道北地区支部 平成21年度社会福祉士受験応援講座講師	平成21年10月3日	北海道社会福祉士会道北地区支部
		緊急再就職訓練(介護ビジネス科)講師	平成21年11月2日～平成22年2月5日	上川北部地域人材開発センター運営協会
松岡是伸		平成21年度生徒指導研究協議会研修会コーディネーター	平成21年6月11日	北海道教育局上川教育局長
		平成21年度社会福祉士受験応援講座講師	平成21年10月3日	北海道社会福祉士会道北地区支部

学科	氏名	名称	実施日	依頼先	
	松倉聡史	平成21年度10年経験者研修「選択研修」講師	平成22年1月8日	北海道教育庁上川教育局長	
		平成21年度上川支庁管内社協職員連絡協議会北部ブロック社協職員研修会講師	平成22年3月12日	上川支庁管内社協職員連絡協議会	
		平成21年度社会福祉士受験応援講座講師	平成21年10月4日	北海道社会福祉士会道北地区支部	
教養	白井暢明 寺山和幸	和寒町自治基本条例策定検討委員会講演会講師	平成21年7月1日	和寒町長	
		平成21年度道北地区衛生施設協議会研修会講師	平成21年6月22日	道北地区衛生施設協議会	
	名寄市（河川水質検査） 「調理師試験事前講習会」講師	平成21年7月2～3日 平成21年7/18, 7/25	名寄市長 上川北部地域人材開発センター運営協会		
	名寄市議会新年研修会講師	平成22年1月12日	名寄市議会議長		
	三島徳三	東京女子大学同窓会北海道支部講演 講師	平成21年9月7日	東京女子大学同窓会北海道支部	
児童	家村昭矩	第1回名寄市特別支援連携協議会議	平成21年7月23日	名寄市教育委員会	
		平成21年度全道児童委員活動研究集会助言者	平成21年8月24日	北海道民生委員児童委員連盟	
		平成21年度宗谷管内民生委員児童委員専門研修講師	平成21年7月30日	北海道民生委員児童委員連盟	
		平成21年度根室管内民生委員児童委員専門研修講師	平成21年10月6日	北海道民生委員児童委員連盟	
		平成21年度北海道里親研修大会・全国里親会北海道地区里親研修大会コーディネーター兼シンポジスト	平成21年9月13日	平成21年度北海道里親研修大会・全国里親会北海道地区里親研修大会実行委員会	
		第44回上川管内教育研究会北部地区研究大会講師	平成21年10月14日	上川管内教育研究会	
		平成21年度北海道児童相談所現任職員研修会講師	平成21年9月21日	北海道保健福祉部長	
		「平成21年度札幌市教育研究推進事業」実践研究日研究集会講師	平成21年10月20日	札幌市教育委員会学校教育部	
		名寄保健所養育支援講演会講師	平成21年12月3日	北海道名寄保健所長(北海道上川保健福祉事務所名寄地域保健部長)	
		名寄市民生児童委員専門部会研修講師	平成21年11月20日	名寄市民生児童委員協議会	
		平成21年度北海道専門里親認定研修講師		北海道保健福祉部子ども未来局長	
		平成21年度道北地域要保護児童対策連絡協議会及び児童虐待防止シンポジウム講師	平成21年11月30日	北海道旭川児童相談所長	
		今野道裕	第44回上川管内教育研究会北部地区研究大会講師	平成21年10月7日	上川管内教育研究会長
			平成21年度道北地区児童館連絡協議会児童厚生員研修会講師	平成21年10月20日	道北地区児童館連絡協議会
		鈴木文明	平成21年度幼稚園教員免許更新講習講師	平成21年9月26日	北海道幼稚園教諭養成校協会
第52回北海道私立幼稚園協会教育研究大会道北ブロック大会助言者、実技研修講師	平成21年9月26日		第52回北海道私立幼稚園協会教育研究大会道北ブロック大会		
傳馬淳一郎	平成21年度道北地区児童館連絡協議会児童厚生員研修会講師	平成21年10月20日	道北地区児童館連絡協議会		
	平成21年度幼稚園新採用教員研修「一般研修」Ⅱ期 講師	平成22年1月5日	北海道教育庁上川教育局長		
	家庭教育支援講座「親子であそぼう」講師	平成22年3月10日	名寄市公民館		

平成22年度 講演会・研修会（学会等の講演は除く）、社会貢献等

学科	氏名	名称	実施日	依頼先
栄養	安藤清一	調理師試験事前講習会講師	平成22年7月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		行政新任栄養士研修会講師	平成23年3月17日	北海道紋別保健所長
		北海道栄養士会宗谷支部研修会講師 北方圏センター帯広国際センター研修講師	平成23年1月28日 平成22年12月13、14日	北海道栄養士会宗谷支部 北方圏センター帯広国際センター
	市川晶子 大見広規	冬休み子ども料理教室講師	平成22年12月23日	名寄市公民館
		保育士研修会講師 ガイドヘルパー養成講座講師	平成23年3月8日 平成23年2月22日	剣淵町保育所 上川北部地域人材開発センター運営協会
		訪問介護員研修講師	平成22年11月15日	北海道名寄産業高等学校長
	工藤慶太	調理師試験事前講習会講師	平成22年7月24日	上川北部地域人材開発センター運営協会
	久保ちづる 久保田のぞみ	天使大学臨地実習講演会講師	平成23年2月13日	天使大学
		名寄保健所特定給食施設従事者研修会講師	平成22年10月25日	北海道名寄保健所長（北海道上川総合振興局保健環境部名寄地域保健室長）
	高橋正子	栄養系進路学習講師	平成22年7月16日	北海道旭川凌雲高等学校長
	田邊宏基	調理師試験事前講習会講師	平成22年7月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会
	千葉昌樹	日本公衆衛生協会講師	平成23年1月26日	日本公衆衛生協会
		日本公衆衛生協会講師	平成23年2月14日	日本公衆衛生協会

学科	氏名	名称	実施日	依頼先	
		日本公衆衛生協会講師	平成23年2月16日	日本公衆衛生協会	
		北海道特別支援学校栄養士研究協議会講師	平成23年1月11日	北海道特別支援学校栄養士研究協議会	
		介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		(社) 全国学校栄養士協議会研修会講師	平成23年1月12日	全国学校栄養士協議会 北海道支部長	
		ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		留萌保健所給食施設調理従事者研修会、調理師研修会講師	平成22年8月5日	北海道留萌振興局保健環境部保健福祉室長(北海道留萌保健所長)	
	長谷部幸子	名寄市保育所自主研修グループ食育講演会講師	平成23年1月26日	名寄市保育所自主研修グループワンワン会	
		北海道保健福祉部幼児の生活習慣改善研修会講師	平成23年1月23、30日、2月2、7、19、23、28日～3月18日	北海道保健福祉部長	
		名寄市立名寄東小コミュニティーセンター文化祭講師	平成22年10月31日	名寄市立名寄東小コミュニティーセンター	
	三輪孝士	十勝総合振興局食育セミナー講師	平成22年10月17日	北海道十勝総合振興局長	
		調理師試験事前講習会講師	平成22年7月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	山本達朗	北海道栄養士会名寄支部知識研修会講師	平成23年2月5日	北海道栄養士会名寄支部	
		美深町教育委員会ふるさと記念日事業講演講師	平成22年8月13日	美深町教育委員会	
	看護	岩坂信子	士別市立病院看護部研修会講師	平成23年2月15日	士別市立病院
			名寄市立総合病院看護研究継続研修講師	平成22年6月10日、23日、7月1日、22、29日	名寄市立総合病院
看護における体温管理と温罨法研究会座長			2011年1月22日	看護における体温管理と温罨法研究会	
小野善昭	介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
	ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
加藤千恵子	雄武町母乳育成相談講師	平成22年6月22日、平成23年2月8日	雄武町長		
	北海道養護教員会名寄ブロック研修会講師	平成23年2月28日	北海道養護教員会名寄ブロック		
	上川管内北部高等学校養護教諭研究協議会講師	平成23年1月27日	上川管内北部高等学校養護教諭研究協議会		
	留萌管内高等学校保健体育教育研究会講師	平成22年11月16日	留萌管内高等学校保健体育教育研究会		
	介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
	名寄市立名寄東小学校 保健・道徳授業講師	平成22年10月14日、11月1日、12月10日	名寄市立名寄東小学校長		
	性教育講座講師	平成22年9月21日24日	北海道名寄産業高等学校長		
	ピアカウンセリング授業講師	平成22年9月14日	北海道留萌高等学校長		
	雄武町母乳育児相談講師	平成22年8月31日	雄武町長		
	ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
呉小玉	名寄市子育て支援センター親子講座講師	平成22年8月10日	名寄市保健福祉部		
	性教育講師	平成22年8月23日	北海道遠く農業高等学校長		
長谷川博亮	名寄市立総合病院看護研究継続研修講師	平成22年6月10日、23日、7月1日、22、29日	名寄市立総合病院		
	北海道名寄産業高等学校訪問介護員研修講師	平成22年11月11、12日	北海道名寄産業高等学校長		
鉢呂美幸	名寄市立総合病院精神科看護職員研修講師	平成22年10、11、12月	名寄市立総合病院		
	介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
林恵理佐	ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
	ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
播本雅津子	東川町社会福祉協議会研修講座講師	平成23年2月28日	東川町社会福祉協議会		
	士別市生活・介護支援サポーター養成講座講師	平成23年2月22日	士別市長		
	介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
	南宗谷保健師研修会講師	平成22年9月13日	猿払村長		
	ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
廣橋容子	ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
舟根妃都美	ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会		
	士別市立病院看護研究研修会講師	平成22年7月27日	士別市立病院		

学科	氏名	名称	実施日	依頼先
	細野恵子	旭川社会福祉施設協議会職員研修会講師	平成22年11月19日	旭川社会福祉施設協議会
		市立稚内病院看護研究研修講師	平成22年4月27日、 5月17日、6月21日、 7月21日、8月31日、 9月13日、10月4日、 11月6日	市立稚内病院
	南山祥子	ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～ 9月30日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
		介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～ 平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
	村上正和	介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～ 平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
		ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～ 9月30日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
		看護系進路学習講師	平成22年7月16日	北海道旭川凌雲高等学校長
	結城佳子	訪問介護員研修講師	平成22年10月18、21、 25、28日	北海道名寄産業高等学校長
		国際女性デー稚内集会講師	平成23年3月6日	国際女性デー稚内集会実行委員会
		介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～ 平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
		名寄市立総合病院精神科看護職員研修講師	平成22年10、11、12月	名寄市立総合病院
		精神保健福祉ボランティア講座講師	平成22年10月15日	(社)東神楽町社会福祉協議会
		第44回道北母親大会助言者	平成22年10月9日	第44回道北母親大会実行委員会
		精神保健ボランティア講座講師	平成22年7月13日	東神楽町社会福祉協議会
名寄市立総合病院講師 第53回北海道母親大会講師		平成22年9月26日	名寄市立総合病院	
社福	青木紀	大阪府立大学就業力育成シンポジウム講師	平成23年2月5日	公立大学法人 大阪府立大学
		名寄ピヤシリ大学公開講座講師	平成22年6月15日	名寄ピヤシリ大学
		名寄東小コミュニティカレッジ講師	平成22年6月1日	名寄東小コミュニティセンター 運営委員長
	大坂祐二	介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～ 平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
	小銭寿子	名寄保健所療育支援体制会議講師	平成23年3月30日	北海道名寄保健所長（北海道上 川総合振興局名寄地域保健室 長）
		留萌保健所地域支援児童虐待予防研修会講師	平成23年3月17日	北海道留萌振興局保健環境部保 健福祉室長（北海道留萌保健所 長）
		胆振総合振興局児童虐待予防対策強化研修講師	平成23年2月22日	北海道胆振総合振興局保健環境 部保健福祉室長
		東川町幼児センター園内研修講師	平成23年1月27日	東川町幼児センター
		空知総合振興局児童虐待対応専門研修講師	平成22年12月10日	北海道空知総合振興局保健環境 部 深川地域保健室長（深川保 健所長） 児童相談室長（岩見沢 児童相談所）
		紋別市民生児童委員虐待予防研修会講師	平成22年11月19日	紋別市長
		紋別市ケアマネージャー研修会講師	平成22年11月19日、9月 17日	紋別市長
		主任介護支援専門員研修講師	平成23年1月14、15、 16、2月14、15、16、 24、25、26日	北海道総合研究調査会
		名寄保健所養育支援体制運営会議「虐待対応専 門研修」講師	平成22年11月2日	北海道名寄保健所長（北海道上 川総合振興局名寄地域保健室 長）
		介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～ 平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
根室振興局地域在宅医療推進検討会議講師		平成22年11月6日	根室振興局保健環境部中標津地 域保健室長	
紋別地区老人クラブ研修会講師	平成22年10月13日	雄武町老人クラブ連合会		
紋別保健所地域支援力子育て支援学習会講師	平成22年10月8日	北海道紋別保健所長		
ケアマネージャー研修会 講師	平成22年9月17日	紋別市長		
精神保健ボランティアグループ赤とんぼ座談会 講師	平成22年10月9日	精神保健ボランティアグループ 赤とんぼ		
北見市介護支援専門員連絡協議会主任ケアマネ 部会研修会講師	平成22年10月2日	北見市介護支援専門員連絡協議 会		
平成22年居宅部会・事例検討会講師	平成22年8月7日	北見地域介護支援専門員連絡協 議会		
ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～ 9月30日	上川北部地域人材開発センター 運営協会		
平成22年度10年経験者研修講師	平成22年7月29日	北海道教育庁宗谷教育局長		
岩見沢市介護支援専門員研修会講師	平成22年7月14日	岩見沢市長		
雄武町地域包括支援センター学習会講師	平成22年5月21日	雄武町長		

学科	氏名	名称	実施日	依頼先	
		西紋別地区民生児童委員連絡協議会総会講演講師	平成22年5月21日	西紋別地区民生児童委員連絡協議会	
	小林宏	メンタルヘルス講演会講師	平成22年9月27日	北海道美深高等学校長	
	瀬戸口裕二	公開授業研究会講師	平成22年12月3日	北海道紋別高等養護学校長	
		名寄市総合療育センター保護者勉強会講師	平成23年2月15日	名寄市保健福祉部	
		名寄市特別支援連携協議会専門委員会研修会講師	平成23年2月16日	名寄市教育委員会、名寄市特別支援連携協議会	
		神奈川県特別支援学校副校長教頭会講師	平成23年2月18日	神奈川県特別支援学校副校長教頭会	
		名寄市総合療育センターケース会議講師	平成23年1月26日、平成22年11月17日、10月5日	名寄市保健福祉部	
		上川教育局教育相談研修会講師 平成22年度10年経験者研修「選択研修」講師	平成23年1月7日	北海道教育庁上川教育局長	
	田中利宗	名寄市総合療育センターケース会議講師	平成22年10月5日	名寄市保健福祉部	
		介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	村本徹	ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	李相済	介護ビジネス科講師	平成22年11月4日～平成23年2月3日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		ホームヘルパー2級講座講師	平成22年8月2日～9月30日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	教養	清水池義治	名寄市農業担い手育成センター交流会講師	平成22年7月26日	名寄市農業担い手育成センター
		関朋昭	第45回上川管内教育研究会北部地区研究大会講師	平成22年10月6日	上川管内教育研究会
		寺山和幸	調理師試験事前講習会講師	平成22年7月24日	上川北部地域人材開発センター運営協会
マーティン・メドウズ		名寄地区高等学校英語研究協議会シンポジウムパネリスト	平成22年10月28日	名寄地区高等学校英語研究協議会	
児童	家村昭矩	研修会講師	平成23年3月17日	美深育成園	
		稚内保健所児童虐待予防地域支援力強化会議講師	平成22年12月10日	北海道宗谷総合振興局保健環境部保健福祉室長（北海道稚内保健所長）	
		留萌保健所地域支援力強化会議講師	平成22年11月12日	北海道留萌振興局保健環境部保健福祉室長（北海道留萌保健所長）	
		美深育成園園内研修会講師	平成22年10月15日	美深育成園	
		平成22年度全道民生委員活動研究集会助言者	平成22年8月25日	北海道民生委員児童委員連盟	
		平成22年度十勝管内民生委員児童委員専門研修	平成22年7月9日	北海道民生委員児童委員連盟	
		平成22年度胆振管内民生委員児童委員専門研修	平成22年10月22日	北海道民生委員児童委員連盟	
	糸田尚史	津別町民生委員児童委員協議会研修会講師 平成22年度網走ブロック5町民生委員児童委員合同研修会講師	平成22年6月23日～24日	津別町民生委員児童委員協議会	
		平成22年度名寄保健所管内行政栄養士研修会講師	平成22年6月16日	北海道名寄保健所長（北海道上川総合振興局保管環境部名寄地域保健室長）	
		1歳6ヵ月児検診 事後教室 講師 留萌市保健福祉センター講師	平成22年5月28日、8月27日、11月26日、平成23年2月25日	留萌市長	
		特別支援教育研修会講師	平成23年2月23日	名寄農業高等学校長	
		名寄地域子ども発達支援推進連絡協議会講演会主催者挨拶	平成23年1月30日	名寄地域子ども発達支援推進連絡協議会	
		児童厚生員研修会講師	平成22年10月22日	道北地区児童館連絡協議会	
今野道裕	児童厚生員研修会講師	平成22年10月22日	道北地区児童館連絡協議会		
	第45回上川管内教育研究会北部地区研究大会講師	平成22年10月6日	上川管内教育研究会		
鈴木文明	教員免許状更新講習講師	平成22年10月1日	北海道私立幼稚園協会		
傳馬淳一郎	上川教育局幼稚園新採用教員研修講師	平成22年12月20日	北海道教育局上川教育局長		
	中堅教員研修会講師	平成23年1月12日	北海道私立幼稚園協会		
	名寄ビヤシリ大学講師	平成22年12月7日	名寄ビヤシリ大		
	士別市子育てサポーター養成講座講師	平成22年7月5日	士別市長		
	児童健全育成推進財団放課後の子ども援助研修会講師、平成22年度「放課後子どもプラン指導者研修会」講師	平成22年9月5日	児童健全育成推進財団		
中島常安	教員免許状更新講習講師	平成23年1月12日	北海道私立幼稚園協会		

平成23年度 講演会・研修会（学会等の講演は除く）、社会貢献等

学科	氏名	名称	実施日	依頼先
栄養	石川みどり	月形町健康増進計画策定委員会、専門部会合同研修会 講師	平成23年6月17日	月形町
	市川晶子	冬休み子ども料理教室 講師	平成23年12月23日	名寄市公民館
	梅澤敦子	天使健康栄養クリニックスタッフ なよろ健康まつりスタッフ	平成22年4月～現在 平成23年度～現在	
	大見広規	ガイドヘルパー養成講座 講師	平成24年3月22日	上川北部地域人材開発センター 運営協会
	久保ちづる	平成23年度なよろ健康まつり（食生活改善推進員コーナー及び測定コーナー協力スタッフ）	平成23年9月24日	なよろ健康まつり実行委員会
		平成23年度「身近にある名寄産農畜産物を使ったアイデア料理コンテスト」審査員	平成23年11月23日	2011地産地消フェア in なよろ 実行委員会 加藤剛士委員長
		認定看護師研修講師 「栄養アセスメントと栄養管理」	平成23年7月8日	北海道医療大学認定看護師 研修センター
		平成23年度(社)北海道栄養士会留萌支部第2回研修会「腎疾患における栄養管理」講師	平成23年9月3日	北海道栄養士会留萌支部
		北海道大学病院肝疾患相談センター市民公開講座 肝臓病食事療法の実際	平成23年11月26日	北海道大学病院 肝疾患相談センター
		第2回全国保健所管理栄養士会スキルアップ講座講師	平成22年7月31日	全国保健所管理栄養士会
		北海道留萌保健福祉事務所給食施設調理従事者及び調理師研修会講師	平成22年8月5日	北海道留萌保健所
	千葉昌樹	平成22年度北海道特別支援学校栄養士研究協議会講師	平成23年1月11日	社団法人北海道栄養士会
		平成22年度北海道栄養教諭・学校栄養職員冬季研修会講師	平成23年1月12日	北海道学校給食会
		山口県健康危機管理時の栄養・食生活支援講演講師	平成23年1月26日	山口県健康づくりセンター
		静岡県健康危機管理時の栄養・食生活支援講演講師	平成23年2月14日	静岡県加茂保健所
		浜松市健康危機管理時の栄養・食生活支援講演講師	平成23年2月16日	浜松市
		赤平市食生活改善推進養成講座 講師	平成23年9月6日	赤平市長
		平成23年度地域保健総合推進事業「保健所管理栄養士の検証に基づく栄養・食生活支援の評価と人材の育成に関する研究事業」第4回研究会及び保健所管理栄養士政策能力向上シンポジウム	平成24年1月19日、20日	日本公衆衛生協会
		平成23年度留萌保健所管内行政栄養士研修会講師	平成23年12月22日	北海道留萌振興局保健環境部長 兼保健福祉室長（北海道留萌保健所）
		平成23年度岩手県行政栄養士研修会 講師	平成24年2月7日	社団法人岩手県栄養士会
平成23年度地域保健総合推進事業「保健所管理栄養士の検証に基づく栄養・食生活支援の評価と人材の育成に関する研究事業」に係る「健康危機管理時の栄養・食生活支援マニュアル全国展開事業」講師		平成24年2月14日（佐賀県佐賀市）、平成23年11月7日（千葉県佐倉市）、平成23年9月20日（大阪	日本公衆衛生協会	
介護ビジネス科講師		平成23年11月1日～平成24年1月31日	上川北部地域人材開発センター 運営協会	
「みんなで考える防災フィラム～災害時の食生活支援を考えよう～」コーディネーター		平成24年2月10日	みんなでつくる災害時の食生活支援ネットワーク、岡山県美作保健所	
長嶋泰生		(社)北海道栄養士会名寄支部知識研修会 講師	平成24年2月4日	北海道栄養士会名寄支部
長谷部幸子	第20回コミュニティセンター文化祭 講演会講師	平成22年10月30日	名寄東小学校コミュニティセンター	
	幼児の生活習慣改善を推進するための研修会（道内8か所）講師	平成23年1月23日～平成23年3月18日	北海道保健福祉部	
	名寄市保育所自主研修グループワンワン会講演会講師	平成23年1月26日	名寄市保育所自主研修グループワンワン会	
	幌北ゆりかご保育園ゆりかご会交流会講演会講師	平成23年1月29日	幌北ゆりかご保育園ゆりかご会	
	株式会社資生堂「社会性ビジネスプロジェクト」事前研修 講義講師	平成23年4月13日	株式会社かいほつマネジメント・コンサルティング	
	平成23年度北海道保育研究大会分科会講義講師	平成23年6月8日	北海道保育協議会	
	第36回全道保育合同研究大会分科会助言者	平成23年7月3日	全道保育団体合同研究会実行委員会 江別市	
	幼児の生活改善を推進するための研修会講師	平成23年9月26日	上川総合振興局（上川・名寄・富良野保健所）	
	第46回上川管内教育研究会北部地区研究大会「食育班」講演講師	平成23年10月5日	上川管内教育研究会	
幼児の生活改善を推進するための研修会講師	平成24年1月17日	十勝総合振興局保健環境部保健福祉室		

学科	氏名	名称	実施日	依頼先
		幼児の食育推進研修会講師	平成24年3月28日	空知総合振興局保健環境部滝川地域保健室
看護	岩坂信子	士別市立病院看護部研修講師「パワーアップ研修」	2011年10月31日	士別市立病院
		北海道眼科看護研究会研修講師	2011年10月22日	北海道眼科看護研究会
		網走管内老人福祉施設協議会 介護・看護職員研修講師	2011年11月10・11日	網走管内老人福祉施設協議会及び社会福祉法人北陽会
	小野善昭	ホームヘルパー2級養成講座 講師	平成23年8月10日、11月11日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		介護ビジネス科講師	平成23年11月1日～平成24年1月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会
	加藤千恵子	名寄東小 エイズ教育 小学5年	平成23年9月12日	名寄東小
		名寄東小 エイズ教育 小学6年	平成23年9月26日	名寄東小
		名寄東小 道徳 命の教育	平成23年12月6日	名寄東小
		子育て親育ての会事務局	H23年11月まで	
		未来の子どもを守る会	H23年11月まで	
		「助産師外来実践能力向上研修支援事業」報告会 アドバイザー	平成24年3月10日	日本赤十字北海道看護大学
		性教育 ピア・エデュケーション授業 講師	平成23年9月8日	北海道遠別農業高等学校長
		子どもの健康を守る地域専門家総合連携事業（思秋期ピアカウンセリング授業）講師	平成23年9月16日	北海道留萌高等学校長
		性教育講座（ピアエデュケーション）講師	平成23年9月20日、22日	北海道名寄産業高等学校長
		母乳育児相談講師	2011/8/16、11月15日、平成24年2月17日	雄武町
		ホームヘルパー2級養成講座 講師	平成23年8月17日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		介護ビジネス講習会 講師	平成23年11月21日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		平成23年度 母乳育児相談	平成23年6月11日	雄武町長
		タッチケア講習会 講師	平成23年9月21日	学校法人名寄大谷学園名寄大谷認定こども園
		名寄市地域子育て支援センター親子講座 講師	平成23年10月18日	名寄市健康福祉部
		助産師外来担当者上級実践能力向上研修	平成23年10月22日～23日	日本赤十字北海道看護大学
	助産師外来担当者上級実践能力向上研修	平成24年1月21日、22日、2月18日	日本赤十字北海道看護大学	
	高橋美和	「看護記録研修」講師	平成23年11月24日	士別市立病院
	武田かおり	上川北部地域人材開発センターホームヘルパー2級養成講座 講師	H23. 8. 22	上川北部地域人材開発センター運営協会
	段亜梅	網走管内老人福祉施設協議会 介護・看護職員研修講師	2011/11/10～11日	社会福祉法人網走福祉協会及び社会福祉法人北陽会
		講演テーマ：「ベッドサイドのリハビリテーション」		士別市保健福祉部長
	長谷川博亮	介護ビジネス科講師	平成23年11月1日～平成24年1月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		ヘルパー2級養成講座 講師	平成23年11月	上川北部地域人材開発センター運営協会
		上川北部自殺対策協議会	平成23年5月～平成24年3月	
		北海道北見柏陽高等学校大学説明会 講師	平成23年4月	
		高大連携事業講義担当 講師	平成23年10月	北海道名寄高等学校
	長谷川博亮	枝幸町自殺予防事業講演会講師	平成24年3月9日	北海道名寄保健所
	鉢呂美幸	介護ビジネス科講師	平成23年11月15日	上川北部地域人材開発センター運営協会
	播本雅津子	介護ビジネス科講師	平成23年11月1日～平成24年1月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		訪問声かけ講座 講師	平成23年10月6日	社会福祉法人 東神楽町社会福祉協議会
		ヘルパー2級養成講座 講師	平成23年8月9日、16日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		士別市生活・介護支援サポーター講座「高齢者の心と体」	平成23年12月15日	士別市地域包括支援センター
		和寒町認知症講演会 講師「高齢者の心と体」	平成24年3月2日	和寒町長 和寒町地域包括支援センター
		旭川市保健師学習会	平成23年12月19日	旭川市役所・旭川市保健所
		愛媛大学地域看護学特別講義「地域診断から始まる保健指導」	平成24年1月20日	愛媛大学
		平成23年度介護教室 講師	平成24年3月17日	
	廣橋容子	第1回～第3回「地域の老いと介護を考える会」講師	平成23年9月16日、10月21日、11月18日	「新婦人の会」有志
		介護ビジネス科講師	平成23年11月1日～平成24年1月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会

学科	氏名	名称	実施日	依頼先
	舟根妃都美	「卒後3～4年目研修」講師	平成24年1月31日、3月19日	士別市立病院
		「看護研究」講師	平成23年8月2日	士別市立病院
	水野芳子	北海道名寄保健所地域保健関係職員研修会「災害時の保健活動を考える」シンポジスト	平成24年1月24日	枝幸町
	南山祥子	ホームヘルパー2級養成講座 講師	平成23年8月24日、25日、11月10日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		介護ビジネス科講師	平成23年11月1日～平成24年1月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会
	村上正和	ホームヘルパー2級養成講座 講師	平成23年8月11日、平成23年11月10日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		介護ビジネス科講師	平成23年11月1日～平成24年1月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会
	結城佳子	道北地域生活支援センターいきぬき「NANKAサークル」企画・実施	平成24年2月以降毎月1回	名寄
		道北地域生活支援センターいきぬき定例レクリエーション協力(流しそうめん)	平成23年8月20日	名寄
		道北センター福祉会主催「さくらまつり」企画・実施への支援	平成23年5月28日	名寄
		道北地域障害者就業・生活支援センター研修会企画・実施への支援	平成24年3月10日	名寄
		道北地域障害者就業・生活支援センター相談支援活動への心理臨床的コンサルテーション	平成23年4月より随時	名寄
		日本精神科看護技術協会北海道研修会実施への協力	平成23年6月25日	名寄
		日本精神保健福祉士協会派遣による被災地支援活動	平成23年10月14日～20日・12月14日～17日	福島県南相馬市
		2級ヘルパー講習講師	平成23年8月9日・12月2日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		介護ビジネス科講師	平成23年11月1日～平成24年1月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会
		稚内市立病院看護研究研修講師	平成23年4月～11月	市立稚内病院看護部
		名寄市立総合病院臨地実習指導者研修会講師	平成23年8月11日	名寄市立総合病院
		名寄市立総合病院第一病棟看護研修会講師	平成23年6月21日・9月6日・10月13日・11月24日・平成24年2月3日	名寄
		東神楽町社会福祉協議会精神保健福祉ボランティア講座講師	平成23年7月21日・10月21日	東神楽町社会福祉協議会
上川北部養護教諭研修会講師		平成24年1月27日	上川管内北部高等学校養護教諭研究協議会 名寄	
上川地域民生委員合同研修会講師		平成24年2月28日	旭川市	
下川中学校思春期講座講師		平成23年11月25日	下川町教育委員会	
社福	大坂祐二	八雲町青年問題研究集会 助言者	平成24年2月19日	八雲町教育委員会
	忍正人	友朋学級講座 講師	平生23年12月8日	名寄市智恵文公民館
	小銭寿子	なよろでまなぶ精神保健ボランティア講座(全9回)主催		
		平成23年度上川保健所養育支援者事例検討学習会における助言講師	平成24年1月23日、2月2日	北海道上川保健所長
		平成23年度地域支援力強化事業「おや・おや安心サポートシステム」に係る保育所事例検討会議 助言者	平成23年8月30日、31日、9月8日、15日、平成24年2月14日、15日	北海道名寄保健所長
		平成23年度留萌保健所支援力強化推進会議 講師	平成24年2月16日	北海道留萌振興局保健環境部保健福祉室長
		名寄保健所養育支援体制運営会議	平成24年3月16日	北海道名寄保健所長
		名寄東小コミュニティカレッジ講師	平成23年4月12日	名寄東小コミュニティセンター運営委員長、名寄東小学校コミュニティカレッジ学長
		平成23年度北海道高等学校PTA連合会名寄支部総会・研修会 講師	平成23年6月3日	北海道高等学校PTA連合会名寄支部
		平成23年度上川保健所養育支援研修会 講師	平成23年7月5日	北海道上川保健所長
		平成23年度富良野保健所児童虐待予防地域支援力強化会議 講師	平成23年10月31日	北海道富良野保健所長
		平成23年度10年経験者研修「生徒指導等研修(I)」講師	平成23年7月28日	北海道教育庁宗谷教育局長
		名寄保健所養育支援体制運営委員会「虐待対応専門研修」講師	平成23年7月21日	北海道名寄保健所長
		「未来に向けて! 新しいコミュニティについて考える」シンポジウム記念講演会 講師	平成23年9月17日	NPO クオリティ・クリエイティブ・ビーイング
		平成23年度福祉介護人材確保緊急支援事業「介護におけるコミュニケーション技術向上」合同研修会 講師	平成23年12月22日	複数事業連携事業代表法人 社会福祉法人 三愛会
		平成23年度教育相談員セミナー 講師子どもの内面に目を向けた教育相談のあり方について	平成23年9月29日	北海道教育庁オホーツク教育局長

学科	氏名	名称	実施日	依頼先
		「地域支援力☆パワーUP! 事業における研修会及び児童虐待対応専門研修」と「ケース検討会」講師	平成23年8月9日	北海道空知総合振興局保険環境部 深川地域保健室長、児童相談室長
		平成23年度上川保健所養育支援者事例検討学習会 助言講師	平成23年10月3日、13日	北海道上川保健所長
		平生23年度北見保健所地域支援力☆パワーUP! 事業 養育者支援のための事例検討会・講演会 講師	平成24年1月27日	北海道オホーツク総合振興局保健環境部北見地域保健室長
		自殺対策等における相談・保健指導技術強化研修 講師	平成24年3月5日、13日	北海道保健福祉部福祉局障がい者保健福祉課
		教育相談セミナー講師	平成24年1月30日	北海道教育庁宗谷教育局長
	小林宏	兵庫県臨床心理士研修会 講師	平成24年1月22日	兵庫臨床心理士会
	佐藤みゆき	「社会福祉士」国家試験受験対策講座 講師	平成23年9月18日	北海道社会福祉士会
		平成23年度苦情解決セミナー 講師	平成23年12月13日	沖縄県社会福祉協議会
		平成23年度福祉サービスの苦情解決研修会 講師	平成23年10月25日	三重県社会福祉協議会
	瀬戸口裕二	障害者就業支援セミナー シンポジウムコーディネーター	平成24年3月10日	道北センター福祉会
		平成23年度横浜市特別支援教育総合センター教職員研修講座 講師	平成23年5月25日	横浜市教育委員会
		第2回研修会 講師	平成24年2月23日	名寄市特別支援教育コーディネーター連絡会議
		旭川市特別支援学級設置学校長協会研修 講師	平成23年10月24日	旭川市特別支援学級設置学校長協会
		フォローアップ研修 講師	平成23年10月30日	なよろ地方職親会
		教職員研修会 講師	平成23年10月12日	横浜市本郷特別支援学校
		平成23年度北海道鷹栖養護学校発達支援セミナー 講師	平成24年1月12日	北海道鷹栖養護学校
		特別支援教育 研修会講師	平成23年8月19日	名寄市名寄中学校
		特別支援教育 研修会講師	平成23年11月30日	北海道名寄産業高等学校長
		特別支援教育 研修会講師	平成24年1月13日	北海道美深高等養護学校長
	田中利宗	介護ビジネス科講師	平成23年11月1日～平成24年1月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会
村本徹	介護ビジネス科講師	平成23年11月1日～平成24年1月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
黄京性	名寄東小コミュニティカレッジ 講師	平成23年10月4日	名寄東小コミュニティセンター運営委員長、名寄東小学校コミュニティカレッジ学長	
	福祉講演会 講師	平成23年9月17日	美深協働のまちづくりを進める会	
李相済	介護ビジネス科講師	平成23年11月1日～平成24年1月31日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	名寄社会保障を考える会 講演会講師	平生23年11月12日	名寄社会保障を考える会	
	ホームヘルパー2級養成講座 講師		上川北部地域人材開発センター運営協会	
教養	石川貴彦	第46回上川管内教育研究会北部地区研究大会 講師	平成23年10月5日	上川管内教育研究会
	清水池善治	第1回天塩川学セミナー実行委員会	平成23年6月15日	天塩川学セミナー実行委員会
		第1回酪農講演会	平成23年8月30日	音更町文化センター
		西興部村公民館講座 講師	平成23年3月8日	西興部村教育委員会
	関朋昭	上川管内指導委員研修会 講師	平成23年8月27日	名寄市教育委員会
		日本体育協会公認上級指導員養成講習会	平成23年9月25日	公益財団法人北海道体育協会
	塚本智宏	「子どもの権利のための講座」講師	平成23年7月1日	士別市長
	寺山和幸	調理師試験事前講習会講師	平成22年7月24日	上川北部地域人材開発センター
	マーティン・メドウズ	院内英会話教室 講師	平成23年5月10日～平成24年3月31日 毎週火曜日	名寄市立総合病院
	児童	家村昭矩	平成23年度北海道専門里親認定研修 講師	研修期間 平成23年10月24日～平成24年2月17日
第55回「全国母子生活支援施設研究大会」助言者			平成23年10月7日	社会福祉法人 全国社会福祉協議会
清里町民生児童委員研修 講話講師			平成23年6月22日	清里町長
平成23年度児童虐待防止シンポジウム 講師			平成23年11月11日	北海道中央児童相談所長
糸田尚史		北海道児童養護施設等基幹的職員研修会 講師	平成24年3月15日	北海道保健福祉部子ども未来推進局参事
		平成23年度留萌振興局圏域子ども発達支援事業実施研修 講師	平成23年11月24日	北海道留萌振興局長
		1歳6ヵ月児検診事後支援 事後教室講師	平成23年5月27日、8月26日、11月25日、平成24年2月24日	留萌市長
		第2回幼・保・小連携交流会 講師	平成24年2月2日	旭川市長
	平成23年度名寄地域子ども発達支援推進連絡協議会 講演会講師	平成23年10月23日	名寄地域子ども発達支援推進連絡協議会長	

学科	氏名	名称	実施日	依頼先
	傳馬淳一郎	2年生活文化科「発達と保育」講師	平成24年3月16日	北海道名寄産業高等学校長
		3年生活文化科 授業講師	平成23年6月23日	北海道名寄産業高等学校長
		北海道私立幼稚園協会旭川支部春の研修会 講師	平成23年5月14日	北海道私立幼稚園協会旭川支部
		子育てサポーター養成講座 講師	平成23年7月4日	士別市長
		平成23年度保育士等専門研修 講師	平成23年9月27日	北海道社会福祉協議会・社会福祉研修所
		第54回北海道私立幼稚園協会教育研究大会道北ブロック大会 助言者	平成23年10月15日	第54回北海道私立幼稚園協会教育研究大会 道北ブロック大会実行委員長
		平成23年度北海道私立幼稚園冬季教員研修会 講師	平成24年1月12日	社団法人北海道私立幼稚園協会
		市民講座「なよろ入門」講師	平成24年1月19日	名寄市公民館
		平成23年度幼稚園新採用教員研修「一般研修」II期 講師	平成23年12月26日	北海道教育庁上川教育局長
		鈴木文明		平成23年度教員免許状更新講習 講師（札幌市）
平成23年度教員免許状更新講習 講師（苫小牧市）	平成23年10月8日			社団法人北海道私立幼稚園協会
第54回北海道私立幼稚園協会教育研究大会道北ブロック大会 助言者	平成23年10月15日			第54回北海道私立幼稚園協会教育研究大会 道北ブロック大会実行委員長
中島常安		平成23年度教員免許状更新講習 講師（札幌市）	平成24年1月12日	社団法人北海道私立幼稚園協会
		平成23年度教員免許状更新講習 講師（札幌市）	平成23年8月4日	社団法人北海道私立幼稚園協会

平成24年度 学外講演会・研修会の講師（学会等の講演は除く）、社会貢献等

学科	氏名	名称	実施日	依頼先	
栄養	安藤清一	調理師試験事前講習会講師（食文化概論・食品学）	平成24年7月29日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
		調理師試験事前講習会講師（調理理論）	平成24年7月28日	上川北部地域人材開発センター運営協会	
	市川晶子	冬休み子ども料理教室講師	平成24年12月22日	名寄市公民館	
		平成24年度 知識研修会	平成24年4月14日	北海道栄養士会名寄支部	
	千葉昌樹	給食施設における危機管理対策研修会 講師	平成25年3月21日	上川総合振興局保健環境部富良野地域保健室	
		西興部村子育て支援教室「キッズサロン」の離乳食教室講師	平成24年6月22日	西興部村	
	長谷部幸子	平成24年度 第61回北海道・東北ブロック保育研究大会 第5分科会 講義講師	平成24年7月12-13日	北海道社会福祉協議会	
		滝上町子育て講座の講師	平成25年3月16日	滝上町	
	看護	市川正人	士別市立病院 看護研究 講師	平成24年8月20日	士別市立病院
			社会福祉基礎 特別講師	平成24年9月28日	北海道平取高等学校
岩坂信子		士別市立病院研修会 講師	平成24年10月29日	士別市立病院	
		名寄東病院看護科講演会 講師	平成25年2月28日	名寄東病院	
小野善昭		スキルアップ研修フィジカルアセスメントコース 講師	平成24年6月12・19・26日	名寄市立総合病院	
		加藤千恵子	2012年度北海道委託支援事業；助産師外来実践力向上研修 札幌	(2012.10/20.21.11/10.11.12/15.16.2013.1.26.27) 報告会 (2013.3.18)	北海道助産師会
母子訪問における基本研修 札幌			平成24年7月14日	北海道助産師会	
新生児心肺蘇生Aコース 札幌			平成24年10月14日	北海道助産師会	
助産師のゆるカフェ 札幌			平成24年10月12日	北海道助産師会	
助産師のためのリスクマネージメント研修札幌			平成24年10月14日	北海道助産師会	
助産のプロのカラダづくり研修 札幌			平成24年8月4日	北海道助産師会	
助産師と倫理研修 札幌			平成24年6月3日	北海道助産師会	
命の大切さ（名寄東小学校）5年生			平成24年9月27日	名寄東小学校	
エイズについて（名寄東小学校）6年生			平成24年10月9日	名寄東小学校	
機動職業訓練（OA介護科）基本介護技術			平成24年8月27日，9月26日	上川北部地域人材開発センター	
自己肯定感を高める性教育，帯広，生命の大切さ 講演			平成25年3月23日	北海道助産師会	
健康講演会 講師			平成24年11月22日	上川中学校	
佐藤郁恵		保健講話 講師	平成24年11月30日	北海道千歳北陽高等学校	
		看護記録研修会 講師	平成24年10月30日	士別市立病院	
		看護倫理研修会 講師	平成24年11月2日	北海道自治体病院協議会小規模病院看護技術強化研修事業	
	卒後3年目研修 講師	平成25年1月29日	士別市立病院		
武田かおり	看護系学校模擬授業「看護師になるって」	2012/6/25	滝川西高等学校		
	ヘルパー2級講座「衣服の着脱」	2012/8/29	上川北部地域人材開発センター運営協会		

学科	氏名	名称	実施日	依頼先	
	長谷川博亮	こころの健康づくり講演会 講師	平成24年10月18日	幌延町	
		第40回上川北部精神保健大会 講師	平成24年10月26日	上川北部精神保健協会	
		平成24年度枝幸町自殺予防対策事業 ゲートキーパー研修会講師	平成24年11月17日	枝幸町	
	播本雅津子	平成24年度名寄保健所新任期保健師研修会	平成24年8月13日	北海道名寄保健所	
		名寄市立東小学校コミュニティカレッジ	平成24年9月18日	東小学校コミュニティカレッジ	
		士別市介護サポーター講座	平成25年1月9日	士別市地域包括支援センター	
		留萌保健所地域保健関係職員研修会（新任期保健福祉医療職）	平成25年3月22日	北海道留萌保健所	
		留萌保健所地域保健関係職員研修会（管理期）	平成25年3月27日	北海道留萌保健所	
		平成24年度進路講演会	平成24年4月28日	北海道美深高等学校	
		上川総合振興局生活・介護支援サポーター養成講座	平成24年7月11日	北海道上川総合振興局保健環境部	
	結城佳子	「こころとココロのふれあい講座」講師	平成24年8月28日、9月4・25日	社会福祉法人 東神楽町社会福祉協議会	
		「パーソナリティ障がい」講座講師	平成24年8月10日	社会福祉法人 しべつ福祉会	
		平成24年度名寄保健所思春期ネットワークワーキング会議 講師	平成24年12月14日	北海道名寄保健所	
	社福	小銭寿子	3級カウンセラー養成講座	平成24年5月19日	カウンセラー養成講座運営委員会
			平成24年度地域支え合い体制づくり研修会	平成24年6月11日	滝上町社会福祉協議会・滝上町民生児童委員協議会
職員研修会			平成24年7月13日	医療法人萩野病院	
3級カウンセラー養成講座			平成24年8月7日	カウンセラー養成講座運営委員会	
養育支援研修会・事例検討会			平成24年8月21日～8月22日	富良野保健所・南富良野町	
養育支援研修会・事例検討会			平成24年9月24日	深川保健所	
養育支援研修会・事例検討会			平成24年10月1日	上川保健所	
高齢者虐待について いのちと向き合うということ			平成24年10月30日	宗谷管内6町村地域包括支援センター連絡会	
養育支援研修会・事例検討会			平成24年11月5日	倶知安保健所	
教育相談における援助の在り方ー自己指導能力育成の観点からー			平成24年11月12日	宗谷管内高等学校教育研修会相談部会研究協議会	
養育支援研修会・事例検討会			平成24年11月13日	上川保健所	
養育支援研修会・事例検討会			平成24年11月26日	釧路保健所	
養育支援学習会			平成24年11月30日	深川保健所・秩父別町認定子ども園学習会	
相談援助・ソーシャルワークについて～初回・インテーク時の要点～			平成24年12月3日	札幌市豊平区ケアプラン指導者研修会	
主任介護支援専門員研修			平成25年1月10日～12日	北海道総合福祉調査会	
新人MSW研修会			平成25年1月26日	北海道MSW協会 北支部 初任者研修会	
主任介護支援専門員研修			平成25年2月1日～3日	北海道総合福祉調査会	
高齢者虐待予防講演会			平成25年2月13日	枝幸町社会福祉協議会	
養育支援研修会・事例検討会			平成25年2月19日	上川保健所	
養育支援学習会			平成25年2月21日	名寄保健所	
主任介護支援専門員研修			平成25年2月28日～3月2日	北海道総合福祉調査会	
佐藤みゆき			平成24年度福祉サービス苦情解決事業第三委員研修会 講師	平成25年2月18日	徳島県運営適正化委員会
	平成24年度空知総合振興局生活・介護支援サポーター養成研修 講師	平成25年3月7日	北海道空知総合振興局保健環境部社会福祉課		
清野茂	平成24年度北海道市長会社会福祉担当係長等研修会 講師	平成24年11月29日	名寄市		
瀬戸口裕二	平成24年度北海道高等学校教頭・副校長道北支部名寄ブロック研究協議会 講師	平成24年4月27日	北海道高等学校長協会道北支部名寄ブロック		
	平成24年度名寄保健所思春期ネットワークワーキング会議 講師	平成25年1月11日	北海道名寄保健所		
	平成24年度特別支援教育研修会 講師	平成25年1月23日	名寄市教育委員会		
	名寄東小コミュニティカレッジ講師	平成24年6月5日	名寄東小コミュニティセンター		
	名寄ブロック高等学校PTA生徒指導連絡協議会総会 講演	平成24年10月13日	上川管内名寄ブロック高等学校PTA生徒指導連絡協議会		
黄京性	名寄人権擁護委員協議会 研修会講師	平成24年5月11日	名寄人権擁護委員協議会		
	在宅介護家族会講演会 講師	平成25年2月18日	西興部村社会福祉協議会		
吉中季子	平成24年度名寄保健所思春期保健対策事業 名寄保健所思春期ネットワークワーキング会議 第2回講演 「女性のかかえる困難とニーズ」	平成24年11月30日	名寄保健所長 大原幸 (北海道上川総合振興局保健環境部名寄地域保健室長)		
教養	加藤隆	北海道私立幼稚園教育研究大会道北ブロック大会 助言者	平成24年10月13日	北海道私立幼稚園協会	
	関朋昭	日本体育協会公認上級指導員養成講習会 講師 平成24年度 宮城野高校「土曜ゼミナール」講師	平成24年9月23日 平成24年12月8日	公益法人北海道体育協会 宮城県宮城野高等学校	

学科	氏名	名称	実施日	依頼先		
	古牧徳生	北大文学部応用倫理研究会	平成24年7月27日	北大文学部応用倫理研究会(会長 眞嶋俊造)		
		日進フォーラム第48回「生の分化と死の文化」講師	平成25年3月11日	日進フォーラム		
	清水池義治	「フランス地域自然公園制度と北海道での可能性」平成24年度市町村外国派遣研修に係る事前研修会	平成24年8月2日	公益社団法人北海道市町村振興協会		
	マーティン・メドゥズ	英語能力向上講義	平成24年7月5日	名寄駐屯地		
	家村昭矩	宗谷管内保育所協議会運営研修会 講師	平成24年10月9日	宗谷管内保育所協議会		
		平成24年度全道福祉の学習推進セミナー 講師	平成25年1月15日	北海道社会福祉協議会		
児童	糸田尚史	カウンセラー養成講座	2012年7月～9月	北・ほっかいどうカウンセラー名寄クラブ		
		名寄市立大学免許法認定公開講座	2012年7月	名寄市立大学		
親子遊び学習会		2012年8月	留萌市市民健康部保健医療課			
	今野道裕	生涯学習講習会	2013年3月	利尻富士町教育委員会		
		上川保育研修会「身近なもので遊んで豊かな子どもの文化を」	平成24年5月20日	上川保育研究会		
	傳馬淳一郎	芸研信州スタディツアー「簡単劇あそび(人形劇)」	平成24年6月2日	芸術教育研究所		
		講座「どうする?絵本の読みきかせ」	平成24年6月18日	北海道芸術教育の会		
		大正小学校PTA親子研修会「工作と人形劇」	平成24年6月30日	北見市立大正小学校		
		中川町公民館講座「人形劇公演」	平成24年9月3日	中川町公民館		
		北海道人形劇フェスティバル 分散公演・本公演	平成24年9月7日～9日	北海道人形劇フェスティバルin上富良野実行委員会		
		商店街あそびの広場(企画・各種あそび広場・人形劇公演等)	平成24年9月17日	商店街あそびの広場実行委員会(主催者)		
		風連瑞祥大学「伝承文化の底力3」	平成24年9月27日	風連瑞祥大学(名寄市教育委員会)		
		人形劇公演	平成24年10月6日	帯広ごろすけ保育所		
		人形劇公演	平成24年10月13日	網走北浜保育所		
		人形劇公演	平成24年10月13.14日	大空町合宿誘致実行委員会		
		ワークショップ「簡単劇あそび(人形劇)」	平成24年10月14日	大空町合宿誘致実行委員会		
		人形劇公演	平成24年11月20日	深川市あけぼの保育園		
		人形劇公演	平成24年12月16日	士別市あけぼの自治会		
		人形劇公演	平成24年12月18日	名寄幼稚園		
		名寄保育士会研修会「簡単てづくりおもちゃ」	平成25年1月15日	名寄保育士会		
		苫小牧市保育士会研修会「保育に役立つ簡単工作」	平成25年2月2日	苫小牧市保育士会		
		人形劇公演	平成25年3月7日	美深町幼児センター		
		名寄市ロータリークラブ例会卓話	平成25年3月19日	名寄市ロータリークラブ		
			中島常安	平成24年度保育士等専門研修 講義・討議「保育の動向と中堅保育士としての役割」	平成24年7月5日	北海道社会福祉協議会
				子育てミニ座談会「主婦のから騒ぎin西興部」	平成24年7月31日	西興部村
家庭教育支援講座「子育て教室」	平成24年9月12日			名寄市		
子育てミニ座談会「脱“完璧ママ”」	平成24年9月25日			西興部村		
平成24年度保育士等専門研修 講義・討議「保育の動向と中堅保育士としての役割」	平成24年9月26日			北海道社会福祉協議会		
空知地区保育協会研修会「保育の動向と保育士としての役割」	平成24年10月9日			空知地区保育協会		
北私幼道北ブロック大会 公開保育 助言「風連幼稚園」	平成24年10月13日			北海道私立幼稚園協会		
平成24年度思春期ネットワーキング会議「地域における子育て支援～多世代交流からみえること～」	平成24年11月16日			名寄保健所		
北海道名寄産業高等学校 生活文化科 保育・福祉コース、実習指導 非常勤講師	平成25年3月11日			北海道名寄産業高等学校		
	宮内俊一			園内研修(助言・講演)	平成24年4月1日～平成25年3月31日	わかば保育園園長
		保育者としての資質向上研修(講師)	平成25年1月	財団法人全日本私立幼稚園幼児教育研究機構		
	三國和子	苫小牧市保育士会学習会	平成24年7月19日	苫小牧市保育士会		
		セカンドステップ研修会	平成24年10月6日～7日	日本子どものための委員会(理事長 渡辺俊一)		
	宮内俊一	セカンドステップ研修会	平成25年2月9日～10日	日本子どものための委員会(理事長 渡辺俊一)		

3. 道北地域研究所の将来に向けて

1960年に開学した名寄女子短期大学の歩みを振り返るまでもなく、本学もまた地域社会によって作られ、支えられている大学である。ここでは、地域と公立大学との関わりを含めて、道北地域研究所の将来を展望したい。

本格的な人口減少社会の到来を迎え、わが国では大幅な人口減少と急速な少子高齢化が進んでいる。また、グローバル化の進展や地域経済の低迷、地方分権の推進など、地方を取り巻く環境も大きく変化し、各地域が創意工夫しながら自主的・自立的な地域づくりを進めることが強く求められている。さらに、将来にわたり安心して暮らせる地域を形成し、持続可能なまちづくりを進めるためには、自治体が互いに連携・協力をして、それぞれの資源を有機的に活用し、魅力ある地域を形成していくことも重要となる。このような状況を踏まえ、安心して暮らせる地域を各地に形成し、地方への人口定住を促進することを目的として、2008年度に総務省は定住自立圏構想推進要綱を制定した。2012年度末には、全国74圏域において定住自立圏が形成され、北海道においても8圏域の定住自立圏共生ビジョンが策定されている。

「北・北海道中央圏域」定住自立圏は13市町村から構成されている。すなわち、本学が設置されている名寄市と士別市を複眼型中心市とし、和寒町、剣淵町、下川町、美深町、音威子府村、中川町、幌加内町の上川管内北部、オホーツク管内西興部村、宗谷管内枝幸町、浜頓別町、中頓別町の全13市町村であり、2010年国勢調査時における圏域の人口と面積はそれぞれ89,742人と7,188平方キロメートル、宮城県1県分に匹敵する広域な豪雪厳寒過疎地が対象となっている。本定住自立圏の人口はこの15年間で17%減少し、生産年齢人口・年少人口もそれぞれ26%・36%減少している。その一方で、老年人口はこの15年間で26%も増加し、地域社会の活力低下が大きな問題となっている。本定住自立圏の活力低下の特徴には、一般的な活力低下といった言葉では表現し切れない「生存の不安」といった厳しい側面も含まれている。地域住民の生活サイクルの中で、病気・障がい・高齢化に伴う介護といったケアの安心・安定の確保は最大の課題であり、同時にこれ以上の地域の過疎化を食い止める重要な鍵とも位置づけられる。これらの課題についてはもはや単独の市町村では解決できないことも明らかであり、このような背景のもとに定住自立圏構想も生まれてきた。

本学は定住自立圏に存在する唯一の高等教育機関であり、「ケアの未来をひらき、小さくてもきらりと光る大学を目指す」ことを基本理念に掲げ、保健医療の向上と福祉の増進を担う人間性豊かな専門職業人を養成することを目的の一つに設定している。これまで、道北地域研究所は30年以上にわたって地域問題の解決に向けて、さまざまな研究課題に積極的に取り組んできた。今後は、これまでの研究・調査の基盤を拡充して、「北・北海道中央圏域」定住自立圏を構成する13市町村を新たな研究フィールドとして、本学の「知(地)」を活かしながら地域住民が安心して生活できるケアモデルを創出することが強く求められている。

2013年、文部科学省は自治体等と連携しながら、全学的に地域を志向した教育・研究・社会貢献を進める「地(知)の拠点整備事業」の公募を行った。本整備事業の目的は、「地域のための大学」として全学的な教育カリキュラム・教育組織の改革を行いながら、地域の課題(ニーズ)と大学の資源(シーズ)の効果的なマッチングによる地域の課題解決、更には自治体を中心に地域社会と大学が協働して課題を共有し、それを踏まえた地域振興策の立案・実施まで視野に入れた取り組みを進めることである。その成果として、大学での学びを通して地域課題等の認識が深まり、課題解決に向けて主体的に行動できる人材も育成され、地域再生・活性化の拠点となる大学を形成することが可能となる。全国の大学等からの319申請課題の中に、本学の申請事業「寒冷過疎地のケアの未来をひらくイノベーション・モデルの創出」も含まれていたが、採択には至らなかった。今後も地域志向を強く意識しながら、道北地域研究所は定住自立圏の地域づくりに積極的に関わっていく必要がある。

さて、道北地域研究所とは異なる役割を担っている、地域交流センターについても触れてみたい。名寄市立大学設置認可申請書に謳った「地域社会の教育的活用と地域貢献」を実現するための組織として、2006年

の開学時に地域交流センターを設立した。すなわち、ボランティア・住民活動支援等の学生・教員による地域活動、地域を活動の場とする学生サークルや地域をフィールドとする学生の演習活動等を円滑に行うための連絡・調整機関として地域交流センターを位置づけ活動を開始したが、事業内容が多岐にわたるためにその活動は試行錯誤を強いられた。現在、地域交流センターでは、学生教育の一環としてボランティア活動と新聞コラムを通じた地域への情報提供を主体とした活動に取り組んでいる。地域からは年間50件余りのボランティアの依頼があるが、そのうちの7割程度のボランティアに延べ300名余りの学生が参加している。学生が提出するボランティア報告書には、地域住民との交流によって学ぶことの大切さ等が記されている。また、2009年から地元北都新聞社のご好意で始まったコラム「名大の時間」の掲載記事は170編を数え、日々の生活で感じる学生の思いを地域に発信している。道北地域研究所と地域交流センターの役割は異なるために、学内では別々の組織として運営・活動しているが、時々、その違いがよくわからないという地域からの声も耳にする。「研究の視点」と「地域活動による交流」というように、二つの組織の役割は異なるが、地域に貢献するという基本的な考えは共通している。今後、道北地域研究所と地域交流センターの二つの組織がどのように連携し、北海道北部の地域社会に貢献していくかについて真剣に考える必要がある。地域住民・学生・教職員すべてが連携協力する地域づくりを模索し続けたい。

4. 地域と大学との関わり

(本稿は、2012年10月22日から2013年3月8日までに北都新聞に掲載された「ピヤシリの麓から」の内容をまとめたものである。)

ピヤシリの麓から

青 木 紀

掲載にあたって

以下のエッセイ風な、小刻みに公表された拙稿は、2012年10月22日から2013年3月8日にわたって、北都新聞に「ピヤシリの麓から」というタイトルで30回にわたって連載されたものである。今回『地域と住民』に掲載するにあたっては、すでに1年以上たっていることから、情勢や数字等の最新のものへの書きなおしも考えたが、最小限の字句の誤りや訂正にとどめた。改めて読み直して、十分このままで意図したことは伝わるだろうと判断したからである。

1 光り続ける条件の重なりを探し求めて

就任の年、天文台「きたすばる」がオープンした。いささか新鮮さは薄れてきた感はあるものの、はじめてのプラネタリウムの映像はなかなか感動的だった。たしかまだ帰還する前の“はやぶさ”の話だった。その時、リクライニング式のいすにもたれながら思い出していたことがあった。大学の同窓会のみなさんが作り上げた『写真でつづる市立名寄短期大学40年のあゆみ』の中にある芝田和子教授の文章である。

本学の歴史を学び、これからどんな大学を作り上げていくのかのイメージをまず持ちたいと考えていた私は、赴任前に『あゆみ』をばらばらめくっていたのだが、彼女の「名寄短大の40年もまずは、幸せな偶然の重なりによって始まり、設置者、学生、教職員の手でその存続条件が作られつつ“発展”してきた。それは真っ暗な宇宙に青く輝く地球のように類い稀な存在だったのではなかろうか」という文章に、とくに強く印象付けられていた。それが映し出された宇宙空間とダブったのである。

だから、本学のイメージを“小さくともキラリと光る大学”というフレーズにおくことは、歴史的にもふさわしい表現であると思う。そうなのだが、この2年と半年のおぼつかない学長の経験からしても、ことはそう容易ではない。何よりも、名寄という地理的位置や諸条件の不利は、教員や学生確保の困難にあらわれている。それゆえまた、ここに多くの学生が集い、先生たちが教育に情熱を燃やし、市民の皆さんが見守り、支えてきてくれた50年を超える歴史というのは、本当に「類い稀な歴史」でもあったのだろう。それは、これまでの関係者のさまざまな試行錯誤の実践の積み重ねと、何といても7,000名を超える卒業生を生み出してきた実績が物語っている。まさに「キラリと光ってきた」本学の歴史であった。

だが、さらに光度を増し、つねに光り続けていくためには、大義に基づく明確な大学の目標とそれを着実に遂行していく担い手、これを確実に広く支えてくれる市民や関係者の“人垣”の形成が必要である。また、市民の意見を“二分した”四大化以降のさらなる大学の理解の浸透、名寄市や道北地域にとっての大学の存在意義の明確化など、課題は少なくない。



幸いというか、偶然というか今、中央の「大学と地域」をめぐる議論は、「地域再生の核としての大学づくり」あるいは「COC (Center of Community) を担う大学」(大学が地域のセンターでもあること)という方向にある。しかも、大学事務局に残されている四大化直前の新聞記事には、「まちお

こしの一環としての四大化」「大学中心のまちづくり」「医療と教育のまち」といったフレーズが散見される。その意味では、名寄市民と本学の問題意識は先取りしていたとも言えそうだ。くわえて、本学独自の焦眉の課題として、取り残されてきた“児童学科の四大化”があり、それが大学間競争に勝ち残る鍵を握っている。

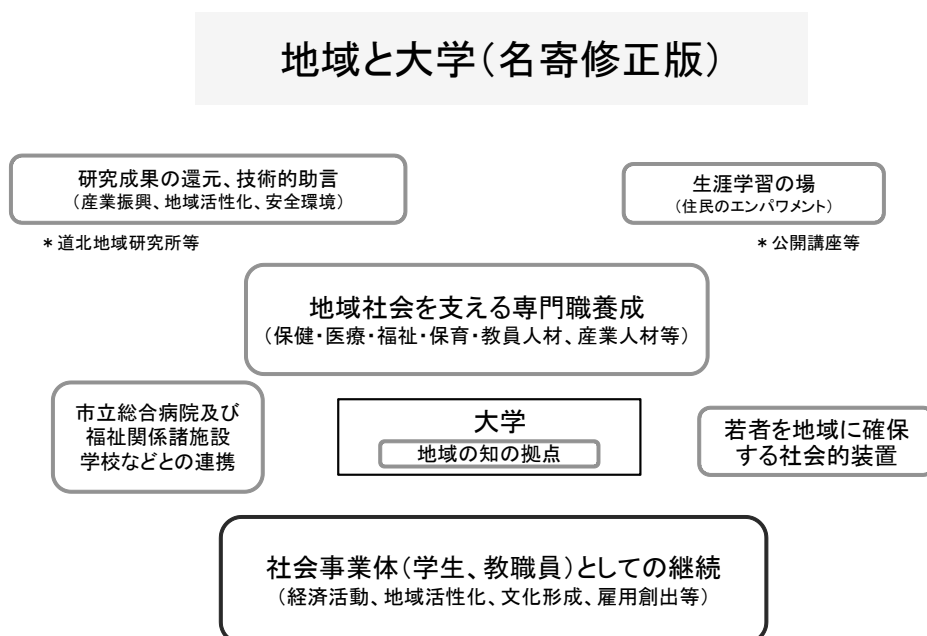
こんなバックグラウンドに、これから、あらためて本学が大宇宙で青く輝き続けるにはどんな条件の重なりが求められるのか。その行為は地域再生とどうかかわるのか。中島みゆき的あるいはNHK的に言えば(プロジェクトX挑戦者たち)、私たちはどこに、どんな「地上の星」を探し求めていくのか。

これから、北都新聞の紙上をお借りして、非力ながら筆を進めてみようと思う。しばらく駄文にお付き合いを願えれば幸いである。なお、この連載の内容・叙述に関しては、すべて筆者が個人として責任をもつものであることをあらかじめ述べておきたい。もちろん、学長職にあることは十分承知している。

2 地域と大学の関係から現状を見直す

週に1回くらいは、気分転換やただ単にアルコールが恋しいことから、だれかれと「シャッター通り」あたりを訪れる。そんなとき、たまにだが、「大学は市民の税金で他の地域の子弟を教育し、外に送り出しているだけではないか」「私たちの子どもには恩恵がないではないか」といった声が漏れ聞こえてくることがある。ここらあたりは、過去の歴史的経過もあり、住民感情もなお微妙であるようだ。また経済的にも、たとえば風連地区の住民が学生のアパート経営の恩恵にあずかることはないので、温度差はある。

しかし、徐々に触れていくが、いまや大学と名寄市の将来は“抜き差しならない”関係にあるのも事実だ。まちの活性化から財政まで、論ずる視点は複眼を必要とするが、まずは文部官僚が作成した相関図をアレンジして、鳥瞰の姿勢を共有することから始めよう。なお、図の中に「社会事業体」という言葉が使われているが、さしあたって公共的性格をもった、経営にも気をつかわなければならない事業体という意味くらいに解釈しておいていただければと思う。



文科省高等教育局高等教育企画課長提供「自治体の大学政策と学長ガバナンス—地域再生の核としての大学モデルをめぐって—」の資料を修正・加工

さて、1960（昭和35）年に発足した名寄女子短期大学の設立目的は、当時の地域住民の健康や栄養の向上、養護・家庭・保健などの女子教員の域内確保、あるいは地域の教育文化の向上などにあった。その誕生は、たとえ当時の池田市長の熱意あふれる「道楽」（某氏の発言）であったにしても、その先見の明は評価されるべきだし、奇跡の重なりとしても名寄の大きな誇りである。しかし、大学をめぐる歴史を振り返れば、本学はほとんど設立時点からしばらくは財政上のお荷物であり、その存続が危ぶまれ、道立移管が模索されていた経過をもっている。だから、開設してすぐに「名寄から出て行ってしまう学生のために高い税金はかける必要はない」（『市立名寄短期大学三十年史』）という議会における発言や、それに伴う閉鎖の危機に、学生たち自身が署名活動をもって反対運動を展開したこともある。

だが今は、その当時とはまったく異なると言っている段階にある。一度、簡単でも上図のような大枠から、少し点検することから始めよう。

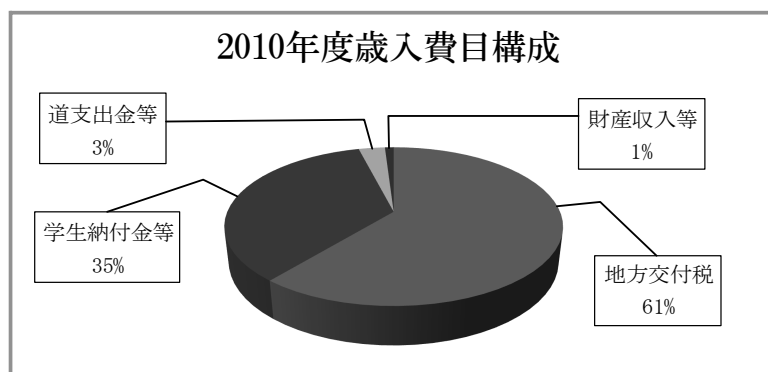
3 市財政から大学を見直してみると

まず簡単に、名寄市の財政面にとって大学とはどんな存在だったか、これを見ていこう。その点からして、もっとも市民の方々が関心をもたれるのは、そして頭にこびりついて離れないのは、大学にどれだけ市民の税金をつぎ込んできたのか、ということだろう。ここに焦点を当てると、設立からしばらくの時期は、いかに深刻な事態が形成されていたか、その困難に名寄市は短大とともによくぞ耐え抜いたという話がじつによくわかる。

『名寄市史』や大学『記念史』あるいは関連する資料を見ると、かつての短大は文字通り“金食い虫”あるいは“お荷物”だった。事実、設立して7、8年くらいのもっとも大変な時期は、大学の年間決算総額のうち学生が払う授業料等は20～30%、それ以外に収入は何もないので、結局「市費」として大学運営費に70～80%も投入されていたという（前田憲「地域社会と公立短期大学」『地域と住民』道北地域研究所1984年）。これでは、いかに大学設置の意義は大きかったにしても、問題にならない方がおかしい。

その後1970年から、大学にも地方交付税（当時は特別交付金と呼ばれていた時期もあった）が国立大学の「運営費交付金」のように配分されるようになり、少しは息をつけるような局面へと変化していく。しかしもちろん、建物など大きな設備投資となると、設置者である市が借金を背負うこととなるので、大学の維持と発展は容易ではなかった。だから、そんな市民の“犠牲的理解”と学生・教職員などの関係者の継続した努力と忍耐の歴史の上に、今日があることは決して忘れていいことではない。

だが、市の財政（とくに“市民の税金”）と大学との関係は、今日まったくと言っていいほど関係を変えた。下記の図はそのことをよく示している。端的に言えば、現在では“お荷物”から“超優良企業”へと性格を変え、いわば総務省的視点（たとえば過疎地の地域振興など）からしてもモデルケースになった。



上の図は2010年度大学運営にかかわる総収入合計約16億6千万円の内訳を円グラフで示したものである。

これによれば、全体の61%が地方交付税の大学分として総務省から措置され、学生からの授業料などの納付金合計は約35%であり、いわゆる一般会計からの繰り入れはない。掲載はしないが、設立時の建物整備などの借金返済分(約2億)を含む支出面をも考慮しても“黒字”である。この“節約分”は、これからできるであろう念願の大学図書館建築の礎石の一部となる予定である。四大化以前に「5年後の22年度からは黒字に転換できる」(2003年、設置者側発言)という見通しは成功した。

この大学にもたらされる地方交付税は、きわめて荒っぽく試算してだが、名寄市全体の地方交付税の約90億円のうち11%強を占めている。また学生が市に納める授業料などは、市の自主財源(交付税のような依存財源ではない)約54億7千万円の10%強を占めている。かくして今や、市の財政は大学があることによって、そこには“抜き差しならない関係”ができあがっている。もちろん、地域間格差是正機能を持った地方交付税はつねに政治の争点でもあることは念頭に置く必要はある。それゆえ、大学経営の“安定化”は大命題である。

4 人もお金も外から確保される

大学に夢や期待とともに幻想を抱いている場合、大学が事業体であること、したがって経営体でもあることを強調することは、しばしば嫌われることがある。だが、地方にある公立大学ほど、設立趣意書あたりにある理念(地元の人材確保や産業振興あるいは文化の向上など)を意識しつつも、実は域外からの学生確保に走らなければならない構造にある。またそうでなければ、公立大学といえども縮小または場合によっては閉鎖に追い込まれるかもしれない。

公立大学の設立経過はさまざまであり、戦前から存在する大学もあれば戦後の産業振興を目的に設立された大学、近年になって増えた医療や福祉人材の養成を目指した大学(本学もその一つ)、地方にも芸術系大学や国際的な大学をといった要望に基づいて生まれた大学など、いろいろである。

さらにそのような歴史的経緯以上に、それぞれの公立大学の財源構成からみると、実に多様である。先に、本学の財源は約6割を地方交付税に依存していることを述べたが、ここで公立大学の財源構成を見ると次のようになる。なお国立・私立大学と公立大学の違いを先に触れておけば、国立大学が文部科学省からの運営費交付金、私立大学の場合は私学補助金を入れ込んで財源が組み立てられているのに対して、公立大学は総務省から地方交付税として配分されるところに特徴がある。

簡単に言えば、[大学の財源構成=A:学生からの納付金等(大学の自主財源)+B:設置団体の負担分+C:地方交付税の大学措置分]となる。ただし、このうち地方交付税の措置は、いわゆる財政力指数が1を上回るような豊かな大都市・都府県などの自治体には原則配分されないもので、A+Bだけで運営される大学もある。たとえば首都大学東京、愛知県立大学、名古屋市立大学などである。

	2012年 8月末 人口	2010年度 設置自治 体財政力 指数	2011年度 在学学生 または入学 者数	設置自治体地域または県内出身者比率
名寄市立大学(名寄市)	30,037	0.29	716	名寄市内・道北で27.8%
釧路公立大学(事務組合)	182,544	0.46	308 (入学者数)	釧路管内・管外の入学者割合は不明、ただし 合格者総数721人のうち管内出身者比率は7.2%
公立はこだて未来大学(広域連合)	277,891	0.47	252 (入学者数)	道南出身者は19.4%
都留文科大学(山梨県都留市)	32,185	0.56	3,275	「地元出身は1%前後、山梨県に広げても 1割程度にすぎない」(同大学ホームページ)
新見公立大学(岡山県新見市)	33,323	0.25	482	県内出身者は14.3%
国際教養大学(秋田県立)	—	0.29	820	県内出身者は15.6%

これに対して、たとえば本学（名寄市財政力指数0.29）を始め、釧路（0.46）、函館（0.47）、しばしば本学と比較される小規模大学がある岡山県の新見市（0.25）、自治体の人口は名寄と同じくらいの山梨県都留市（0.56）などにおいては、やはり本学のように地方交付税は決定的な位置を占める。言うまでもなく財政基盤が弱いからである。なお地方交付税の大学への配分がどれくらいになるかは、原則として〔大学への地方交付税の配分＝基準財政需要額（大学分）×（1－自治体の財政力指数）〕をもとに決められると言われているが、大学の基準財政需要額は、〔単位費用（理系か文系かなど）×測定単位（学生数）×補正係数（寒冷地かどうかなど）〕で算出されるので、単位費用と学生数が大きな決め手となる。本学の学生一人当たりの単位費用は、22年度においては保健福祉学部151万円、短大部64万円であった。

以上のような財源で運営される大学の学生確保は、その大学の偏差値や評判あるいは入学金を含む納付金の多寡、さらには地理的位置（ちなみに新見市は岡山から特急で1時間、都留市は新宿から1時間程度である）や自治体の魅力などを反映しながら決まっていく。上の表にあげた大学のほとんどは、設置団体自治体地域外からの学生が圧倒的多数を占めている。そのうちの一つの国際教養大学は、もともと閉鎖されたアメリカの大学の分校だったのを、秋田県が起死回生を図ってつくった大学である。国際教養大学に限らず、地方公立大学はお金も人も“外から”であることを避けられないでいる。しかし、次に述べるように、その地域にとっての積極的意味は小さくない。

5 若い活力の流入と大学の存在

1960年に産声を上げた本学は、そのねらい通り名寄市内あるいは道北地域出身の若い女子学生を多く受け入れ、卒業後は教員や栄養士などとして地元就職させた。その学生たちは、いわゆる資産家や名望家出身のエリートではない。公務員・教員、農業・自営業など“中産階級”の出身だ（『市立名寄短期大学三十年史』）。しかし彼女たちは、その学生生活がいかに“田舎風”であったにしても、間違いなく道内おける女子エリートの一部であった。

少し数字を拾ってみるとこのことがよくわかる。ここで1960年時点に順調に中学・高校を卒業し大学に入ったと仮定する。「学校基本調査」によると、1957年の中学校卒業生総数109,472人、1960年の高校卒業生総数46,506人で、うち大学・短大に進学した数は合計で8,132人（うち女2,662人）だった。つまり名寄女子短期大学に入学した61人は、この2,662人のうちにあつたのである。このようにみると、前回の財政上の“お荷物”の重さに耐えてきたことも、見方によっては、興味深い。ともかく、この中から、後にメディアなどにも著名な料理専門家やプロフェッショナルな学校栄養士なども生まれた。

だが、下の表からわかるように、市内出身者は1970年以降80年頃までは10～15%程度占めていたものの1990年以降は、5～6%に過ぎなく

本学学生の出身地の動向(入学者別・在学生別)

	名寄市内	同左 (割合)	道北	名寄市内 及び道北 (割合)	その他の 道内	道外	計	人口 国勢調査
1960年	14	23.0%	36	82.0%	11	0	61	35,859
1965年	28	30.1%	35	67.8%	30	0	93	36,106
1970年	13	10.5%	35	38.7%	74	2	124	35,035
1975年	15	11.5%	35	38.5%	77	3	130	35,145
1980年	18	15.5%	24	36.2%	74	0	116	35,032
1985年	11	7.2%	32	28.1%	103	7	153	34,079
1990年	8	5.5%	43	35.2%	76	18	145	30,776
1995年	13	6.1%	70	38.8%	120	11	214	28,749
2000年	13	5.9%	65	35.1%	119	25	222	27,760
2005年	17	8.4%	44	30.2%	99	42	202	26,590
2006年	11	5.2%	54	31.0%	93	52	210	—
2011年	42	5.9%	157	27.8%	329	188	716	30,591

なる。つまり、本学は非常に早い段階からすでに学生の多数派は“外から”だった。50年後、名寄市と道北でざっと30%、それ以外の道内で45%、道外から25%のような構成になっている。本学もまた、各地から学生確保をしない限り、まったく成り立たなくなっている。

注)2011年だけが在学生数。『新名寄史』第2巻等から作成

悩ましいところだ。またそうでなければ、大学の評判も下がり、学生確保が困難な悪循環にはまる。

そのことはともかく、これまでの学生数の推移が示すのは、本学がまた、多少とも過疎化・人口減少の歯止めとなり、地元の活性化に少なくない役割を果たしてきたことである。大学の誕生と並行して振り替えれば、名寄市の人口は1985年ころまで約3万5千人前後で推移し、以降急速に減少し始め、2000年では26,590人（国勢調査）となり、合併して2010年時点で30,591人となったものの、減少傾向は変わらない。しかし、本学の学生数だけは増加してきた。

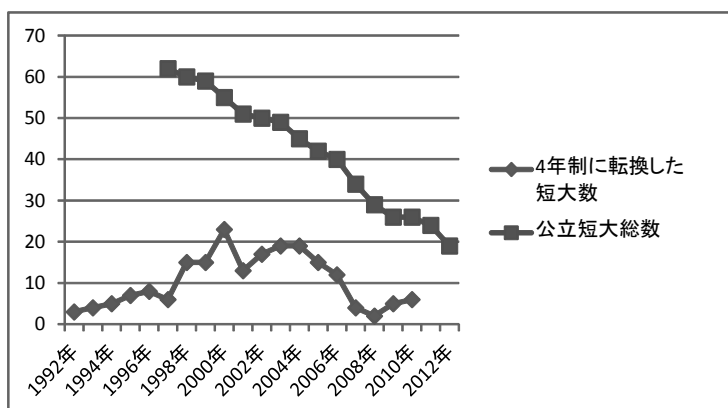
これを人口構成でみるともっと大学の存在の貴重さが見える。少し露骨かもしれないが、大学に去られた紋別市とお隣の士別市と比較すると、15歳～34歳の若者が全人口に占める比率は紋別市が17.1%、士別市が15.7%、名寄市が21.0%となる。なおここでは自衛隊の影響も少なくないので、15歳～24歳の女性の全人口中の比率を比べておくと6.8%、6.6%、8.9%となっている。もしも大学がなければ、とくに若い女性の比率は低下する。華やかさは消え去る。

かれらは消費者としてもお金を落とす。一人月額10万円で暮らしているとして1年で120万円、これに716人をかけると8億6千万円となる。さらに若い活力はアルバイト労働力として名寄市のサービス業を支えているのはご存じだろう。かくしてどこに行っても学生にぶつかることになる。だから同僚によれば、発泡酒を買いたいのにビールを買ってしまうということもあるようだ。この手の話は地方都市の公立大学であればどこでも聞かれることだ。

6 ぎりぎりに間に合った“四大化”

私自身は2010年4月からお世話になったので、市立名寄短期大学の廃止、名寄市立大学保健福祉学部の設立にはまったくかかわっていない。ここにお世話になる前にどれほど本学の“四大化”を知っていたかとなると、すでに退職された某さんが教員確保の要請に私のところに来たことがあったことを思い出すくらいで、その時でも半信半疑だったような記憶がある。正直、「あの名寄に四大？」という感覚だった。

だから、当時のことについては、現在の同僚の教員の苦労話や残された新聞のスクラップ記事などから想像することになる。が、その点はさておき、本学の四大化がどこにあったかを大局的な流れでみると、これが最終電車であったかどうかは別にしても、何とか“ぎりぎり間に合った”という感覚で捉えることも可能である。



本学四大化は2006（平成18）年だが、先に述べた意味は、上図から眺めてみればよくわかるだろう。こういった解釈は、もちろん後付け的なものでもある。しかしそれでも、大きな物事に直面した時についつい近

視眼的になるが、つねにレンズのズームはできるだけ引くべきだという教訓にはなるかもしれない。今回の「ピヤシリの麓から」というフレーズで言えば、麓ではなく頂上から俯瞰することが大事ということだ。

しかしともかく、当時のいわゆる「三位一体改革」の動き、交付税削減の見通し、市職員の人員削減の課題、“上から”迫られる市町村合併など、厳しい環境の中で決断が下されていったのだろう。新聞に飛び交っていた「凍結」「先送り」「留保」といった言葉がその時期の雰囲気を表している。大学関係者や市議会はもちろん、市民の多くの支持があればこそ、何とか乗り切ったのだろう。だからまた、これに引き続いて、光り続ける条件を探し求めるのが“現役”のわれわれの課題である。

この四大化、以前に言及したように、15億円とも18億円ともいわれた初期投資の借金についても順調な返済がなされ、最初の年にこそ入学生の本学の選択をめぐるミスマッチなどもみられたようだが、その後入学した学生の中退率もきわめて低く、就職率も高い。国家試験合格率も理想にはいくぶん遠いが、そう悪くはない。

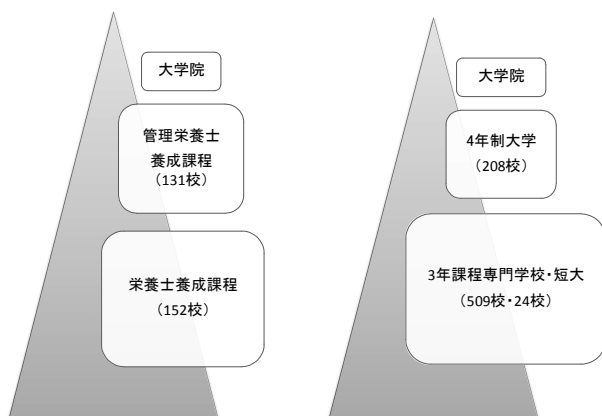
また大学のランキングでは、いろいろな面で公立大学に限定すれば下の方にあるのも事実だ。しかしそれでも、最近公表された『週刊ダイヤモンド』（2012年9月29日特集号）の記事によれば、本学のランキングは高いところにある。四大化の「成果」あるいは結果としてかどうかは別としても、雑誌のいう「偏差値に頼らない大学選び」では全国で143位となっていることを紹介しておきたい。これは「教育力」「就職力」「学生獲得力」なる観点からなる諸指標を並べて全国560校を比較したものだが、北海道では北大、札幌医大、帯広畜産大、小樽商大の次に本学が位置し、以下札幌市立大、北見工大、室蘭工大、北海道文教大、北海道教育大、天使大などと続いている。大学によっては、このランキングは不満タラタラのようなのだが、本学は小規模で就職力が高いところなどが評価されていると思われる。こんなことも、たまにあると多いに励みにはなる。

7 四大化による専門職養成の意味

ところで、先の四大化にあたっては触れられているが、短大発足時から専門職養成に重点を置いてきた本学のいわば“伝統的視点”からすれば、いかなる専門職を養成するか。とくに専門職が階層化する傾向にある場合、その要求にも応えるだけの大学になれるかどうかは、きわめて大きな事柄である。たとえば、日本の大学の国公立優位の伝統的傾向からしても、同じ専門職養成をしながら“低い等級”の資格しか出さない公立大学はどう評価されるか。もちろんそれでも、家庭の経済状況から短大進学しか許さないというような場合、公立短期大学のまま維持してくれた方が喜ばれることもないではない。そのようなことを別とすれば、大学に入学を希望する当事者はもちろん、親の立場からしてもわざわざ、わかっている“低い等級”しか出さないところに行かせるか、ということだ。

医者を別にすれば、看護師にしても、栄養士にしても、社会福祉士、保育士にしても、端的にケアを主とする専門職団体の悲願は、その地位上昇にある。だから、それぞれ技術の高度化とともに高学歴化は必然でもある。それがまた文部科学省ではなく、管轄下の厚生労働省とかかわりを持つところに、本学のような大学の大きな特徴がある。従来のなじみ深い文学部・経済学部・法学部・工学部・理学部・農学部などの一般的な学部とは大きく異なるところだ。

その点で言えば、四大化前の短大の生活科学専攻の定員割れ、短大のままでは栄養士法改正で管理栄養士資格が取得できない、看護の高度医療化に対応できないなどの指摘は正しかった。というより、現時点に立てば、下図のような専門職の階層分化（ピラミッド型）が背景にある中で、本学の四大化は、間違いなく学生がそれなりのプライドを持って、また幹部になれる可能性を持って就職できる基盤を提供したのである。このことの意味は、学歴の高度化、18歳人口の減少、入学定員割れという現象的な言葉に隠れていたが、決



全国栄養士養成施設協会資料(2012年)、及び東京アカデミー看護学校一覧(2012年)より作成

お短大は光塩学園女子短期大学、函館短期大学、釧路短期大学、帯広大谷短期大学、旭川大学短期大学部となる。しかし短大は、ますます管理栄養士の資格取得が難しくなっている。

看護の4年制大学は、北海道では北海道大学、札幌医科大学、札幌市立大学、天使大学、北海道医療大学、北海道文教大学、旭川医科大学、旭川大学、日本赤十字北海道看護大学、および本学の10校である。しかし来年からは、札幌保健医療大学(吉田学園)が開校し、続いて日本福祉学院、北海道工業大学などが予定されている。いわば“林立状態”になるかもしれない。それに加えて、看護教育の大きなすそ野には、34の3年課程専門学校がある。

このような背景で、それぞれの大学が苦勞しているのは教員確保もさりながら、管理栄養士にしても、看護師にしても、実習先の確保である。これらの専門職にとって実習はもっとも重要な教育課程であり、それゆえどこを確保するかは、まさに“陣取り合戦”の様相である。“新参者”が大変であるのは言うまでもない。

8 道内の大学間競争 —仁義なき戦い—

たしかに、大学「改革」をめぐる競争の最終列車には乗り込んだようにも思う。しかし、だからと言って、本学が今後もサバイバルできるかと言えば、ちょっと先は闇である。ここで大学間競争の現状を見ておこう。

全国の私学を束ねる日本私立学校振興・共済事業団私学経営情報センターの「平成24年度私立大学・短期大学等入学志願動向」によれば、今や全国の4年制私立大学571校の45.7% (大胆に言って5割)、同じく私立短期大学330校の69.6% (7割) が定員割れを引き起こし、前年度定員不充足の4年制大学(222校)で次年度も不充足の割合は92.8%、短大では88.6%となっているようだ。つまり、大学も、一度沈んだらほとんど立ち直ることは難しいということだ。

先週シカゴから成田に帰国する飛行機の中のNHKニュースで田中文部大臣の“事件”を知った。思わずうなったが、その後の動きを追ってみれば、本学にとってプラス・マイナスいろいろ考えられる。第6回の内容からすれば、ひとまず安堵でもあり、今後の「児童の四大化」からすれば気にはなる。あのあきれするようなスタンドプレーは別にして、背景には上記のような状況があることも事実だ。しかし、私どもが追求しようとする方向と、大臣が言うような「もっと質の高い大学教育を」などは、何ら変わりはない。あんなことも刺激としてとらえ、より確かなものを求めるしたたかさやタフな精神が必要だ。

もちろんだから、どこの大学も“座して死を待っている”ことはあり得ない。つねにさまざまな情報を収集し分析しながら衣替えを行ってきた。従来のなじみ深い学部名がわけのわからないような名称になってきたのもその表れでもある。ただそうは言っても、簡単には方向転換できるわけではない。どの大学も組織内部の葛藤を経て、ひたすら学生が確保できやすい方向を目指す。現在は、たとえば道内のようなすを見ただけでも、結果的に今のご時世を反映して、本学のような専門職養成を中心にした大学に学生確保の有利性があるのは間違いない。たとえば読売新聞の「大学の實力」という特集から北海道の4年制私学の状況を見るとそのことがよくわかる。

これによると、2011年度及び2012年度ともに学生数が定員数を下回っているのは、新聞掲載順に並べると旭川大学、札幌大学、札幌学院大学、札幌国際大学、千歳科学技術大学、道都大学、苫小牧駒澤大学、函館大学、北翔大学、北海道工業大学（稚内北星大学は2012年度のデータだけが学生数が定員数を下回っている）。2011年度及び2012年度ともに学生数が定員数を上回っているのは、天使大学、日本赤十字北海道看護大学、藤女子大学、北星学園大学、北海道医療大学、北海道情報大学、北海道文教大学、北海道薬科大学（北海学園大学、北海商科大学は2012年度のデータだけが学生数が定員数を上回っている）となっている。

もちろん、学生数が定員数を下回っているから悪くて、上回っているからよい大学という風には単純には言えない。ただ、札幌にあっても私立文系の大学は、有名人を招いたり、メディアを通じた宣伝を強力に展開しているものなかなか難しい局面にあることは読み取れる。それに対して、専門職養成を中心に行っている大学ほど定員確保に関して言えば安定しているように見える。これらのうち後者の大学が四大化に「成功」した本学の競争相手となっている。

学生の獲得をめぐるのは、大学の偏差値や評判、入学料や授業料の高い低い、札幌からの地理的距離、街の雰囲気、国家試験の合格率、就職状況など、あらゆる要素が勝負の要因を構成してくる。また札幌にあっても、地下鉄に直結しているような交通の便に恵まれた大学もあれば、郊外の大学もある。名寄に来るといふことは、まずアパートか寮に住むこととなり、そのアパート代も決して安くはない。“公立”という設置形態以外に、われわれは頼りにするものはあるのだろうか。それを見つけ、育てなければならない。

ともかく、私学に限らず国公立すべての大学が、なりふり構わない“仁義なき戦い”に入っている。たとえば道内では、北海道教育大学が“教育”の看板をおろしてまで衣替えを図っているし（函館校）、身近なところでは旭川大学の「市立大学構想」がある。これらが実現されれば本学はほとんど危機にひんすることは間違いない。さらにそれだけではない。札幌圏の競合する私学からは、本学の入学試験に合格した学生が「特待生」として“引っ張られて”もいるのである。

9 比較される学生納付金

インターネットの普及によって、これまでみてきたように“比較”という手段は頻繁に使われる。あらゆる商品の購入価格がランキングされ、しばしば安いという評判の大型ショッピング店よりさらに安い価格をネットの中に見出す経験もあるだろう。このこと自体、悪いことではなく、情報の公開が一般化する中で、消費者側の選択する論理からしても当たり前のことではある。しかし、現実にはデータを並べられると心穏やかというわけにはいかない。すでにここでも利用した各種の大学ランキングなどはそのひとつである。

その中に大学の学費の比較などもある。授業料などは隠しようがないが、その他の諸々の費用は、あらかじめ入学時に徴収される場合もあり、また入学後に徴収される場合もある。たとえ初年度納付金といっても、厳密な比較は難しい。だからいろいろ並べられると、その旨弁解もしたくなったり、はたして必要な経費全部をデータとして出しているかなど、いろいろな疑問もわいてくる。しかし、学費の大半を負担する親や受験生がどこまで深読みするかはわからない。とりあえず、あまり何も考えずに予備校のデータを並べてみる

と次のようになっている。

全国大学学費データ(大学受験パスナビ:旺文社)(2011年)

大学・学部・学科名	入学金	授業料	施設費	実習費	諸会費	初年度 納入金
名寄市立大学・地域内(栄養)	282,000	535,800	125,000	40,000	50,000	1,032,800
(看護)	282,000	535,800	125,000	130,000	50,000	1,122,800
(福祉)	282,000	535,800	120,000	40,000	50,000	1,027,800
名寄市立大学・地域外(栄養)	420,000	535,800	125,000	40,000	50,000	1,170,800
(看護)	420,000	535,800	125,000	130,000	50,000	1,260,800
(福祉)	420,000	535,800	120,000	40,000	50,000	1,165,800
旭川医科大学・昼間部(看護)	282,000	535,800				817,800
・夜間部(看護)	141,000	267,900				408,900
札幌市立大学・市内居住	141,000	535,800	0	0	40,000	716,800
・市外居住	282,000	535,800	0	0	40,000	857,800
札幌医科大学(保健医療)	282,000	535,800	0	—	100,000	917,800
青森県立保健大学・県内出身	225,600	535,800	0	—	40,000	801,400
・県外出身	338,400	535,800	0	—	40,000	914,200
釧路公立大学(関係市町村)	242,000	535,800	0	0	44,560	822,360
(それ以外)	302,000	535,800	0	0	44,560	822,360
北海道教育大等国立大学	282,000	535,800				817,800
日本赤十字北海道看護大学	450,000	1,200,000	150,000	150,000		1,950,000
藤女子大学(人間生活)	210,000	738,700	170,000	—	16,260	1,134,960
(食物栄養)	210,000	769,900	190,000	—	16,260	1,186,160
(保育)	210,000	750,000	180,000	—	16,260	1,156,260
北海道文教大学(健康栄養)	200,000	810,000	200,000	100,000	28,060	1,338,060
(看護)	300,000	1,000,000	200,000	300,000	28,700	1,828,700
(子ども発達)	200,000	800,000	200,000	50,000	28,060	1,278,060
旭川大学保健福祉(福祉)	200,000	800,000	100,000	100,000	49,500	1,249,500
(看護)	200,000	1,200,000	150,000	150,000	49,500	1,749,500
天使大学(看護)	300,000	1,200,000	200,000	100,000	81,100	1,881,100
(栄養)	300,000	780,000	200,000	180,000	81,100	1,541,100
北星学園大学(全学部)	210,000	770,000	150,000	—	54,910	1,184,910
北海道医療大学(福祉)	300,000	1,050,000	0	—	45,000	1,395,000
(看護)	300,000	1,350,000	0	—	45,000	1,695,000
札幌学院大学(人文)	200,000	834,000	0	0	40,500	1,074,500

このような較べ方は、高校の進路指導の先生などは当然するだろう。だから、本学の「入試広報委員会」のメンバー（7人で構成し、およそ道内の高校150校、東北中心の道外の高校100校近くを学生確保のために訪問する）の苦労も大変になる。

たとえば訪問時に、「公立大学の割に入学金が高く、住居費を考えると名寄に出る気にはならない」（札幌S高校）、「学費（入学金）が高い理由を教えてほしい」（札幌M高校）、「保護者に関しては、やはり『お金』の部分が非常に関心ある部分となる。保護者はまず授業料などのページを見て、次に就職などの状況を見る。これらの部分に何らかの疑問が浮かべば、保護者は子どもをその大学に出さなくなってしまう」（同）と言われれば、その答えはだれでもがしどろもどろになる。

たしかに表からは、たとえば看護などを見れば、その授業料の差は私学と国公立では歴然としている。あまりに違うのでやはり国公立を優先的に選択する傾向も当然かもしれない。だが、栄養や社会福祉となるとその差はそれほど大きなものではなくなる。しかも、札幌など周辺の学生であれば、こちらに来るにはアパートか寮に暮らさない限り入学できない。だから、よほど本学や名寄という街あるいは自然に特徴と魅力がない限り、わざわざ来ないことも当たり前となる。そうであるがゆえに、本学の入学金の「高さ」は、見る人から見れば目立つこととなる。

しかし、本学はいったん入学金などが決まると容易には変更できないようなシステムになっている。

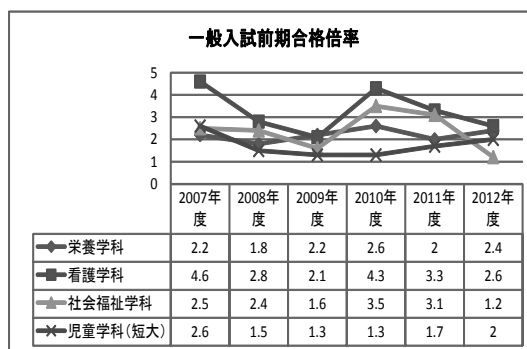
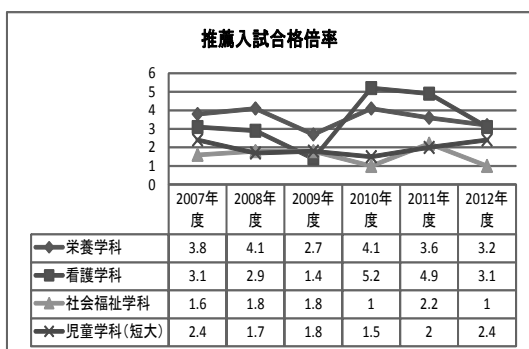
10 なお不安定な本学の入試動向

これまで見てきたように、学生確保はどの大学も至上命題である。しかしあたりまえだが、入学する学生の中身は大学によって大きく異なる。海外からの確保も含めて優秀な学生を確保しようとする有名大学から、とにかく人数を確保できればよしとする大学までさまざまだ。その確保の“安定度”は、前々回にも見た定

員が満たされるかどうかのも一つの指標だが、いわゆる入試倍率の推移を見ることも欠かせない。

どんな要因で倍率が決まるかは一般論でしか言えないが、もっとも影響あるのは当該大学の入学難易度を示す偏差値、伝統と組み合わせた知名度や社会的評価の高低、入学志望学部が就職に有利か不利か、その実績はどうか、国公立か私立か、入学金や授業料はどうか、大都市にあるか地方にあるか、そして景気動向などである。とくに専門職養成中心の大学は、その専門職の社会的地位や需給関係なども大きく反映する。さらに、受験生の視点に立てば、センター試験のでき具合によって受験先も変更されることから、倍率の変動に大きな影響もあたえる。

とりあえず本学の動向をみると下図のようになっている。この評価の前提として、あらかじめ有名予備校などが毎年出している本学の学科ごとの「合格目標偏差値」あるいは「合格難易度」といった数字を見ておくと、次のようになっている。2012年の場合、ベネッセによる合格目標偏差値は高い方から看護学科53、栄養学科52、社会福祉学科51、短期大学部児童学科47である。また代々木ゼミナールの合格難易度は看護70%、栄養69%、社会福祉65%である（短大は対象外とされている）。



ここで使用しているデータは、「推薦入試」と「一般入試前期」のそれだが、このほかに「一般入試後期」もある。また大学によっては、前期と後期の真ん中をねらった「一般入試中期」、いわゆるAO入試、私学ではさらにさまざまな試験形態がある。ここでは本学の状況がもっとも見えやすい推薦と一般前期の数字を取り上げグラフ化している。なおここでいう倍率は「合格倍率」（受験者数を合格者数で除した数値）であり、志願者数を定員数で除したものではない。ここからはまず、本学の中でも各学科によって相当倍率に違いがあるだけでなく、推薦と一般前期では動きが異なっていることがわかる。それらは次のように解釈される。

推薦入試は11月、一般入試前期は2月であり、その意味の違いが反映している。推薦方式は、受験生からすれば、一刻も早く入学を決めてしまいたい、とくに看護や栄養は競争も厳しく、さらに国公立と私学では相当授業料の開きがあるので、受ければ入学を決めてしまいたい、大学からすれば早く入学生を確保したい、となる。

一般入試は、受験生からすれば私学も含めあちこち受験してもっとも好ましいところに行きたい、とくに社会福祉であれば札幌市内と周辺に学部や学科を設置している大学はあるし、授業料の格差も看護ほどの開きはないので、わざわざ推薦に応募しなくてもいいとなる。またセンター試験の成績も変動要因となる。しかし大学側は、このあたりはなかなか読めない。

だが、はっきりと言えるのは、保健福祉学部の社会福祉学科では、推薦でも募集定員に満たない受験者しか確保できていない年がこの6年間で2回、短大児童学科も多少の変動はあるが2倍を切る年が4回あることだ。だから、普通に考えて、この二つの学科を中心に本学の不安定な状況と改革課題がつくられているこ

とは間違いない。学生を安定的に確保するためには、後に触れるように、偏差値と入試倍率は一般に正比例するといったこと、あるいは地理的に不利なこの名寄にいかん特徴ある学科を創り出していかん、こういった課題が横たわっている。

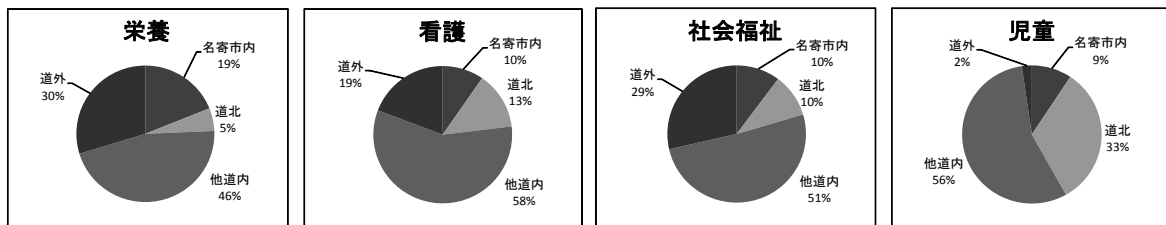
11 地域社会を支える人材の供給体

大学間競争に打ち勝つポイントはさまざまであるが、あまり社会的に評価されていないような大学が取る戦略は、こういう時代だからこそ“就職率”などの向上である。大手の新聞（読売）などが全国の大学にデータを出させて卒業生のうちどれほど「正規職」として就職させたかなどは、どの大学も神経質になるところだ。

だがその視点から本学の問題について触れるのは次回にして、もともとこの連載が「地域と大学」という枠組みから考察を加えていることから、本学はどこに人材を供給してきているかを概観しておく必要がある。

「入口」の状況については第5回で触れた。大まかに言って、名寄と道北から30%、それ以外の道内で45%、道外から25%となっていた。ここでは、かれらが「出口」としてどこに職を求めて行くか、大学からはどこに自ら育てた専門職を人材として供給しているか、である。

下の図は、平成22（2010）年度の本学卒業生の地域別就職動向を見たものである。したがって、かれらの入学年度は順調に卒業したとして平成19年度（開学2期生）である。そのかれらがどこから来てどこへ行ったか。具体的に細かい数字は控えるが、単純に下図の対象となっている就職決定者（181名）の出身校を念頭に、名寄市及び道北だけの出身者の動向をみると、まず入学者としては栄養で30%、看護で25%、社会福祉で24%、児童で43%を占めていたのが、就職者ではそれぞれ24%、23%、20%、42%となっている。



やはり、就職市場の狭さから地元（ここでは名寄と道北と仮定する）に残るのは幾分比率的には下がるものの、上記のような入口出口の動向からすれば、本学の卒業生は基本的には期待通り、地域社会に大いに貢献していることは明らかである。そしておそらくは、道内の中でも“地方（過疎地）”からきて“地方（過疎地）”に帰っている、あるいは“進出している”傾向は他の大学よりも強いだろう。看護学科であれば、保健師としての就職者数が全道でもっとも多いことも、そのことを裏付けている。だから、名寄市内の個々の受け入れ先の関係者から時には不満（看護師を中心に需要が高い人材が地元で確保できない）をきくことがあるが、まずはこの期待されたような現実の動向を確認しておく必要がある。さらに、広く道外も含めて、各地の職場で専門職として貢献していることこそ、本学の誇りでもあろう。

ところで上記のような不満、これをどう解釈するかは、さまざまだろう。だが、たとえば名寄高校の場合でも、4年制大学進学者のうち名寄から出た者は2009年度、2010年度、2011年度卒業生のうち88.4%、91.8%、89.1%を占め、道外まで出て行ったのは18.8%、26.2%、20.0%（名寄高校資料）となっている。その意味では、互いに地域間で「出る者、来る者」が入り乱れていると言える。だからこそ、外から来た学生たちも市民みんななかわいがることも、いわばギブアンドテイクである。わが子を外に雄飛させたい親が他人の子に「残るべきだ」とは言えない。

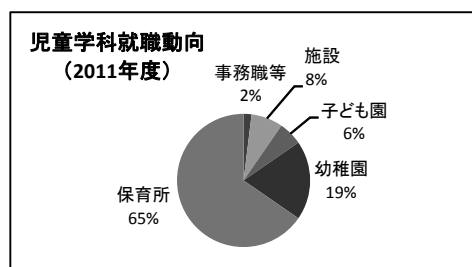
さらに、これはまだアンケートなどで試したことはないが、卒業後にも“名寄に残りたいか”というような問いかけにどう学生たちは答えるだろうか。かなり古いものだが、北海道新聞（2003年10月10日付）には「JCの名寄短大生意識調査」なる記事があり、「学校生活は有意義、卒業後は居住望まず」という見出しで、「住みたい」4%、「就職があれば住みたい」19%、「住みたくない」70%なる結果を載せている。大学の就職指導の責任もないとは言わないが、ここらあたりは一度市民や関係者ともじっくり話してみたいものだ。

12 安定職を求める学生たち

率直に今の学生たちはかわいそうだと思う。団塊の世代と呼ばれるわれわれは、少々の反体制的思考性も、むしろ評価されながら（飲み込まれながら）、大概はどこかに就職できた。民間企業がともかく好調であったので、安定職として採用されるのも並大抵ではない地方公務員も人気職ではなかった。しかし現在では、4年制大卒の正規雇用率も平均で男子58%、女子66%だという（読売新聞「大学の實力」）。ワーキングプアが大卒にも及んでいる。その点、専門職養成の4大卒は相対的には恵まれているように見える。

たしかに本学は、看護は売り手市場であり、栄養も市場としては大きくはないが、管理栄養士を送り出す公立大学が北海道と東北では少ないこともあり、それなりに健闘している。また、社会福祉関係もいい労働条件とは必ずしも言えないものの、正規職としての就職はそれほど困難ではない。

だが児童学科の場合は、社会からの期待に十分応えながらも、保育自体の専門職としての社会的評価がまだ低く、また養成校の中心はなお短大や専門学校であり、就職にあたっての正規雇用の割合は低い。言い換えれば、下に掲載した就職動向からよくわかるように、卒業生のほとんどが保育所や幼稚園などに就職し、その評判も悪くない（むしろ良い）。その意味では、社会からの期待に応え、その役割をよく果たしている。しかし表示はしていないが、たとえば2011年度の保育所だけの就職における正規・非正規割合をみると半分は非正規となっている。



児童学科正規・非正規就職動向

	就職者数 (進学を 除く)	正規雇用	正規雇用 のうち 公務員	非正規 雇用	正規雇用 率(%)
2008年度	51	31	7	20	60.8
2009年度	50	30	11	20	60.0
2010年度	43	26	15	17	60.5
2011年度	53	33	15	20	62.3

このことが同じ保育士を目指す場合にも、学生にどんな動向を生み出すかと言えば、当然のことながら学生たちは、その就業の不安定さをできれば回避しようとする。だから、上の表に見られるように、正規雇用のうちでも公務員保育士を目指すものが増えている。さらに、これまで本学の短大から4年制大学に編入した学生（2005年から2009年度まで）10名の動向をみると、公立保育所正規雇用6名、私立保育所正規雇用1名、児童養護施設1名、障害者施設1名、地方公務員正規雇用1名となっている。学生たちの編入目的はもっと勉強したいということだろうが、結果的には安定を目指したとも言える。

このような現状の就職上の問題点を保育関係以外の関係者の場で話すと、しばしば返ってくるのは、「今はみんな非正規だよ」「役所だって非正規で雇用しなければやっていけない」などという言葉である。このこと自体、「民営化」「規制緩和」の流れからすればうなずけないことはない。しかしこのような場面での発言は、たいていは経営者であればその側面から、そうでなくても財源問題と絡めた視点からの発言が多い。だが、今度はそれぞれ子を持つ親の視点から問いかけると、その返事も曖昧になる。人間はひとりでもいろ

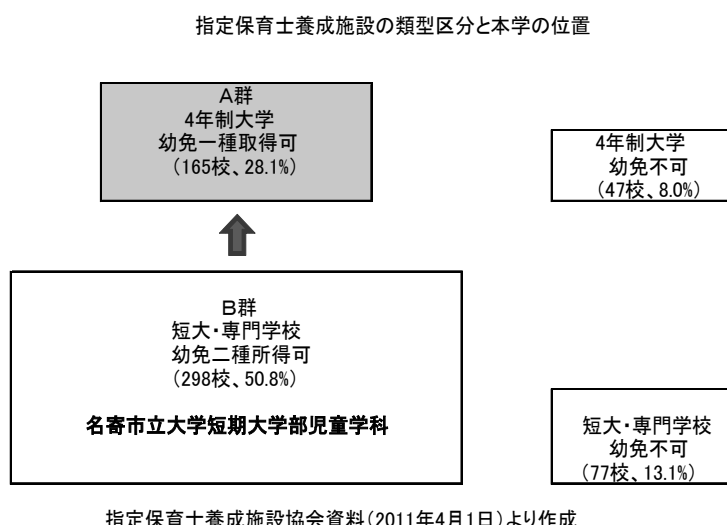
いろな“顔”を持つことからやむを得ないが、本学を盛り上げる、わが子を本学で学ばせるという観点に立つとどうなのかな、と思ったりもする。また次回あたりに触れることになるが、もう少し先を見通した発想はできないものか、などと考えたりする。

そのことはともかく、こんな現実も知っておいてもいいだろう。それは、2012年度札幌市の公務員保育士採用を見ると24名（うち4大採用が16名、短大採用が8名）だが、このうち4大採用の16名のうち12名が藤女子大ということだ。しかし本学からはゼロである。本学社会福祉学科からは札幌市職員採用が昨年度はじめて、また速報では2013年度も複数の採用が決まっていることからすると、短大の不利は免れがたい。みんな公務員などということはあり得ないにしても、これらの結果がどんな影響を本学の評価に及ぼすか、である。本学が“強い”はずの過疎地自治体でも、4年制・2年制に区別なく試験採用をすれば、負ける可能性は限りなく高い。そのことが最近では現実化している。

13 短大児童学科と学歴・資格格差

短大にあっては、2年間という短い時間しかないことから、入学したとたんから就職に対する不安や悩みが付きまとう。たとえば、全国の公立短期大学の1年生に対するアンケートでは、「現在、短大に在学していて一番不安、または心配なことは何ですか」という設問に対して、「経済上の問題（学費・生活費など）」は11.7%と低いが、「進路選択問題（進学・就職等）」が83.5%と高くなっている（公立短期大学協会資料、2011年11月調査実施）。1年生の秋の時点でこうである。2年間での資格取得と学費を4年間払わなくてもいいことをメリットとして意識しつつも、タイトで詰め込み的な授業が展開される中で、不安はすぐそこにやってくる。

しかも前回みたように、保育労働市場が一般に安定したものではないことから、学生がたちの就職をめぐる悩みも2年にもなればさらに増し、4大卒との比較も意識せざるをえなくなる。連載第7回に、本学四大化にともなう専門職養成の意味を問うたことがあったが、ここでも“児童学科の四大化”にあたっての意味について少し触れておきたい。掲載した図は、全国の指定保育士養成施設協会に参加している587校を分類したものである。なおここで「幼免不可」とは、幼稚園免許の資格取得ができない（たとえば保育士養成だけに特化している、あるいは社会福祉系で保育士資格だけを出している学校）ことを示している。



この図の背後に進行していたのは、この間の短大の四大化と教育系（幼児教育あるいは小学校教員免許資格を出せる）の学科などを持つ4年制私学や教員養成系の国立大学などによる保育士資格の提供の動きである。つまり、幼稚園教諭資格だけでは学生の獲得に不安を抱く大学が保育士養成にも乗り出していたということである。

ここから推測されるのは、いくら本学短大部の卒業生の評判が良くても、短大という学歴格差に加えて「幼稚園教諭一種」の免許は取得できないことから、学生たちは業界の幹部になるにははじめから不利な条件を

強いられている可能性が高いことだ。保育士・幼稚園教諭の階層分化が見通される中で、本学がこのまま下のB群にとどまるか、上のA群に移行するかどうかは、学生の、卒業後の、また大学教員のプライドに大きな影響を与える。

本学では、今年度、保育所、幼稚園、自治体、高校の進路指導教員などへのインタビューやアンケート調査を実施してきた。その中で興味深い一つは、現役の保育士に対する設問で「保育として必要なこと」を聞けば、「発達理解」「洞察力」「子と一緒に遊ぶ」「コミュニケーション」などが高く出てくる。しかし次に「あなた自身が高めたいこと」を問うと、「保護者支援力」「障害児保育理解」が新たに大きな比重を占めてくることだ。この背景には、「気になる子についての理解を深めるのは2年間では無理」(H保育園)、「子どもの状態も81名中18名に発達障害が疑われる。経験ある4大卒職員が即対応できるように思われる」(M幼稚園)、あるいは「短大の2年間では保護者への対応を学ぶことができない」(N子ども園)、「親の対応が大変になってきている。親を怖がってしまう」(札幌市子ども未来局)などという状況がある。

もう一つは、前回触れたように、たしかに保育士などの雇用条件には問題がある。だから、たとえば「4大卒の保育士はいない。『来たい』という人がいたが4大卒の給与体系ができていない・・・ただ、このまま黙っていても条件が良くなるとは思えない。実際に4大卒が増えて行くことを大切にしたい。むしろそれを突破口にしたい」(H保育園)という意見も、なるほどと思う。しかしすでに、「現在の職員は8名で、幼稚園教諭と保育士の両方の免許を持っている。将来の幹部候補としては4大が有利」(M幼稚園)、「一種教諭でない管理職試験は受けられない」(S幼稚園)。「これからは4大卒が望ましい、2年間ではいろいろな力をつけるのは難しい」(MHP保育園)。「現場に立った時にスタートラインが違っている。卒論を書くことの意味が大きい。物事を掘り下げて考える力や学び続ける姿勢など」(W幼稚園)といったことも明白だ。もちろん短大卒であろうと、4大卒であろうと、「人間性が大きい」(KK保育園)ことは変わらない。

14 “児童の4大化”をめぐり大義

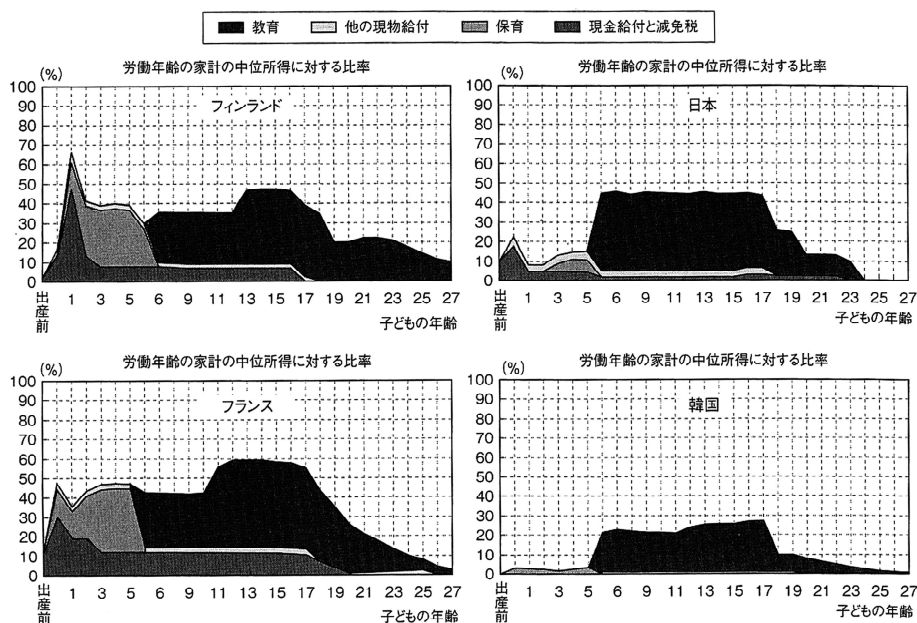
いささか大げさな見出しだが、ここではこれまでとは異なった視点から“児童の四大化”を論じてみよう。そうすると、これまでみてきた学生たちの雇用をめぐる不安や養成施設の四大化の遅れ、日本の就学前教育や保育の問題点、それらの遠因が姿を現してくる。さらに言えば、今度はそれらのバリアを乗り越えることの意味(大義)もまた、おぼろげながら見えてくる。本学児童学科の四大化に伴う研究・教育上の課題もここから派生してくる。教員の研究上の責任も逃れられない。

この数年、その迷走するドタバタ劇の結末はさしあたって問わないが、「子ども手当」や「幼保一体化」の議論に見られるように、それなりに就学前の子どもや家族に政策的焦点が当てられてきたのは一步前進であると思う。その背景の一つには、社会保障が高齢期対象に偏っていること、子ども期の政策的対応が日本ではとくに遅れており、今後の社会発展を考えたとき、ことは重要だという認識が生まれつつあったことがある。しかしなお、その論点から将来を見通す姿勢は弱い。

欧米では近年、就学前の時期は生物学的遺伝とは対照的に子どもの育ちをめぐる社会的環境がもっとも大きな力を発揮する時期であり、したがって子どもたちの人生に平等のライフチャンスを与えることが、社会の安定的発展からもきわめて重要だということが強調されてきている。またそうしないと、たとえば北欧など小国は、その豊かな地位を将来的にも維持できないという意識がそこにはある。

これを社会のコスト・ベネフィット(費用便益)という観点から問題にすると、たとえば「就学前」と「学齢期」と「学齢期以後」の投資のいわば社会的還元率(リターン)は、もちろん成人期の職業訓練などにも効果もあるが、それよりはるかに高い効果が得られるのは“就学前の投資”だということである。このような問題意識から、さしあたって以下の図を掲載しよう。インパクトはあるはずである。

子どもの年齢別・政策別の平均社会支出、労働年齢の家計の中位所得に対する比率（2003年）



注：OECD (2009) Doing Better for children 掲載のFig.3.6より4国を集めたもの。

これは、子ども一人当たりに対して、各国が学校教育、就学前教育・保育、各種の現金・現物給付、税制優遇措置などを含んでどれくらいの額を支出しているかを算出し、それが労働年齢層の家計所得の中央値の額に対してどれほど占めているかの割合を子どもの年齢別に図におとしたものである。ここからは、たとえばフィンランドとフランスおよび日本と韓国とでは、はっきりと就学前の段階の子ども期を中心に大きく違っていることがわかる。つまり、この差異はそれぞれの国の子どもをめぐる政策戦略が大きく異なっていることを示している。おそらくこのことがまた、子どもの出生率の差（フィンランドとフランスは上昇）をも生み出していると考えても間違いはない。

かくして、人生前半の早い段階における是正政策がきわめて弱体なのが日本や韓国であることが浮き彫りにされてくる。前回までみてきた保育士の待遇などの諸問題もこのことにかかわっている。そう言えば、今回の選挙もこれを争点にしようという政党と就学後の教育（図に見る「高い台地」）に焦点を合わせようという政党があるようだ。どちらも大事だが、みなさんはこの図を見てどう思うだろうか。

15 “ケアの未来をひらく名寄市立大学”

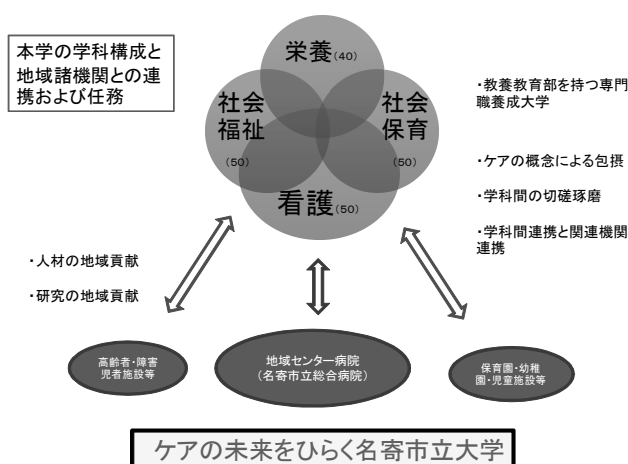
あまり続けると読む人も飽きてくるだろうし、だんだん単純なミスや“筆の滑り”も起きる。現に校正もしないままに新聞に印刷されてお手元に届くので、いくつかの舌足らずな表現や間違いにも気がついている。したがって、ちょうど回数分の切りもいいので、ここで一端打ち切り、これまでを前半戦として休憩に入ろうと思う。

また、懸案の“児童の四大化＝学部再編強化”の具体化に関しても、これまで触れてきたこと以外に、理念、カリキュラム、さらなる入口・出口の検討と予測など、議論は進んでいるものの、なお設置者サイドの決意も明確でない以上、これ以上論じることは控えたい。

ただこの前半最後に、いろいろ学長は勝手に書いているが、何を目指しているのかわからないとなると、それは問題なしとしない。さらに、“経営”ばかり言って夢がないと言われそうなので、もしも短大を廃止し、新たな「社会保育学科」（教授会では承認されている名称）が立ち上がったなら、本学はどんな大学に

なるのか、その点のイメージを図示しておきたい。

さて、2006年に開学した保健福祉学部の「設置審」（いま話題の大学設置・学校法人審議会）申請時の文章は、本学の理念として、その目的を「保健・医療・福祉サービスの展開に貢献する人材の育成」としていた。したがって、これに「保育」を加えても違和感はない。また続けて「本学の改組計画は、『栄養学科、看護学科、社会福祉学科』で学部を構成するものであるが、いずれの学科とも『ひと』を対象とする支援サービスに優れた能力を備えて携わる人材を育むことが使命である」とあることから、やはりこれに「新たに『社会保育学科』を加えて」と付け足しても十分まとまりのある内容となる。とりあえず、いくつかの要素を加えて全体図にしてみると下のように描ける。



先に触れたように、これはあくまでイメージにすぎないので各学科などの定員数も仮の数字にすぎない。だがこの図からは、「ひと」一般ではなく、本学各学科が対象とするのは、とくに子ども、高齢者や障害者あるいは病気の人びとへの栄養や看護など、すべてがケアを必要としている人びとであり、それゆえケアという言葉で括ることが可能であることを読み取ってほしい。さらにこのケアという概念は、個人を対象とするだけでなく、地域社会（コミュニティ）まで広げて考えることができる意味をも持っている。

たしかに本学の使命は、「ひと」を対象とする支援サービス、その人材提供でもあることは間違いない。しかし、人材という商品が支援サービスという商品を与えるというのではさみしい。「ケアの未来をひらく」とは、それとは異なって、ケアされる（受け手）人とケアする（与え手）人との相互行為と関係のありようを本質とし、新しい知識・技術を具体化し、両者の共感や権利に裏付けられたものでもあることを意識し、その理想形を体現するためには、社会のありようや価値規範の変革を伴うものでなければという認識に立ち、チャレンジしていくことだと思ふ。そのことを教育面でも研究面でも実践的に追求していくことがない限り、少子高齢化社会としての日本の未来は描けない。

そんな諸課題を地域の関係諸機関との連携とともに追求したい。4年制教育という共通の基盤に立った各学科間の切磋琢磨ある組織体の確立を通じて、地域に有能な専門職を配置し、研究を通じて地域の諸課題解決に貢献し、文字通りCOCを目指したいものだ。“ケアの未来をひらく名寄市立大学”である。

鬼に笑われそうなので大言壮語もここまでにしよう。みなさまよいお年をお迎えください。

16 それぞれのメッセージ

1月1日付け朝日新聞を開いていくと、1面借り切って道内12大学の「2013年大学トップメッセージ—羽ばたくみなさんの新年を応援します—」なる広告が目にとび込んできた。あの元旦号特有の分厚い付録のような紙面ではなく、通常の紙面だったので、いったい掲載料はどれほどだったのかと思った。ともかく、紙面いっぱい道内私学の学長の写真とそれぞれのメッセージ文章があった。

前回（昨年暮れ）提示したように、本学のキャッチコピーは「ケアの未来をひらく名寄市立大学」であるので、当然関心はそれぞれの大学の短い“見出し”のタイトルに目がいった。ここでは掲載された順序にし

たがって、そのままそれぞれのメッセージのタイトルだけ並べて紹介したい。大学ごとの苦勞が察せられるはずである。

旭川大学：地域に根ざし、地域を拓き、地域に拓かれた、志立旭川大学

札幌大学：地域に貢献し、地域を共に創造する、「地域共創」の気概を持つ学生を育て、広く社会へ

天使大学：建学の精神「愛を通して真理へ」一人々の健康のために「心と技」を備えた専門職業人の育成

東海大学：世界をフィールドに、新時代に向けた先駆的实践と、人道に根ざした真の教育を目指す。

北星学園大学：知識と知恵を兼ね備えた豊かな人間性・社会性・国際性を養い、有為な人材を広く社会へ

北海商科大学：アジアの時代に、アジアを学ぶ。「商学」で新たな礎を築く、もうひとつの学園。

札幌国際大学：北海道に貢献する人材を育てる！—就職支援と家計支援—

千歳科学技術大学：Best Care, Best Success 未来を創る科学を学ぶ

道都大学：「百折不撓」を道標に逆境に負けない人間を育成。

藤女子大学：国際的な視野を持ち、社会に貢献できる自立した女性の育成を目指します。

北海学園大学：建学の精神を胸に秘めた卒業生は7万5千人を超えました。

北海道文教大学：人とともに。人のために。

なお、ここにはいくつかの道内私学は掲載されていない。その理由はわからないが、また個々の評価は避けるが、少なくとも12大学の宣伝のポイントの置き方は読みとれる。

ところで昨年秋、これと似たような特集が朝日新聞にも掲載されたことがある。本学の紹介もそこには載った。ただ今回と異なっているのは、あのときは、大学の認証評価機関の一つである「大学基準協会」という組織が、昨年度当該協会に認証評価をゆだねた大学にそれぞれ掲載料を請求して紹介するというプランが引込まれた後（おそらく本学を含めた「お金を払ってまで載せたくない」という大学に反発され）、最終的には大学基準協会の「持ち出し」で全国数十の国公立大学が紹介された特集だった。思うに、結果的に大学基準協会が「取りすぎ」の反省を余儀なくされて折れたのだろう。しかし、書き込める文章ははるかに限定がかかっていたが、上記の道内私学の宣伝のように、学長の写真付きでメッセージが掲載されたのは事実だ。



いずれにしても昨年、本学の紹介文は、叙述の統一性を保ちたいという協会の「手直し」があったが、手直し前に大学基準協会に送付したものは次の如くであった。

「夏冬の温度差60度の厳しい自然。だが住みよさランキングはつねに道内3位以内に入る名寄市。ここに50年を超える歴史のある小さくてもきらりと光る公立大学がある。栄養・看護・福祉・保育からなる本学の使命は『ケアの未来をひらく』ことだ」

後半戦はここらあたりから始めよう。ねらいは、前半戦の内容との重複をできるだけ避けながら、①本学の地域貢献あるいは本学と諸機関・諸施設を含む地域社会とのかかわり、②本学が今後COCとして主体的にかかわっていく際の戦略、③それが遂行されるはずの地域社会（とくに名寄市）の構造的な特徴、④大学側からの地域に向けての問題提起、といったことだ。

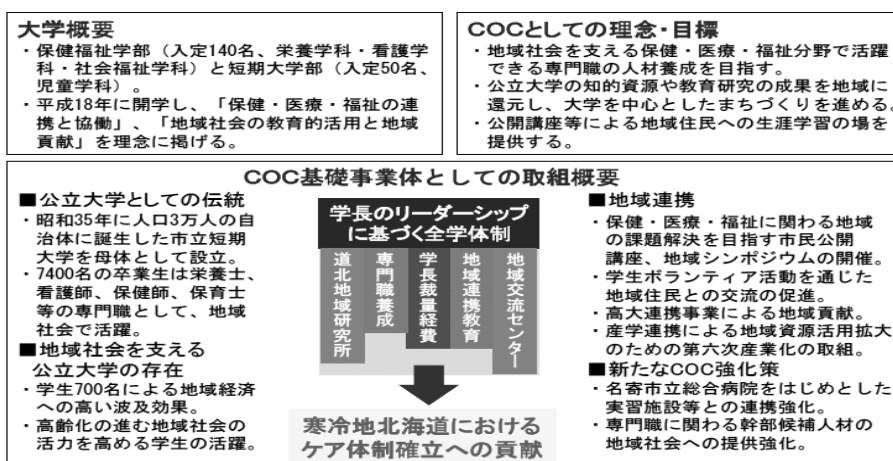
なお、どうでもいいかもしれないが、ある情報によれば、元日の朝日新聞の掲載料は2,500万円だったそう。1校当たり200万円、本学ではとても払えない、払ってもらえない。

17 本学の使命と地域戦略の構図

政権の交代でどうなるかは不透明だが、文部科学省が新規の概算要求で目玉事業としていたのが、“地域と大学”“大学と地域”というフレーズにかかわった大学のCOC構想である。要するに、社会における大学の存在意義を地域社会レベルで目に見えるものにし、具体的な成果を上げ、アピールしようということだ。とくに、これまで地域と教員個人とのつながりはあっても、大学が組織として地域との連携に進んでいないという状況だったのをさらに一歩進めようとするものだ。さらに文部科学省的（厚生労働省的ではなく）に強調されているのは、学生にも地域の現実に直接触れさせることによって、さらなる学修意欲を刺激しようという作戦である。

本学も、公立大学協会の求めに応じてポンチ絵（主に日本では概略図、構想図といった意味で使用されているが、このほか風刺や寓意を込めた絵の意味もある）として提出したのが下記の図である。

COC拠点としての名寄市立大学(設置団体:北海道名寄市) 地域からケアの未来をひらく社会事業体



このような各大学のポンチ絵を集めた会合が開かれたのが全国公立大学協会総会であった。余談だが、会場となった静岡県立大学は、高台にある県立美術館に隣接し、アカデミックな赤茶色の学び舎からは富士山が眺望できる、数多く見てきた大学でも上位にランクされる景観を有した大学だ。

それはともかく、提出された全国80余大学の構想はそれぞれ工夫を凝らして多種多様であった。しかし本学が、ただ単に地域にかかわる研究課題やイベントなどを並列的に並べたような絵を避けたことは正解だった。なぜなら、大学の理念や目標、あるいはその大学のミッション（使命）などがはっきり表せないとわかりやすい絵は描けないからである。また1枚にあまりに内容を詰め込めば、多くの人が読むことを避けるか、あるいは焦点がぼけるからだ。かくしてそれなりに、プレゼンしやすく、印象付けることが可能となったのが掲載したポンチ絵だと（勝手にだが）思う。

いくぶん自画自賛すれば、これまで“児童の四大化＝学部再編・強化”にかかわって、あるいは大学の認証評価に関連して、「本学の向かうべき先は」「その理念は」などと議論してきたことが“生きてきた”とい

うことである。このような今後の方向性を示すことにポイントをおいた絵は“まちづくり”もまったく同じであるはずだ。

もちろん、この図に表されている内容の多くはこれからの課題の提示にすぎない。しかし、いま大学改革の重点事項の一つに求められているのは、地域と大学の「組織的連携」であり、地域が大学のポテンシャルを生かし切れていない現状を変え、地域社会再生の「拠点」としての大学づくりを推進することである。

この図で言えば、図の左側の課題に関してはすでに15回の連載で議論の素材を提供してきた。今後は真中の学長の「リーダーシップに基づく全学体制」の視点から、図の右側の「地域連携」「新たなCOC強化策」などといったところから生まれてくる諸課題を扱うことが中心となる。しかしその場合には、「地域からケアの未来をひらく社会事業体」としての「地域」そのものの分析も必要不可欠となる。次回からしばらく、主として中心舞台となる名寄市に対する“独断的考察”を行ってみよう。

18 「住みよさランキング」の分析

大学のCOCの展開の舞台に想定されるのは、主に名寄市や上川北部あるいは広く道北または北・北海道などであろう。また昨年締結された「定住自立圏構想」の範囲の対象となっている市町村といってもいい。だがまずは、名寄市の「住みよさランキング」の分析から始めよう。これは私自身も意識的に宣伝文句としても使用したことがある数字（16回目参照）だが、そうは言うものの、正直“実感”とのギャップは意識せざるを得ず、さらに検討を加えてみたいと思ったからである。そして、これはこれで名寄の特徴を表現している数字でもあるからだ。

ただそうすると、ついつい学長というより“研究者としての顔”が出てくるので、いくらかひねくって言えば、上からならぬ「斜め目線」で「不都合な真実」を浮き彫りさせることになるかもしれない。その意図は、地域をくさすことではなく、そのことから目をそらさないで、地域にとっても大学にとっても、今後真正面から課題にぶつかっていく際の地ならしあるいは準備の役割を果たすことにある、と考えていただけると幸いである。

さて、週刊『東洋経済』の恒例の全都市（810市区）「住みよさランキング」によれば、2012年では道内では名寄市は3番目にランキングされている。ここでは5位までを表にしてある。これによれば、私は単身赴任で伴侶は北広島にいるので“いいところ”かもしれない。それはともかく、どのように順位が決まるかは下記の指標によるようだ。

安心度：病院・診療所の病床数及び介護施設の定員数（人口当たり）や出生数（15～49歳女性人口当たり）、**利便度**：小売業年間商品販売額（人口当たり）、大型小売店店舗面積（人口当たり）、**快適度**：公共下水道普及率、都市公園面積（人口当たり）、転入・転出比率、新設住宅着工戸数、**富裕度**：財政力指数、地方税収入額（人口当たり）、課税対象所得額（納税者一人当たり）、**住居水準充実度**：住宅延べ面積（世帯当たり）、持ち家世帯比率である。

ここからは大まかにみると、北広島・千歳・苫小牧といった札幌から続く千歳線沿線のアウトレットモ

住みよさランキング2012年(北海道)

		総合評価		安心度	利便度	快適度	富裕度	住居水準 充実度
1位	北広島	172	723	24	92	398	408	
2位	苫小牧	215	349	181	16	275	707	
3位	名寄	245	185	72	76	617	627	
4位	帯広	267	530	20	34	435	704	
5位	千歳	278	442	193	14	292	708	

注)『都市データパック』東洋経済などより作成

ルなども存在する都市と、それとは異なって札幌から距離のある十勝の中心帯広と上川北部の中心「都市」名寄となる。しかしどうしても名寄はこんなに高いランキングになるのだろうか。一体何が押し上げているのだろうか。

たしかに、名寄の安心度は1位、利便度は3位、快適度は3位であり、この3指標が順

位を押し上げていることは間違いない。ではなぜそんなに押し上げるのか。もう一度指標の説明を丁寧に読んでいくと、なるほどと思う。つまり、地方センター病院である名寄市立総合病院などが周辺の広範囲の市町村からも患者を集めている、同じように大型店舗が周辺から顧客を集めている、しかし、「人口当たり病床数」「人口当たり店舗面積」となると分母の数字は名寄市だけの人口数となる。また、人口は少なくとも公園面積は大きい特徴をもつのが北海道であり（この指標では北海道が全国1位）、名寄もその典型である。かくして、人口の少なさが逆にいろいろな指標を押し上げているとも言えるのである。もちろんそれだけではない。良くも悪くも名寄市自体が転勤族のまちであり、転入・転出比率が比較的高く、かつ大学や自衛隊駐屯地などからの需要によって、持ち家だけでなく借家も含んだ新設住宅着工戸数がけっこう多い、などの影響もある。

ただしかし、それらがまた、今度は視点を変えると、住宅水準充実度を押し下げ（借家比率が高い）てもいる。また、名寄市の財政力指数が0.3付近にあることに端的に示されているように、富裕度は表中の5つの市の中でも最下位であり、全国的にも相当低いところにランクされている。だから、「大都市中心の総合指標」からは高いランクに位置づけられても、ランキングの低い指標に視点をおいてみると、脆弱な構造も示唆され、バランスの悪さも浮き上がってくる。

しかも、このような大都市中心の視点からの「住み良さ」指標には、たとえば利便度でも県庁所在地との交通の便は問われていない、快適度でも自然環境の厳しさは問われていない、生きて行く上でもっとも大事な雇用状況も問われていないなど、おそらく実感との大きなギャップを生み出す要素にはまったく触れられていない。さらに、「住んでみたい・訪れてみたい」という感覚をも含んだまちなみや景観はまったく考慮されていない。

19 依存・消費型都市の名寄

名寄市はさまざまなサービス提供を主とする産業から構成される消費型のまちである。このことは、いわゆる産業別就業人口の構成などから見るととてもよく分かる。そして自衛隊駐屯地に支えられているまちでもある。その意味で名寄市は、典型的な北海道モデルとも呼ぶべき市町村の一つでもある。そのことをあらためて確認するのが今回の内容である。なぜなら「まちづくり」の課題は、そのことを意識してなされるべきだからだ。

ここで、名寄という地域社会の構造を特徴づけておくために、前半戦でも取り上げた人口3万人前後の小規模自治体で公立大学を有している山梨県都留市、大月市、岡山県新見市との比較を「産業別就業人口」という面から見ておこう。ここからすると、実にその特徴は明白である。

産業別従業者数(2009年)

	全産業	農林漁業	鉱・採石 砂利 採取業	建設業	製造業	電気 ガス 水道業等	情報 通信業	運輸 郵便業	卸売 小売業	金融 保険業	不動産業 物品賃貸業
都留市	15,989	70	9	1,245	4,370	21	54	653	2,635	249	349
大月市	10,451	85		993	2,517	322	32	516	1,529	178	206
新見市	14,005	265	63	1,447	2,298	26	63	970	2,572	173	132
名寄市	14,557	315	26	1,040	538	121	68	813	3,011	302	294

	学術研究 専門技術 サービス	宿泊飲食 サービス	生活関連 サービス 娯楽業	教育学習 支援業	医療 福祉	複合 サービス 業	その他 サービス	公務
都留市	310	1,468	1,037	830	1,331	142	755	461
大月市	206	616	444	709	964	111	586	437
新見市	232	830	494	973	1,655	522	639	651
名寄市	232	1,134	678	731	1,924	182	906	2,262

総務省統計局「平成21年経済センサス基礎調査」より作成

まず目につくのは、北海道の特徴とも言えるが、製造業従業者の極端な少なさがある。対比するところがいずれも本州なので余計際立っているかもしれないが、たしかに大きなものは製紙関連企業だけだ。主力産業として目立つのは、卸売・小売業、金融保険業、不動産業・物品賃貸業及び医療福祉、そしてその他サービス、公務である。とくに4つの自治体間の比較で目立つのは「公務」の大きさだ。これは官公庁の出先機関などの職員などの影響があるにしても、まさに駐屯地の影響である。なぜなら自衛官はここでは「公務員」としてカウントされているからだ。残念ながら、大学生は就業者としてはカウントされないの、大学の存在は隠れて見えない。だから端的に名寄は、「自衛隊と病院のまち」として特徴づけられることも間違っていない。

ところで、ここで駐屯地について少し触れておくと、さしあたってWikipedia情報に頼れば、道内には自衛隊北部方面隊として28の駐屯地が置かれている。これは東北方面隊の13に比較しても相当の数である。ではそれぞれの駐屯地にはどれくらいの自衛官が配置されているのか。公表されていないのでわからないが、先にも触れたように、自衛官は経済センサス統計では「公務員」としてカウントされていることを前提にみると、下の表が作成できる。駐屯地の有無が、公務員比率のきわめて大きな差異を自治体間に生み出していることがわかる。

陸上自衛隊第2師団 (旭川隊区・名寄隊区・遠軽隊区・留萌隊区・上富良野隊区) 関係市町村の公務員割合

	全産業 従業員数	うち 公務員	割合(%)
旭川	162,820	7,732	4.7
名寄	14,577	2,262	15.5
上富良野	5,740	2,046	35.6
留萌	12,658	1,497	11.8
遠軽	9,623	1,281	13.3
美幌	7,905	1,082	13.7
(紋別)	12,127	470	3.9
(士別)	8,925	356	4.0
北海道	2,535,263	119,070	4.7

平成21年経済センサス基礎調査より作成

名寄はおよそ1,600人位の隊員とどこかで聞いた気がするが、ちなみに自衛官一人あたりの給与をネット情報から推測して30歳前後500万円として試算してみると総額は80億円となる。このお金がすべて地元へ落ちるわけではないだろうが、相当な部分は消費されると仮定すると、関係者の駐屯地死守の陳情も当然のこととなる。

『名寄市史』によれば、商工会議所などを筆頭に誘致運動が実り、1953(昭和28)年約3,000人の自衛官の移駐が行われ、家族も含めると4,000人以上の人口が増えたとある。「自衛隊(保安隊)のまち」の誕生である。このことが名寄のまちに与えた影響は大きかっただろうし、今も大きい。しかし、調べてみてびっくりだが、「地域と駐屯地」の関連は「地域と大学」以上に興味はそそられるものの、

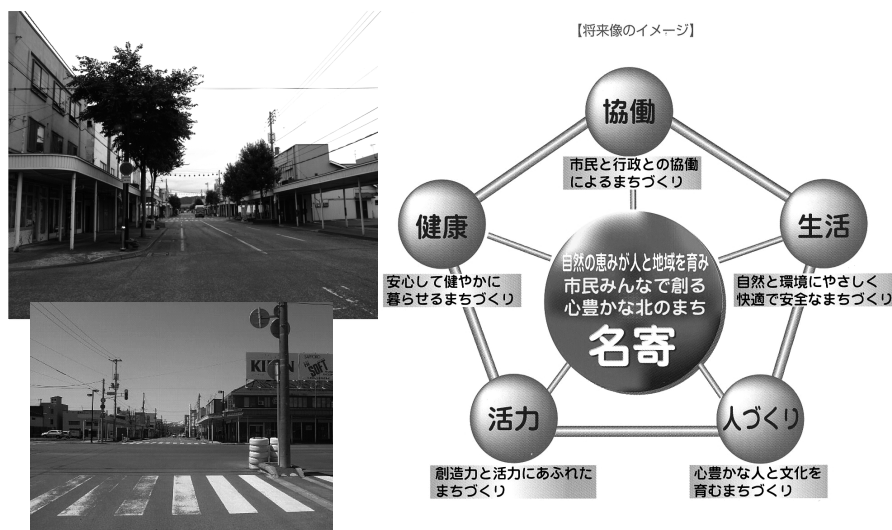
不思議なことに、国会図書館あたりの雑誌記事検索をかけても、関連する論文や調査研究の類いのものを見つけれない。もしかしたらフィールドワーク研究の盲点かもしれない。

20 持続的・空間的視点の欠落した「計画」

上川北部あるいは名寄の過疎化それ自体は何か特別なことでもなく、多くの市町村が辿っている現実でもある。しかし、名寄は物資の集散地であり、交通の要衝であり、自衛隊の駐屯地があり、周囲への依存経済によって成り立っていることはみてきたところだ。その意味で言うと、今はやりの「持続可能性」という視点からすれば、とくに見通しが立てにくいのが名寄かもしれない。自らの足で立つ経済基盤あるいは生産基盤に支えられ発展してきたまちとは言い難いからである。その深刻な表れが二つのアーケードをもった名寄の中心部の商店街の不振によるシャッター街化であり、住宅地の虫食い状態と目に見える住宅格差だ。

こんな写真を載せるのもどうかとも思うが、そんな必然的帰結が「名寄市・画像」という言葉で検索した時に表れてきたスナップ写真である。いささかきついが、サンピラーやひまわりは絵になっても、まちの中心地の景観が絵にならないのが今の名寄である。

「名寄市・画像」で検索した市街地景観と
名寄市総合計画の「将来イメージ」



また、名寄市による将来計画などを見ても、はたしてどこまで名寄市の構造的な課題を把握し、かつそのうえで市民が、関係者が今後「こうしたい」「こういう方向に向かうべきだ」といったことがイメージできるような構想になっているか、という疑問があるからである。

右側の図は、市の「総合計画」の「将来のイメージ」として掲載されているものだ。それぞれ「協働」「生活」「人づくり」「活力」「健康」の5つの輪がリンクし、その真ん中に「自然の恵みが人と地域を育み、市民みんなで創る、心豊かな北のまち、名寄」となっている。たしかに、一つひとつの理念は正しい。しかし、どの方向に向かえばこれが実現できるかは、「前期計画」にも「後期計画」にも、どこにも書かれていない。

もちろん、商店街の再生や振興はつね日頃だれもが頭を悩まし、商工会議所、ロータリークラブなどの「財界」やライオンズクラブ、青年会議所、そして商店経営者が喧々諤々やってきたとは推測する。だからこれ以上、何かを言っても屋上屋を架すようで意味のないことかもしれない。

しかし、それでも言いたいのは、こちらに赴任してきてずっと探しているのだが、建物や施設や公園などがさし示された、市内の諸施設の空間配置図でさえ、まともなものがないことだ。その点で考えるのは、ピヤシリスキー場から風に乗って市街地を鳥瞰し、一度文字通り「上から目線」で現実の施設配置と連関に焦点を当てて、それぞれの関係性を目に見える形で表現したらどうということになるのだろうか、といったことである。

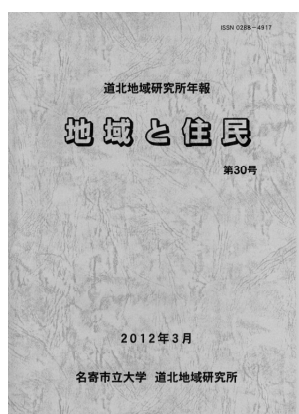
とにかく、さまざまな「計画」を見ても、せいぜいゾーンニング位が示されているだけで、これから20年先、30年先、50年先、どんな風景のまちづくりを目指すのか。まったくイメージが湧いてこないのである。「持続可能性」という視点からすれば、うまくいくかどうかは別として、お隣の下川町の取り組んでいる、地域の持続可能性を担保する「循環型森林経営」なるコンセプトによる「環境未来都市」を目指すといった方向性の提示に比べると、そのような発想は弱く、かつ空間戦略が欠落しているのが名寄だ。

21 道北地研の貢献と課題とのギャップ

さていよいよ、わが身を振り返って反省もしていかなければ不公平だ。その初っ端はやはり道北地域研究所の

役割をどう見るか、であろう。もっとも1回限りの新聞記事なのできちんとした考察はできない。そこは学内の関係教員に任せよう。苦勞されてきた先輩たちの目も気になるが、ここでは1点だけ言及しよう。それは端的に言って、道北地研は多くの研究業績を市民とともに残してきたものの、先に見てきた名寄の構造的な特質（課題）に真正面からは立ち向かってこなかったことだ。広い“道北”が対象の地研だからそれでいいとも思える。しかし、名寄の“まち”になぜもっとアプローチしなかったのか、と思う。問題意識の違いがそこにはあるかもしれない。

それはともかく、本学の道北地域研究所は1982年、当時の美土路達雄学長の主導で設立された。そのねらいは、①短期大学教職員の個人研究推進と共同研究の構築、②地域振興と研究推進の接点の場としての研究所、③他の研究機関や自治体専門職員との連携と共同による課題解決だったと書いていい。30年あまりの歴史の中で、個々の研究も進み、同時に②と③も進んだ。短大として研究者も少ない中で、よく奮闘してきたものだと思える。



平成23年度事業の一端

所内課題研究プロジェクト：(略)

地域シンポジウム開催：

テーマ「地域資源の掘り起こしと産業化」

- ・基調講演「薬用植物の寒冷地栽培の確立」
- ・パネラー報告『『北のはと』の栽培と利活用』『新しいブランドづくり』『高オレイン酸ひまわりの栽培と産業化』

市民公開講座

テーマ「安全安心なまちづくり」

『『までい』なまちづくりの力—福島県飯館村—』『森に生きて』『持続可能なまちづくりをめざして』

掲載した『地域と住民』（写真）の発行は30号までを数え、直接的には本学の発行雑誌ではないが、関連する教員が多くかかわっている『北海道北部の地域振興』（道北の地域振興を考える研究会）という報告書も12号まで発行されている。それらを読み返してみると、興味深い論考もある。また、『地域と住民』はかつて市民参加の雑誌の性格も有していたこともわかる。

さらに、右側に掲載したのは、昨年度の研究所の事業の一部である。毎年さまざまな事業を展開しているが、ここからも、その具体的成果の評価はともかく、研究所が文字通り地域貢献の使命を果たしてきていることがわかるだろう。

ところで、『地域と住民』を読み飛ばしてみても思ったのは、いままたぜひ「振り返り」のシンポジウムを開催してもいいのでは、と考えたことだ。具体的には、本雑誌に掲載されている1982年第2回シンポジウム「上川北部における地域振興の課題」（周辺市町村のリーダーたちの発言）、1987年第11回シンポジウム「道北の自然と暮らし—北の街並みづくり」、2001年第26回シンポジウム「首長が語る21世紀の地域、わが町の展望」（美深、下川、風連、名寄）の内容は、その後の変化を議論する前提材料にふさわしいものを持っている。いずれも名寄市の元市長も含めて、各自治体の首長などが本音で語っていることもあり、おもしろい。

また名寄に関連して言えば、かつての短大第9代学長七戸長生氏の『『人びとの定住』をめぐって』という講演も興味深い。これは学長職を去る直前の講演であり、名寄新聞発行の『なよろ百話』を題材に、名寄の先人たちの試行錯誤と長期的戦略の欠落ということに触れたものだ。これらが名寄の人びとの特徴なのか、北海道の人びとの特徴なのかといった論点に結論は出されていないが、「長期的戦略の欠落」という指摘には、なるほどと思った。さらに、これも初代名寄市立大学学長久保田宏氏の「北・北海道の地域医療—むかし・いま・これから—」（ただしこれは『北海道北部の地域振興Ⅷ』2006年に掲載されたもの）も病院再生物語としても、地域と病院を考える上でもおもしろい。

つまるところ、繰り返しになるが、人口推計の分析や農業の分析などに成果は見せても、名寄という“まち”に直接切り込むような調査研究はなかった。それがなぜかはここでは問わないが、大学だけでなく、関係者の総力を挙げて取り組むべき課題が、ここには横たわっている。

22 地域と研究・教育・事業推進の刺激策

長い大学生活でもっとも厳しくなったと感じるのは、大学教育の「実質化」あるいは「質的保障」という名目によるさまざま点検と評価の要請、そして研究したければ「競争的資金」に応募し、外から資金を獲得せよ、といった方針の強まりだ。

そのこともあり、どの大学でもやっていることだが、本学でも先生がたの授業はつねに学生によるアンケートによって評価される。また研究では、文部科学省の科学研究費獲得のための「呼び水」として大学独自の研究資金援助もしている。これら教育や研究面における活性化の独自手段として「学長裁量経費」（特別支援枠としての教育研究事業経費）というものがある。24年度に採択した課題はこんなものだった。

研究促進では「胸厚圧迫のみとAEDを活用した市民対象心肺蘇生法普及事業の効果に関する調査研究」「看護師の離職予防とメンタルヘルスに関する研究」「不登校経験生徒をひきこもりへと移行阻止するための基礎研究」「上川北部地域住民のメンタルヘルスに関する研究」「道北地域における貧困層の特質変化に関する研究」「視覚障害者への受診・受療・転入院に伴う支援行動に関する研究」「子どもの権利条約と教育実践の研究」「地方中核病院に勤務する看護師の職業ストレスとSOC、職場メンタルヘルス」など。

教育及び事業では「大学教育看護学生のキャリア形成支援に関する研究」「慢性期の患者理解に向けた看護課程演習と臨地実習」「保健医療福祉連携教育の推進に関する事業」「平和・人権・歴史を考える若者たちの国際シンポジウム」「国際交流センター開催による国際講演会」「道北地域研究所を中心とした30年にわたる地域活動の集約並びに地域連携の新たな模索」など。

このように、総額500万円の学長裁量経費は、地域における諸課題に積極的に取り組む研究、文部省科学研究費獲得の呼び水、授業改善あるいは大学改革にかかわる事業など、大学の教育・研究などの活性化事業として、それぞれの教員グループなどに配分される。本学の研究上の地域貢献は、先の道北地域研究所などによるものに加えて、ここからも行われていることがわかる。

平成24年度文部科学省科研費採択(新規+継続)状況

	採択件数		A/B		採択件数		A/B
	A	専任教員数 B			A	専任教員数 B	
北海道大学	1,765	1,608	109.8	旭川大学	4	57	7.0
北海道教育大学	97	374	25.9	札幌大学	10	117	8.5
室蘭工業大学	66	182	36.3	札幌学院大学	14	133	10.5
小樽商科大学	33	103	32.0	藤女子大学	8	83	9.6
帯広畜産大学	46	105	43.8	北星学園大学	14	126	11.1
北見工業大学	54	145	37.2	北海学園大学	17	241	7.1
旭川医科大学	110	341	32.3	北海道工業大学	15	133	11.3
				酪農学園大学	28	167	16.8
札幌医科大学	188	381	49.3	北海道医療大学	86	337	26.3
釧路公立大学	7	37	18.9	北海道薬科大学	4	65	6.2
はこだて未来大学	33	69	47.8	北海商科大学	4	37	10.2
名寄市立大学	10	61	16.4	北海道情報大学	8	79	10.1
札幌市立大学	25	76	32.9	札幌国際大学	9	75	12.0
				北翔大学	7	87	8.0
青森公立大学	5	43	11.6	千歳科学技術大学	5	35	14.3
青森県立保健大学	28	97	28.9	苫小牧駒澤大学	3	25	12.0
岩手県立大学	42	208	20.2	日赤北海道看護大	6	41	14.6
				北海道文教大学	1	121	0.8
都留文科大学	8	84	9.5	天使大学	10	72	13.9
新見公立大学	2	27	7.4	稚内北星学園大学	3	22	13.6
				札幌大谷大学	1	49	2.0

本学の申請数・採択数の動向

	平成22年度	平成23年度	平成24年度
申請数	10	15	20
採択数	0	3	7
継続数	6	5	3
合計数	6	8	10

注)左表の専任教員数は読売新聞「大学の實力」(2012年)の数字をそのまま使用した。なお専任教員以外でも申請できること、あるいは1人で2つの科研費にも代表者として応募できる。文部科学省調べ。

それらが結果的に、文部科学省の科研費獲得にも結びついていけば御（おん）の字だ。大学の評価にも結びつくからである。ここでは二つの表を掲載しているが、小さい方がこの3年間の本学の科研費獲得状況である。大きな伸びではないが、よく奮闘していることがわかる。

なお、左の大きい表は道内の各大学の文部科学省科研費採択状況を見たものだ。おもしろいが、これを読者が見る場合に、細かいことは別にしても、科研費そのものは量的に圧倒的に理系に偏って（重点を置いて、あるいは教員の数も圧倒的に多いこともあり）いる、したがって理系中心の大学の採択率は高くなる傾向が必然的でもある、道内私立大学の多くは文系で「教育」に重点を置いている、研究中心を標榜する大学は専任教員以外の教員で科研費獲得することも多い、といった諸事情を念頭に置いてみていただくことをお願いしたい。なぜなら、単純にこれを見ると、あまりに不公平に解釈されるおそれがあるからだ。採択率の低い私学などでも、優秀な研究者はいっぱいいるし、高い大学でもいろいろいるのが現実だ。

それにしても、理系の国立大学を除けば、本学を含めた大学は「ドングリの背比べ」と言ったところだろうか。本学が本気になって「地域からケアの未来をひらく」とすれば、さらにもう一步も二歩も抜け出したいものである。それは、研究面での評価アップの課題もあるが、教員が研究面でも頑張ることは、長い目で見ると、卒業生が職場で柔軟な創造力や勇気をもった専門職に成長する大事な要素でもありと考えられるからである。

もちろん国家試験の結果は大事だが、同時に、大学は予備校ではないというプライドを下敷きに、真の実力を植え付けることはそれ以上に大事だ。だれもが職場に入れば、組織の中で個人が問われる場面につながるからである。教育はそこまで視野に入れたいものだ。

23 教育課程における“地域の比重”

専門職養成を中心とする本学は、おそらく他の文化系中心の学部などに比較して相当忙しい学生生活を送ることになる。そのひとつの理由は、それぞれの専門職が自らの社会的地位をあげたい、そのためには実習を中心にできるだけ充実した科目体系を課したいとし、結果的に卒業単位数が多くなる傾向がある。また、教育の中身は文部科学省というより、厚生労働省の管轄の中で決まっていくこともあるかもしれない。



看護学科学内実習（臨地実習準備）



社会福祉学科実習報告会

ちなみに、本学では、保健福祉学部栄養学科、看護学科、社会福祉学科ともに卒業要件として取得しなければならない最低単位数は128単位。しかし、それぞれの卒業時の平均取得単位数（「教職に関する科目」などは除いて）は、栄養学科141.3単位、看護学科134.8単位、社会福祉145.9単位（いずれも平成23年度の場合）であった。これにもしも教員を目指す場合（本学では中学校教諭・社会、高校教諭・公民・福祉、特別支援学校教諭および栄養教諭などの免許状が取得可能）、さらに「教職に関する科目」の単位数（中学校で31単位、高校で23単位）の取得が必要になるので、多い学生は180単位近くとなり、加えて特別支援教諭免許の取得となると200単位近くになる。遊ぶ暇はあまりない。なおこの場合、取得単位数が少ないからと言って忙

しくないということではない。とくに看護あたりは、4年生まで長期の実習がかぶってくるので大変だ。

また短大の場合でも、たしかに卒業要件としては短大らしく72単位で少なく見える。しかし実際には、保育士と幼稚園教諭二種の免許状を出すことから、卒業時には平均107.1単位を取得している。まさに詰め込み教育である。そこでは、4年制教育とは異なって、いわゆる卒業論文なども課されていないので（集団の卒業公演などはあっても）、個人として独創力、総合力、分析力、考察力、そして文章力などが試される機会は用意されない。大学生生活の醍醐味をあまり味わうことのできないままに、ともかく資格要件を満たして職場に出ることになる。

ここで、本学の教育課程における地域関連科目、とくに“学外”での実習教育を中心にカリキュラムから抜き出して整理したものを紹介しておこう。学科によって相当の差がわかるはずである。

本学教育課程における「地域関連科目及び学外実習授業科目」

教養科目・連携教育科目・教職科目等	栄養学科専門科目	看護学科専門科目	社会福祉学科専門科目	短大児童学科専門科目
教養科目「地域の理解」 ・地域社会論 ・北海道の生活空間 ・北海道の野外レクリエーション ・北海道の農と食 教養科目「スポーツ」 ・スポーツ実技Ⅱ 連携教育科目 ・フィールドグループワーク ・保健医療福祉連携論 教職科目 ・教育実習Ⅰ ・教育実習Ⅱ	臨地実習 ・給食管理論実習Ⅱ ・給食管理論実習Ⅲ ・臨床栄養学臨地実習Ⅰ ・臨床栄養学臨地実習Ⅱ ・公衆栄養学臨地実習 卒業研究	臨地実習 ・基礎看護学実習Ⅰ ・基礎看護学実習Ⅱ ・成人看護学実習Ⅰ（急性期） ・成人看護学実習Ⅱ（慢性期） ・老年看護学実習 ・小児看護学実習 ・母性看護学実習 ・精神看護学実習 統合科目 ・住宅看護実習 ・統合実習 保健師課程科目 ・継続訪問実習 ・公衆衛生看護学実習 卒業研究 ・その他 ・地区活動論Ⅰ ・地区活動論Ⅱ	社会福祉士指定科目 ・ソーシャルワーク現場実習Ⅰ ・ソーシャルワーク現場実習Ⅱ 学科専門科目 ・介護現場実習 教職関係科目（特別支援教諭） ・障害児教育実習 卒業研究 ・その他 ・地域福祉論 ・地域活動論 ・地域保健論	専門教育科目 ・教育実習（幼稚園） ・保育実習Ⅰ ・保育実習Ⅱ ・保育実習Ⅲ（児童福祉施設） 体育科目 ・体育実技Ⅱ ・その他 ・地域ケア論

注) 地域理解を目指している科目、学外での実習を主とする科目など。「その他」は“地域”などと冠がある科目。他にも取り上げる科目があるが掲載していない。

まず入学するといわゆる教養教育が中心となって学びの体制に入っていく。ここではとくに「地域の理解」として4科目が設定されている。またこれ以外に、各学科共通する連携教育科目（やがて複数の領域の専門職が連携して患者や施設利用者などの課題解決を図る必要が出てくるが、そのための準備教育）が2年、3年目に配置されている。

学科別では、とくに臨地実習でみると看護学科では1年、2年、3年、4年と積み上げ方式で基礎看護からそれぞれの専門領域看護までが配置され、これらが名寄市立総合病院など地域の病院で行われる。栄養では3年と4年目で臨地実習が行われ、社会福祉学科では3年目に現場実習が各地の施設で行われる。また児童学科では2年間間に各地の保育園や幼稚園で実習が行われる。ここらの量と質の差異がいわゆる業務独占（特定の業務に関して、特定の資格を取得している者のみが従事可能で、資格がなければ、その業務を行うことが禁止されている資格）と名称独占（資格取得者以外の者にその資格の呼称の利用が禁止されている資格。業務独占性がない）の違いに結びついている一つの要因だろう。いずれにしても、専門職養成教育における地域の諸機関・諸施設の役割はきわめて大きい。

24 学生たちの地域交流活動の意義

われわれ教員もそうだが、学生たちの世界も当たり前のごとく狭い。だから、学生たちの多くがやがて対人援助専門職に就いていくことを見通せば、つまるところ“人間理解の幅と深さ”をどれだけ興味深くわが

ものとさせることができるかどうか、教育上の大きな課題となる。その点で“実体験”に勝るものはない。自分とは対極にある生活を送ってきたような人びとにともかく出会うことが大事だ。

それは地域の“理解”に関しても同じである。地域は実にだれにでも見えているように見えていない存在である。いずれどこかで機会があれば詳しくお話することもあろうが、個人的な体験からもそのことはよくわかる。われわれは自分の視角あるいは問題意識からしか地域を見ていないのであり、「見えない」「見ない」部分も多いからだ。



前回触れた本学における教養教育や連携教育といった科目は、そのことを意識した科目である。たとえば教養教育の「地域の理解」という領域では、「地域社会論」「北海道の生活空間」「北海道の野外レクリエーション」「北海道の農と食」といった科目が設定され、「北海道の農と食」では3回にわたって農作業体験実習などのユニークな授業も組み込まれている。上の写真左は、その時（2012年7月）の緊張する農家との対面式のもので、82名の参加があったそうだ。

また、連携教育科目の「フィールドグループワーク」では、農村の一人暮らし高齢者や障害者施設などを訪問しながら学んでいる。写真右は、障害を持つ人びとが「大学生生活を体験する」という趣旨から学内で「調理実習」を行っているところである。この科目は、主に地域や施設など（フィールド）を舞台に、学科混成チームでグループワークを試みる授業でもある。

なお個人的見解で言えば、多くの先人によって構成されている「人間の宝庫」としての地域社会、その教育的利用は、本学の教育課程にももっと積極的に取り入れるべきだと思う。その点でいま「地域生活人間論」なる講義が構想され、新入生を対象に各種専門職の先輩や施設の利用者などから「連携」の意味を学ぶという意図は期待される。さらに地元の高齢者大学との交流などもあっていい。

また教育課程に基づきいわゆる授業ではないが、学生たちの地域貢献ではやはりボランティア活動に触れておく必要がある。その中心となっているのが本学の「地域交流センター」である。その目的は「大学と地域を結ぶ相談、調整、企画、支援機関となり、地域および市民の交流、連携に関する業務を行うため、本学が持つ機能を有効かつ積極的に発揮することを目的とする」となっている。その中心的な内容は、事実上、学生のボランティア派遣である。

ちなみにセンターには、2011年度では、122名の学生がボランティア登録しており、ボランティア専門サークルの活動を除いても、昨年では34件の依頼に延べ287名の参加があった。なおここでボランティア専門サークルとはSOサークル（スペシャルオリンピックスのSO）のことで、障害を持つ人びとのスポーツ参加を促進するサークルであり、市民とともに運営されている。現在47名の学生が登録している。

また請われて参加するだけでなく、当然のことだが、教育課程に基づいて学んだものを積極的にボランティアとして実践していくこともある。たとえば本学児童学科の教員が指導する名寄市の「商店街遊びの広場」の企画の中で活動している人形劇サークルのボランティアなどはそれに該当する。ただ、これらのボランティア活動に対する地域からの要請は多いが、実際は授業期間中や試験期間中にぶつかれば対応することも難

しく、あくまで“ボランティア”であることをよく認識しておくことも、大学としては関係団体に求めたい点もなくはない。

いずれにしても、これらの大学生の地域交流活動や関連教育は、本学に伝統的に息づく互いの挨拶からはじまって、これまでの狭い世界からの脱皮を促し、自分とは異なったさまざまな他者と接触し、そこで共感という感情をまじえて、人間の差異と平等（共通性）のような理解を内面化させていく、いわば「とっかかり」のような面も持つのだろう。

25 教育・研究の連携基盤の存在

前々回に触れた「学外実習授業科目」は、大学だけでなく、学生を受け入れる実習先の病院や社会福祉施設あるいは保育園・幼稚園・学校にとっても、もっとも気を遣うところだ。本学が「お世話になる」立場であるのだが、受け入れ側もまた評価にもさらされる面もあるからだ。ともかく、専門職として最低限の実践教育がここで施されるのだから、その実習先の確保は大学にとって生命線である。その場合、やはり大学側からしても、最先端の技術を持ち、社会的評価の高いところで学ばせたいのが本音だし、受け入れ側からすればまじめで優秀な学生を受け入れたいのは当然だろう。下に掲載した表は本学の実習先を概観した資料である。

ところで、このような大学と実習先との関係性の形成は、学生の就職先にもつながることでもあるが、大学の研究の前進にも、受け入れ側の技術進歩にもつながる基盤となる可能性は十分あるだろう。とくに「地域からケアの未来をひらく」をスローガンとして掲げ、その実質化を図るには、両者の協力なしにはその成果はあり得ないとも言える。研究面で言えば、実際、名寄市立総合病院長からは「データはいっぱいあるので利用してほしい」としばしば言われ、現実にそういう連携のもとに研究を進めている教員もいる。このあたり、教員側からは「実習指導で忙しいので研究ができない」という声もあるが、「転んでもただで起きない」タフな姿勢もほしい。また施設側からも、このような関係性を通じて、どれだけ期待に応えられるかは正直未知数だが、本学の教員の持つ知識や技術あるいは研究成果などを大いに利用してもらいたいと思う。

●各学科実習実施状況

	学科	学年	実習区分	期間	実習先
四大	栄養学科	3	給食経営管理Ⅱ	1週	名寄市学校給食センターほか11施設
			給食経営管理Ⅲ	1週	清峰園ほか11施設
		4	臨床栄養Ⅰ	2週	名寄市立総合病院ほか11施設
			臨床栄養Ⅱ	2週	北大病院ほか1施設
	看護学科	1	基礎看護Ⅰ	1週	名寄市立総合病院、名寄三愛病院
			基礎看護Ⅱ	2週	土別市立病院、吉田病院、名寄東病院
			老年看護	4週	名寄三愛病院、土別市立病院 清峰園、しらかばハイツ そよかぜ館 他8施設
		4	成人看護Ⅰ	4週	名寄市立総合病院・土別市立病院
			成人看護Ⅱ	4週	名寄三愛病院・吉田病院
			小児看護	2週	名寄市立総合病院
			母性看護	2週	名寄市立総合病院
			精神看護	2週	旭川圭泉会病院
			地域看護	3週	名寄保健所、稚内保健所 名寄市、土別市ほか9市町村 名寄訪問看護ステーションほか6施設
			ソーシャルワーク 現場実習Ⅰ	2日	北海道療育園、北海道家庭学校 旭川育児院、あけぼの園 名寄丘の学園
社会福祉学科	3	ソーシャルワーク 現場実習Ⅱ	4週	名寄市ほか36施設	
		保育実習Ⅰ	1週	市内保育所	
短大	児童学科	1	教育実習	1週	市内幼稚園
			保育実習	2週	市保育所ほか52施設
		2	施設実習	2週	丘の学園ほか31施設
			幼稚園実習	2週	市内幼稚園ほか49施設



名寄市立総合病院



「定住自立圏形成」調印式

研究の基盤とえば、こういう市町村間の連携も利用すべきだ。写真にもあるように、平成23年9月には名寄市、士別市が中心となり、和寒町、剣淵町、下川町、美深町、音威子府村、中川町、幌加内町、西興部村、枝幸町、浜頓別町、中頓別町の13市町村の間で「定住自立圏形成協定」が結ばれ、その構想として『北・北海道中央圏域 定住自立圏共生ビジョン』（平成24年）も出されている。そこでは、たとえば将来の圏域像として「医療や福祉などの暮らしに欠かすことのできない生活機能を確保し、高齢者はもとより子育て世代の若者など、すべての地域住民が安らぎと癒しを享受し、住み慣れた地域で安心して豊かに暮らし続けることができる圏域を目指す」とあり、さらに「圏域に必要な人材育成を図るため、名寄市立大学と連携して、保健・医療・福祉の人材を育成確保するとともに、圏域住民に対する学習機会や学習情報の提供、地域福祉の向上や地域振興の取り組みを推進する」とある。これらを利用しない手はない。

もちろんこれ以外にも、事実上個々人の関係機関からの委員委嘱や講演などによるギブ・アンド・テイクの関係を通じて、各教員の研究は進められてもいる。だが果たして、それらが本学の「研究力」としてまとめられ、社会的にもその力量が評価されているかと言えば、文部科学省の科研費獲得の現状からしても、また論文や著書の出版という面からしても弱いと言わざるを得ない。言ってみれば、それなりに個人としては光る存在があっても、まだ組織として「きらりと光る」までには至っていないということである。しかし、あらためてこのように大学と地域との関係性を見直すと、「地域からケアの未来をひらく」実践基盤は用意され、いまやわれわれの働きかけを待っている状態なのかもしれない。

26 大学と地域資源の効率利用—定住圏ビジョンから—

あちこちさまざまな形で貢献し、活躍している教員たち。さらに教員たちの学外講演回数をみると（すべて把握されているとは言い難いが）、平成20年度169件、21年度155件、22年度138件、23年度83件となっている。徐々に減ってきているのは、保健福祉学部の4大化にかかわって限定つきで採用されていた知名度のある教員が、いわゆる完成年度（開設から4年間）を終えて退職されたことなどの影響が大きいのかもしい。

こういう動きはたいてい単発的であるが、もちろん組織化されて展開されている事業もある。このことは大学がまた“社会事業体”でもある側面を直截に表している。たとえば平成23年度の場合、すでに紹介した道北地研の地域貢献事業以外にも、本学では特別支援教諭免許状取得のための短期講座（69名参加）、看護セミナー市民公開講座（80名参加）、子どもセミナー（約100名参加）、平和・人権・歴史を考える若者たちの国際シンポジウム（約150名参加）などを開催し、好評を博している。

本学の事業展開にふさわしいサテライト（大学などが遠隔地あるいは都心から離れている場合に都心にもつサービス施設）はまだないが、これは今後の検討課題だ。これまでには名寄の中心部の商店街の一角に設けるという構想もあったようだが、広域の共生定住圏構想からすれば、協定を結んだ市町村や同じ名寄でも旧風連などに置かれる方がふさわしいだろう。

しかしそこまで行かなくても、これまでのように地域や機関などから要請されたら個別に應えるというスタイルから、もう少し計画的な講師派遣による活発な地域貢献は可能だろう。ただ、このあたりは、自治体側の希望する内容もあり、それに専門職養成に特化しているような本学がどこまで期待に応えられるかはある。それでも、今後文字通り道北地域に根付いた大学を目指すならば、とくに生涯学習とのリンクはもっと考えてもいい。先のサテライトとは別に、大学に隣接し、あるいは大学内に高齢者大学や子ども図書館などがあってもおもしろい。本学の新たな特徴にもなるかもしれない。

ところで、こういう発想は、効率的な資源利用は大学と地域双方からアプローチすべきだということを示している。そう考えると、本学もまた、十分に名寄市等の施設や北・北海道圏域の諸資源を使って教育や研

究を展開しているかと言えば、前回にも触れたが、「もったいない」という感覚をも覚える。たとえば、近くに素晴らしいスキー場があっても、大学側にスキーサークルさえない。本学の性格や規模あるいは学生の経済的・時間的余裕あるいは近年の人気の低迷を考慮しても、少なさみしい。

また、これは学内でも議論したことはないが、後に触れる北海道の子どもの体力が全国的に見てかなり低いような現状に照らしても、また地域のお金をかけた諸施設を活かすにしても、“児童の四大化”の実現にかかわっては、こんな夢想もないわけではない。すなわち、コーチもできる優秀な大学教員の確保ができるかどうかがあるが、数人規模の冬季スポーツ専攻などの設置も検討の余地もなくはないということだ。一方でジャンプ台があり、立派なカーリング施設があり、宿泊施設もあるなかで、他方で近隣の小さな町村から有名選手がでていることを考えると、素人考えながらも少し何とかならないのかと考えたりすることもあるからである。

観光入込客数（平成22年度）

（単位：人）

市町村名	入込総数	入込内訳			
		内道外客	内道内客	内日帰客	内宿泊客
名寄市	587,100	76,200	510,900	567,300	19,800
士別市	365,300	58,700	306,600	304,400	60,900
和寒町	55,000	1,300	53,700	51,100	3,900
剣淵町	533,100	1,400	531,700	524,300	8,800
下川町	54,000	4,700	49,300	48,900	5,100
美深町	457,500	95,200	362,300	438,800	18,700
音威子府村	73,200	11,400	61,800	64,100	9,100
中川町	93,500	4,200	89,300	84,300	9,200
幌加内町	188,900	16,500	172,400	181,800	7,100
西興部村	41,300	3,100	38,200	32,900	8,400
枝幸町	242,700	51,900	190,800	204,500	38,200
浜頓別町	138,100	80,400	57,700	126,500	11,600
中頓別町	57,300	5,500	51,800	52,400	4,900
合計	2,887,000	410,500	2,476,500	2,681,300	205,700

[資料：H22北海道観光入込客数調査]

注）名寄市・士別市「北・北海道中央圏域定住自立圏共生ビジョン」（2012年）掲載資料

そんなことを考えていると、やはり定住圏構想資料に掲載されている市町村別の「観光入込客数」の動向なども気になるところである。

この数字自体はよくわからないような曖昧さを付きまとわせているが、名寄市の特徴をはっきり見せている。ヒマワリがあっても、天文台があっても、どうやら宿泊客の増加には結びついていないようすをはっきりと示している。だとすると、新しい「文化ホール」ができ、有名タレントや音楽家や劇団が来ても、といういらぬお節介な推測もしてしまう。このあたりの資源の効率的利用のあり方は、まちのコンパクト化ともかかわってどこまで議論されているのだろうか。中核都市を標榜するならば、最低限の施設があればいいだけでなく、イベントだけでもなく、道北らしさの景観を含めた風格あるまちづくりと宿泊をも呼び込むだけの魅力ある地域づくりの戦略がほしい。

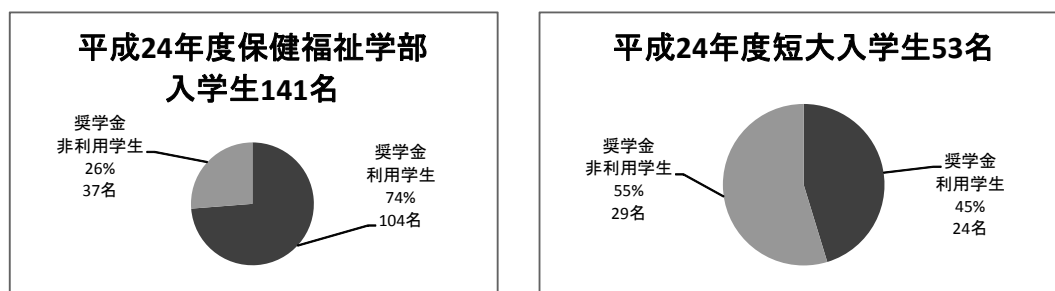
27 地域からも支えてほしい学生生活

再び地域、とくに名寄市との関係に焦点を当ててきたが、ここで名寄市民や定住圏域の市町村のみなさんに知っておいてほしいのは、本学の学生たちの生活基盤だ。これはもちろん、現在の日本社会の状況と深くかかわったことなので、本学の学生だけの特徴ではない。しかし本学学生の場合、とくにその経済的問題はきわめてシビアだということである。それはまず、学生のアルバイト行動に表れている。

いささか古いが、2009年に行った調査結果によれば次のようであった。ここで学生のアルバイト状況を、①まったくしなかった、②長期休暇中のみした、③授業期間中臨時的にした、④授業期間中も恒常的にした、⑤長期休暇期間中も授業期間中もした、に区分してみると、栄養学科ではそれぞれ24%、3%、12%、22%、39%、看護学科ではそれぞれ25%、7%、15%、14%、39%、社会福祉学科では35%、4%、11%、13%、37%、児童学科では37%、10%、15%、9%、29%であった。⑤ないし④に該当するようなアルバイトを恒常化させている学生の多さが目立つ。これはこれで、ある意味では学生の地域貢献でもあることは事実だ。だがアルバイト賃金は低い。名寄のかなりのサービス産業がこれで「息をついている」面もあるのでやむを得ない面もあるだろうが、またたしかに賃金は高い方がいいが、少なくとも学生たちのアルバイト経験がかれらの人生の途上での「良い名寄の体験」であってほしいと願うところだ。

ところで、もう一つぜひ知っておいていただきたいのは、このような生活スタイルを不可欠とする学生生活は、他方で学生が多額の「ローン」(借金)を借りることによって成り立っている現実である。とくに、たしかに借りるお金は“奨学金”と呼ばれてはいるが、それは給付型ではなく、借金であり、教育ローンなのだ。にもかかわらず、「奨学金の貸与」などという表現がこれまでまかり通ってきたことにまず注意してほしいのである。

本学学生の奨学金(教育ローン)依存率



* 日本学生支援機構「平成22年学生生活調査結果」によれば、公立短大学生の奨学金利用平均値は56.7%である。

しかも、この日本学生支援機構の奨学金(ローン)は、かつてあったような「返済免除」の特典(国家公務員や教員になれば返却免除になる)はいまやほとんどない。あるのはすべてローン方式のオプションだけだ。すなわち、利子につかない(1種)か利子つきか(2種)、月額いくら借りるかという差異だけである。

具体的に24年度入学生を対象にみると(他の年度でも大差はない)、本学短期大学部における利用者は45%だが、保健福祉学部は実に74%の学生がローンを使って学生生活を送っている。これでは、お金のかかるスポーツや遊びは困難だ。しかも本学の利用率は全国平均よりもかなり高い。

さらに保健福祉学部の利用学生の内訳を月額・総額(利用者数)で見ると、1種利用者34名のうち、月額3万=総額144万(2名)、月額4.5万=総額216万(1名)、月額5.1万=総額245万(31名)、2種利用者70名のうち、月額3万=総額176万(8名)、月額5万=総額302万(30名)、月額8万=総額517万(12名)、月額10万=総額646万(8名)、月額12万=総額775万(12名)、そして1種、2種併用者11名の場合の最高総額は1,020万円となっている。これらの返還期間は20年である。

利用者によって背負うローンの重みは違うが、これだけの額を返還するのは容易ではないし、まして非正規雇用であったりすれば悲惨だ。全国的に返還困難な状況が生まれているのもうなずけるだろう。とくに本学は女子学生が多いことを考えると、男性でも同じだが、結婚も容易ではなくなる。互いの借金を意識しながら結婚を考えざるを得ないからである。その意味で、本学は現代の「苦学生」をかなり含んでいると言っている。だからもしも、市民や「財界」関係者団体あたりで他に寄付する余裕があればぜひ少しでも本学の学生たちを援助してほしいし、地方都市でありながらけっこう高いアパート代あたりを何とかしてほしいと

思うのである。かれらの存在は、すでに繰り返し指摘してきたように、外から金を運び込み、若さを通じたまちの活性化に大きく貢献している姿を浮かべると、学長としてはとくにそのことを思うのである。貧弱な厚生施設や満足に楽器もそろわない吹奏楽団など、地域からの支援があればと思う。

だがそのような主張はまた、自らにもブーメランの如く返ってくる。学生たちが専門職に不可欠の国家試験に合格してこそ安定した職場も確保できる基盤ができると考えると、学生のローンも重さは、われわれ教員側の責任を限りなく重いものにするからである。ローンの重さに見合った教育の保障が大事だ。

28 地域学力の向上も連携の課題に

本学では、入試にいわゆる地域枠を設けている。この場合の指定範囲は名寄市、下川町、美深町、音威子府村、中川町、士別市、剣淵町に所在する高校である。具体的な対象人数は、保健福祉学部13人（栄養3、看護5、社会福祉5）、児童学科5人である。全体の入学定員は短大部を合わせて190人、うち推薦入試枠が80人の42.1%を占め、地域枠が18人の9.5%である。

このような対応は多くの大学が行っている。たとえば、釧路公立大学では入学定員300人のうち推薦枠35%、地域枠は9%である。この場合、地域枠の関係市町村は、当該大学が釧路公立大学事務組合によって成り立っていることから、その構成員である釧路市、釧路町、厚岸町、浜中町、標茶町、弟子屈町、鶴居村、白糠町となっている。公立はこだて未来大学は、定員240人のうち推薦枠は25%だが、その推薦入試にも3種類あり、指定校枠10人（4.2%）、北海道・青森県枠45人（18.8%）、全国枠5人となっている。ここで指定校とは、渡島・檜山管内の高校である。一方、札幌市立大学のように、公立であっても推薦枠（26.7%）は設けられているものの地域枠のないところもある。だがたいていは、大学の経費には設置自治体の持ち出しもあることから、入学料の差別化があり、また設置目的との兼ね合いから、一定の根拠を持って、地域枠が設けられている。これはこれで、その目的が果されることを通じた大学の“地域貢献”の一つの姿ではある。

ただそうは言っても、大体は推薦枠の「内数」として地域枠は設定されており、「枠」があるからといって、どんな成績でも全部枠内人数を埋めるかどうかはたいていは多くの場合よくわからない（公表の範囲では明確ではない）。本学の方針も、『推薦選抜』では募集人員の一部に『地域指定枠』を設定する。名寄市および近郊市町村の高校出身受験生に限定して、『地域指定枠』の募集人員内で選抜する」（設置申請文書）である。また本学を含めて、地域枠設定の意義そのものを明確に記述している例は、次に触れる医学部を除いては、少なくとも管見によれば見ていない。



このあたり、医学部では地域枠設定の理由も可否の基準ももう少しクリアにしている。まず枠の根拠になっているのは、関連地域出身者の就学機会の拡大というより、医師の地域的偏在という深刻な問題を解消させる課題とリンクしているのは周知のところだ。その代表例として、旭川医科大学を紹介しておこう。

ここでは医学科入学定員112人のうち、一般入試62人、A O入試・北海道特別選抜募集人員40人、推薦入試道北・道東特別選抜募集人員10人である。看護学科では入学定員60人のうち、一般入試50人、推薦入試10人となっている。しかしここでも、一般入試以外の選抜方法においては、必ず「選抜の合格者が募集人員に満たない場合、その欠員は一般入試の前期日程の募集人員に加えます」とある。

なお医学科の特別選抜では、くわえて「当該地域における医療に貢献する強い意欲がある者」「卒業後は、

本学が指定する道内の研修指定病院で卒業臨床研修を受けることが確約できる者」として確約書の提出を義務付けている。また、選抜基準ではいずれも大学入試センター試験の成績最低ライン（いわゆる足切り）を明示し、かつ集団面接と個人面接の二つの面接が用意され、著しく低い場合は不合格とする場合があるとしている。看護学科では、とくに地域指定枠は設けていないが、面接等で「当該地域における医療に貢献する強い意欲及び適性等を総合的に審査する」としている。

このように、大学入試も地域との関連を強めて来ているが、どの大学でも地域枠をどこまで埋めるという点では、先に示唆したように、微妙である。そこでは、大学側の意図通りの良い受験生をいかにとることができるかもあるが、同時にいかに他の同じ推薦入試枠の受験生との公平性をどれほど担保するか、などがまず直接的な検討課題となる。

とくに本学のような地方にある公立大学側からすれば、たとえばともかく枠をすべて埋めることによって、地元の高校や地域社会からしばらくは好評を得たとしても、やがてそれが大学の評価を下げ、受験倍率を下げて行く可能性（本学ではつねにサバイバルの問題）は小さくない懸念材料となる。このあたりが、同じ地域からの「矛盾した・しかねない期待」として痛し痒しのところである。だがもちろん、「それをカバー（入学後の学力を向上させて）してこそ大学の教育力だ」という意見もあろう。学長としては、それができれば素晴らしいと率直に思う。

しかし、大学側の対応はしばらく措けば、「大学と地域」の連携という点は、特別に地域枠を設けなくても、入学を希望すれば十分クリアできるだけの学力をアップさせるという点での連携ももっと検討されてしかるべきだ。とくに北海道の場合は、よく知られているように、義務教育等の学力は全国でも最低に近いものがあり、体力もまたそうだからだ。このあたり、本学のような専門職養成大学における資源も利用しながら、文字通り良い子育て環境や教育環境を地域全体としてどう向上させていくかも、今後の大きな連携課題になりうると思われる。

29 大学もまちの景観の一部 —建物配置は百年の計だ—

空間にこだわってきたのは、文字通りのまちなかの景観をどう魅力的なものにするかは、昔からの地元住民のみならず、たとえ“旅人”的性格を抜けえない住民にとっても、気持よく過ごすという単純なことが結構大事なことだと思うからである。また、人口を減少させながらも、都市機能を有効に維持していくためには、“効率化”ということも考えざるを得ないと思われるからだ。そして、名寄は駐屯地を抱え、大きな地方センター病院を有し、おまけに大学まである「依存・消費型都市」である。だからこそ、まちは地域の主体性を意識した固有の魅力的景観をも感じさせるところであってほしいと思うのである。

大学の状況については縷々触れてきたので、ここで最後に言いたいのは、大学キャンパス自体の景観だ。学生はもちろんのこと、われわれ教員にも、身近な人々や他者にも誇れるキャンパスがほしい。観光客をも集めうる存在になりたい。学生たちにそう感じさせる条件が整備されれば、それはやがて大きな評判を呼ぶだろう。「一度来てみてよ」「小さいキャンパスだけど素敵だよ」と友人・知人に呼びかけることができる。「ホームカミングデー」が楽しみにもなる。

その点で、懸案の事項でもあり、格好の話題にもなりうるのは、大学の新図書館の建設だ。どんなコンセプトをもたせ、どんな内容にし、どんな形のもを、どこに配置するかは、大げさに言えば“百年の計”だ。関係者からはおしかりを受けそうだが、用地問題や財政の制限、あるいは地域政治などが背景にあったのだろうが、名寄の建物・空間配置の歴史はやはりいいとは思えない。さて、今度はどうするかだ。先を見るわれわれの、市民の、とくに為政者の姿勢が問われている。

ここで、大学をめぐる最近の写真はないので、台風で大学の周囲を囲んでいた木々が倒れ、伐採される前

の古い航空写真を眺めてみよう。この角度のものしかないことから、現状を知らない判断がつきにくいかもしれないが、キャンパスのど真中の白い三角屋根の温室のような建物が何かと言えば、B&G財団から無償譲渡された市民プールだ。それを挟んだ南側と北側に限らず、アスファルトのあるところはすべて駐車場か道路である。恵陵館とあるのは旧恵陵高校の建物を利用した大学校舎である。また東側に大きな「大学公園」とあるが、これは大学の隣にある（大学の管轄ではない）市民公園だ。さらに、写真でははっきりと見えないが、本館の手前を南北に走り、新館との関連を真っ二つに分断しているのが、毎日の横断にも左右の注意を欠かせない市道である。

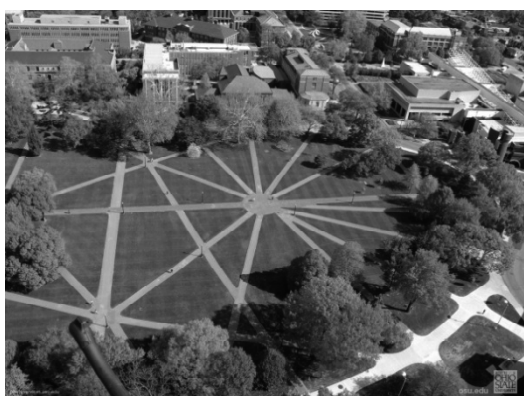


園」とあるが、これは大学の隣にある（大学の管轄ではない）市民公園だ。さらに、写真でははっきりと見えないが、本館の手前を南北に走り、新館との関連を真っ二つに分断しているのが、毎日の横断にも左右の注意を欠かせない市道である。

今度の新図書館の建設候補地をめぐってはなぜかプールは「動かさない」ことを前提に進んでいる。たしかに撤去して新たに作るとなればお金もかかるので、容易には動かさないのだろう。だが、小さな大学のキャンパスを分断する市道があり、ど真ん中に平成2年につくられた市民プールがあり、夏になればそこで流されているラジオ歌謡曲が教室まで聞こえてくるような環境をそのままにし、10年先、20年先、30年

先を見通すことなく図書館をつくらざるを得ないとなると、いかななものだろうか。また、最近でこそあまり盛り上がりがない大学祭における「よさこい」も本館前の駐車場で行われるのだから、いかにも味がない。厚生施設で言えば、たしかに地域資源の効率利用から学生たちが自転車をかけて市営コートに行くのは仕方がないとも言えるが、隣の中学校にテニスコートがあって、大学にはないという現実もある。

たしかに設置者側の財政には限度があろう。だが、夢は見たいものだ。掲載した写真はアメリカの大学のオーバル（楕円形の競技場などを表す）と呼ばれる、言ってみればコモンズ（入会地・共有地）のような広場の写真だ。その周囲は、もちろん本学とは比べ物にならない規模の大学の建物群の配置がある。しかし小さな本学にも、これに似た広場がキャンパスの真ん中にあればと思う。学生たちに、関係者に、市民に、訪問者や観光客に、知的雰囲気をも漂わす、みんなが集う場が用意されてもいいはずだ。



オハイオ州立大学オーバル（米国コロンバス）



ワシントン大学キャンパス（米国シアトル）

30 地域と大学 —光り続けるために—

ようやく最終回だ。と言っても、はじめから30回というロングランを考えていたわけではない。「光り続ける条件の重なり」を求めているうちに、冗長になってしまったのが正直なところだ。われながらいろいろよく思いつくものだと、多少は感心もしている。生涯何々一筋といったものでなく、流れに身を任せて、それも天命と自らを割り切らせてきた人生がそうさせているかもしれない。

さて、“地域における名寄市立大学”を意識して振り返ると、自衛隊のまちでもなく、病院と自衛隊のまちでもなく、いまようやく、勝手な解釈だが、これに「大学」が加えられるべきところに来つつあるように思える。定住自立圏構想なども踏まえて言えば、道北のみならず北海道という地域の「ケアの未来をひらく」拠点であり、その影響は全国にも国際的にも与えることのできるような存在でありたいという願望も生まれてくる。こういったことを考えると、今後の地域の楽しみは大学の将来だ（とあってほしい）。もしかしたら、本当に北の寒天にきらりと光る“小さなカレッジタウン”として、まちの再生に大きく寄与できるかもしれない。

本学についての話題はほぼ出し尽くしたと思う。“児童の四大化”もあとは設置者の決断だ。今後の本学の方向もすでに述べてきた。ただ、残っているのは今の流れからすると大学の法人化だ。法人化したからよくなるということは明示できない。それはこれまでの国公立大学の現実が示している。しかし、大学における決定事項などが具体化されていくプロセスがいまもってすっきりしていない面もあることを考えると、はっきりと前線で活動している人びとが責任を持って運営していく体制が望ましいとは思ふ。もちろん、ことがもっとスムーズに進められる体制があればそれでいい。

だが、そのことも含めて、今後の大学の発展や病院の医師や看護師の安定的確保などを見通すと、たびたび触れてきた名寄という地方中核都市の魅力の拡大が根本問題として横たわる。そう指摘すると、あたかも一部の人のために言っているように受け取られるかもしれない。もちろん、そういうことではない。生え抜きの地域住民に加えて、多くの転入者や周辺地域住民にとっても満足いくものが求められるということだ。とくに名寄の場合、「依存型消費都市」の性格が今後とも続くとすれば、まちづくりはそこを意識せざるを得ない。

しかしまちづくりあるいは都市計画と言っても、名寄が札幌や旭川にはなれないことも事実だ。だとすれば、北海道ならではの、道北ならではの、豊かな自然と調和した“地方の小都市”の理想形とはどんなものか、といったことが追求されるべきだ。そこでは、これまでたびたび空間とか景観を強調してきたように、ちょうどまち並木が成熟するのは何十年後のような発想がいま求められている。もちろん景観より“人間づくりだ”と言われれば、そうだ。しかし、“人間は所詮人間によってつくられる”とすれば、日々の地域社会の大人たちの互いのあいさつから始まるのだろう。だがそれができているのだろうか。

あるのが一過性のイベントだけでは、まちづくりは実現できない。そこには、実現していくための戦略が練られる必要がある。ものすごく難しいことだ。しかし、今後の方向を見出すためには、地域住民自らが自らの来し方をいま一度“掘り返して”みるべきだ。地域としても「光り続ける条件の重なり」を探し求める冷静な目がほしい。たとえば、今日のまちの衰退をもたらしたのは、日本社会が、北海道の景気が悪いからなのか。それはそうとして、地域独自の構造的な問題は関係ないのか。あるとすれば、それはどんなことなのか。何かいい方法を見つけるといふより、何が妨げになってきたかを地域住民自らがもっと議論しなくていいのか。設置者も含めて、地域社会のリーダー、為政者たち自らが自らの足下を分析すべきだ。そこから再生や振興ははじめて現実味を帯びてくる。

こう述べても、当然反感を抱く方もでてくるだろう。過疎化でアーケード街の商店が立ち行かなくなり、国鉄の民営化で多くの人びとが餓首され、企業合理化で地元雇用は縮小し、農林業の担い手は高齢化し、他方で地域を支えた人びとは定年（諦念）とともに札幌に逃げ出す。「大学の先生はいいよな。好きなことを言って」という声も聞こえそう。かくして、私が述べてきたことは、客観的であろうとすればするほど「上から目線」のように響き、「納得できない」「おもしろくない」と思うこともあるだろう。当たってもいると思う。もしも自分を“地元人間”に置き換えたら、おそらく「学長の発言」に多少なりともカチンとくるかもしれない。

そんなこんな、いろいろ書いてきた。だが、最後に、もしも自分の立ち位置を問われたら、もちろん初回

に述べたように、学長という立場を十分すぎるほど意識している。しかし、こう答えたい気持ちもある。われわれは「みんなただの旅人ではない」ということである。これは私の好きな作家のひとりである横山秀夫の最新作『64』の中のひとこまとして出てくる文句だ。氏の傑作『クライマーズ・ハイ』もそうだが、中央に対する地方、大企業に対する中小企業、そこで働いている人びとがすべてではないにせよ、また表に出さないにせよ、たとえ旅人でも、そこでお世話になっていれば、なんらかのプライドやアイデンティティといったものを多少なりとも内面化させているということだ。だから同じように、傷つきもすれば、共感もする。そういうことなんだと思う。

ともあれ、駄文を掲載していただいた北都新聞に厚く御礼申し上げます。また読者の皆様には、ご批判を含めて、ご意見・ご感想がございましたら、名寄市立大学の青木紀宛に送っていただければ幸いです。ありがとうございました。

5. 「地域と住民」全号の総目次

「地域と住民」第1号（1983年4月発行）から第31号（2013年3月発行）までの総目次を示す。

道北地域研究所 年報「地域と住民」 第1号～第31号 総目次

【第1号】1983年4月

道北地域研究所の創刊を祝って 〈開所記念講演会〉	石川義雄
道北地域研究所の開所にあたって	美土路達雄
祝辞	今村成和
地域社会の可能性と大学の課題	川村琢
道北における地域振興と住民組織	美土路達雄
名寄市の障害児保育の現状と課題	田中義和
美深町恩根内地区の食生活調査 〈第1回シンポジウム〉抄録『上川北部稲作の発展方向』	木村登茂、植木郁子、小平洋子 北海道農業研究会調査団
〈第2回シンポジウム〉抄録『上川北部における地域振興の課題』	
上川北部地域振興の基本方向	我孫子健一
上川北部地域の産業動態	橋本一彦
上川北部における地域振興の取組み	中嶋信
士別における社会開発運動のあゆみ	稲毛幸雄
過疎対策と下川ふるさと運動	三井純一
森と匠の村づくりと住民 〈調査研究の紹介〉道北農民の意識と営農姿勢	宇佐美政市
昭和57年度道北地域研究所活動報告	
委託試験研究の概要と私見	鈴木松朗
道北地域研究所の概要	

【第2号】1984年4月

名寄市における障害児の早期発見・早期療育の現状と課題	田中義和、芦沢雅子
地域振興の基本課題とその担い手	中嶋信
地域における公立短期大学の定着過程	前田憲
農村の生活活動における生活理念確立のための一試論 〈第3回シンポジウム抄録〉上川北部における農林産加工の可能性	津田美穂子
農林産加工の可能性について	中嶋信
農畜産加工商品開発のあり方	三浦昱梧
農産加工と行政	川中強
商工業活性化と「どさんこ産業」	石戸谷春雄
〈第4回シンポジウム抄録〉地域と教育 ―地域における学校の位置と役割	
教育にとって地域とは	三宅信一
社会教育活動の立場から学校に期待するもの	浅野富士男
工業高校における公開講座開設の経験から	氏家昭

地域農業と農業教育	赤部仁利
名寄女子短大の歩みから	前田憲
〈補論〉地域社会の教育的編成について	美土路達雄
〈道北地域研究所 開所一周年記念講演〉	
人類の発展と基礎科学	田中一
昭和58年度道北地域研究所事業報告	
道北地域研究所の構成（昭和58年度）	

【第3号】1985年4月

地方の時代と住民組織	白樫久
地域における障害幼児等への療育的集団指導に関する研究	清野茂、仲野加代子、小島愼
地域農業の展開と農村高齢者の位置	木村純
天塩川流域の郷土史研究の動向	鈴木邦輝
寒冷地の薬用植物(1)	本間尚治郎
〈道北地域研究所第5回シンポジウム抄録〉公立短大の歩みと将来像	
報告1. 名寄女子短大の事例から課題設定にかえて	美土路達雄
報告2. 岩手県立盛岡短期大学の現状と本県における短大整備のあり方について	草間俊一
報告3. 短期大学の将来像	安倍辰夫
報告4. 米沢女子短期大学の概括及び現在の教育・研究上の課題	阿部重弥
報告5. 福島県立会津短期大学デザイン科における教育の現状と地域伝統工芸との関連について	大原徳明
報告6. 地域総合計画	十亀昭雄
〈道北地域研究所開所2周年記念講演〉	
北方の文学風土	小笠原克
道北地域研究所昭和59年度事業報告	

【第4号】1986年4月

地域問題研究の一視角	山田定市
過疎地域振興の基本戦略	中嶋信
地域を結ぶ二つの実践に学ぶ	清野茂
名寄における自然観察活動について	松本光二
寒冷地の薬用植物(2)	本間尚治郎
〈道北地域研究所第6回シンポジウム抄録〉	
名寄市における障害乳幼児の発達保障を考える	
全体講演 地域における障害児ケアシステムをいかにつくるか	古川宇一
報告1. 保健師の立場から	平野成子
報告2. 情緒学級幼児教室の立場から	松本哲
報告3. 幼児ことばの教室の立場から	安達喜一
報告4. 幼稚園教諭の立場から	芦沢雅子
報告5. 親の立場から	越美枝子
討論のまとめ	
〈道北地域研究所第7回シンポジウム抄録〉	

北の暮らしの可能性 — 基本理念と運動の方向

問題提起	津田美穂子
報告1. 北国らしい豊かさの創造	神山健一
報告2. 「北の暮らし」の模索	木内和博
報告3. 地域の暮らしと住民組織	白樫久
討論のまとめ	
〈道北地域研究所開所3周年記念講演〉	
北海道に生きる — 動物たちの歴史 —	石城謙吉
《地研ひろば》IMPRESSIONS OF NAYORO	M.COSH
道北地域研究所昭和60年度事業報告	

【第5号】1987年4月

農村地域の特産物を利用した村おこし運動と食生活改善方向	河合知子
肥満傾向にある児童の食生活	植木郁子、小平洋子、木村登茂
エキノコックス症	木村克弥
利尻・礼文のわらべうた	佐藤志美子
寒冷地の薬用植物(3)	本間尚治郎
〈道北地域研究所第8回シンポジウム抄録〉道北の自然とくらし	
第I部 — 自然と人間 —	
報告1. 道北の自然と人間	松井愈
報告2. 道北の野生動物は今いかに	青井俊樹
報告3. 道北の自然観察・学習運動の現状	小林他家人
〈道北地域研究所第9回シンポジウム抄録〉道北の自然とくらし	
第II部 — 自然と一次産業 —	
問題提起 道北の一次産業の現状と課題	飯澤理一郎
報告1. 気候と農業	吉田武彦
報告2. 森林の保存と利用	門松昌彦
〈道北地域研究所開所4周年記念講演〉	
北海道の森林と生活の関わり	小関隆祺
〈道北地域研究所講演会〉	
北国の住まいと暮らし	荒谷登
《地研ひろば》	
子ども、この不思議な詩人?	三上敏夫
「木彫オブジェの街」構想	坂本和彦
林業と自然保護～知床問題から学ぶもの～	秋林幸男
青い流、赤い流	美土路達雄
道北地域研究所昭和61年度事業報告	

【第6号】1988年4月

上川の風土と農業	太田原高昭
道北過疎地域における乳幼児健診と障害幼児療育の現状	清野茂

過疎地域における地域福祉計画と社会福祉施設	木村純
過疎地域における一人暮らし老人の生活と地域福祉の方向	杉村宏
シベリア紀行	鈴木邦輝
寒冷地の薬用植物(4)	本間尚治郎
〈道北地域研究所第10回シンポジウム抄録〉	
道北の住まいづくり —「気密化」を中心に	
〈道北地域研究所第11回シンポジウム抄録〉	
道北の自然とくらし 第Ⅲ部 —北の街並みづくり—	
報告1. 北国の町並み	足達富士夫
報告2. 名寄市の街路樹 —現状とこれから	上田璋
〈道北地域研究所5周年記念講演〉	
北海道の自然と人 —知床・幌延・千歳川放水路—	八木健三
《地研ひろば》	
雑感	佐藤恭子
雪の夜のたわごと	名取昭
遺跡の発掘を担当して	氏家敏文
農村ならではの豊かな食生活	刈谷優子
「リネンの里」について	石戸谷春雄
道北地域研究所昭和62年度事業報告	

【第7号】1989年4月

北海道における農家の食生活改善と農産加工	河合知子
地域農業の発展と農民の学習(1)	木村純
高齢者の除雪作業と体力	須田力、三宅章介、加藤満、佐々本敏
証言・教育委員公選期の地方教育行政	
—元置戸町教育委員・教育長小林猛雄氏に聞く—	前田憲
寒冷地の薬用植物(5)	本間尚治郎
〈道北地域研究所第12回シンポジウム抄録〉地域と食料	
—食料の生産と消費を考える—	
報告1. 食料の地域内消費を考える	三島徳三
報告2. 消費者の立場から	梅野典子
報告3. 生産者の立場から	清水秀満
〈道北地域研究所第13回シンポジウム抄録〉	
道北の自然とくらし (Ⅳ) —地域と交通—	
報告1. 北海道における交通計画の変遷と展望	佐藤馨一
報告2. 交通再編と地域社会・経済	高原一隆
〈道北地域研究所6周年記念講演会〉	
民衆史から見た現代	森山軍治郎
〈道北地域研究所特別研究会〉	
農業をめぐる根本問題と北海道農業発展への視点	福島要一
《地研ひろば》	

くらしにはびこる不安	鷺巣ユキ
雑感	山口保夫
地域とまちづくり	藤田忠一
道北地域研究所昭和63年度事業報告	

【第8号】1990年4月

地方圏振興とリゾート開発	中嶋信
名寄地域における障害児療育の現状と課題	清野茂
人口の将来推計と人口シミュレーション —道北地域の人口動向と今後の展望—	藤岡光夫
名寄市を中心とした上川北部地域のわらべうた—1—	佐藤志美子
寒冷地の薬用植物(6)	本間尚治郎
〈道北地域研究所第14回シンポジウム抄録〉障害者施設と地域福祉	
講演 地域福祉と社会福祉施設	忍博次
提言1. 精神薄弱者福祉施設の立場から	横井寿之
提言2. 精神障害者の施設づくりをすすめる立場から	芦沢元造
〈道北地域研究所7周年記念講演〉	
文化でむらおこしは可能か	加藤多一
〈名寄女子短期大学特別講義より〉	
北のくらし—フィンランドと北海道—	川上セイヤ
《地研ひろば》	
S君から学んだこと	桑原桂子
士別市・まちづくり新時代がはじまった	伊藤暁
BBS運動の輪をひろげよう	草野孝治
原点に戻れるか	鈴木松朗
名寄に住んでカナダに学ぶ	小出まみ
道北地域研究所平成元年度事業報告	
道北地域研究所の構成	

【第9号】1991年4月

現代の農村社会構造の研究 —I.農村住民の階層構造—	白樫久
「寝たきり老人」と在宅福祉	木村純
道北地方における農産物加工について	鈴木松朗
近年の農村をめぐる状況と農村整備	村本徹
名寄市を中心とした上川北部地域のわらべうた—2—	佐藤志美子
寒冷地の薬用植物(7)	本間尚治郎
〈道北地域研究所第15回シンポジウム抄録〉ごみ問題とまちづくり	
講演 ゴミ問題の現状とゴミ減量の課題	神山桂一
現場からの報告1. 富良野市のごみ処理の現状と課題	宇佐見正光
現場からの報告2. 名寄市のごみ処理の現状と課題	菊地清治
〈道北地域研究所8周年記念講演会〉	
現代の子どもと北海道家庭学校の教育	谷昌恒

〈資料紹介〉

上川北部地域における最近の企業誘致の動向について	木村純
《地研ひろば》	
ほんとうのことです	堀金満次郎
「北の星座共和国」建国をめざして	北の遊星人
ハンガリーでの音楽、語学研修	佐藤志美子
動脈硬化症は何故恐い？	千見寺道子
道北地域研究所平成2年度事業報告	
道北地域研究所の構成	
市立名寄短期大学道北地域研究所規程	
市立名寄短期大学道北地域研究所友の会規約	

【第10号】1992年4月

現代日本資本主義の地域戦略と住民自治	山田定市
ガット・ウルグアイラウンドと日本農業、地域農業の進路	飯澤理一郎
名寄市の子どもの食事調整能力について	小平洋子
過疎地域における早期療育システム推進のための課題	清野茂
寒冷地の薬用植物(8)	本間尚治郎
〈道北地域研究所第16回シンポジウム抄録〉	
道北地域の人口動向と地域振興	藤岡光夫
名寄市における食品製造業の現状と課題	木村純
〈道北地域研究所9周年記念講演会〉	
北海道農業の可能性を探る	七戸長生
《地研ひろば》	
ヨーロッパ旅行に参加して	今尚文
都市・農村交流に思う	久保和幸
見えないものの命	高橋毅
東小コミュニティ・カレッジのはなし	長岡巖
マウンテンバイクからみた夢	荒井一成
—追悼文—	
小関隆祺先生について	道北地域研究所企画委員
小関所長を偲ぶ	坂東正美
北の自然の見守り手として	鈴木邦輝
『地域と住民』(第1号～第9号) 総目次	
道北地域研究所平成3年度事業報告	
道北地域研究所の構成	

【第11号】1993年4月

10周年記念号によせて	牧野幹男
現代の農村社会構造の研究 II.農村住民の収入・所得構造	白樫久
北海道の森林 —針広混交林—	松田疆

上川北部農業の変貌と今後の課題	小林恒夫
道北地域における特別養護老人ホーム入所状況	村本徹
寒冷地の薬用植物(9)	本間尚治郎
〈道北地域研究所開所10周年記念講演〉	
「持続する発展」へむかってー日本の経験とアジアの哲学ー	宮本憲一
書評 太田原高昭著『北海道農業の思想像』(北海道大学図書刊行会、1992年)	小林恒夫
Naioroput Dreaming Space 計画	荒井一成
研究紹介 雪室を使った野菜貯蔵の実験について	太田徹
〈地研ひろば〉	
地域の中にあつての学校給食でありたいーローカルに誇りと自信を持ち、こだわり続けたいー	宮下省三
地域の特色と様々な人々の連携がよい地域をつくるー自然生活体験事業の実践からー	新田賢治
〈道北地域研究所10年をふり返って〉	
開設10年後の提案	鈴木松朗
地方自治の前進と道北地研	中嶋信
地方自治と道北地域研究所に期待する	飯澤理一郎
市立名寄短期大学道北地域研究所の10年	木村純
道北地域研究所平成4年度事業報告	道北地域研究所企画委員会

【第12号】1994年4月

私立函館盲啞院長・佐藤在寛ーその東京時代ー	清野茂
北海道の幼稚園給食の実態と課題	小平洋子
Team-Teaching in Dohoku:Developing a More Communicative Approach to the Teaching of English in junior and Senior High schools	Martin Meadows
名寄市における子どもの手袋の実態と母親の意識	藤田健慈、小川和美
寒冷地の薬用植物(10)	本間尚治郎
〈道北地域研究所開所11周年記念講演〉	
民族と環境問題	色川大吉
〈第17回シンポジウム報告〉高齢化社会と在宅福祉	
基調講演 在宅福祉の現状と課題	大内高雄
報告1. 白老町の在宅福祉活動	工藤昭
報告2. 音更町の在宅福祉の現状と課題	須田久美子
報告3. 名寄市の在宅福祉の現状	北出尚子
〈地研ひろば〉	
人と寄生虫 アレルギーとアネルギー	牧野幹男
ローカルとグローバルと 第15回国際栄養学会議を垣間見て	芝田和子
道北地域研究所平成5年度事業報告	

【第13号】1995年4月

名寄市における文化活動史の欠落を埋めるー幻の詩集『白夢会詩壇』ー	松岡義和
家庭科における地域学習の検討(第1報)ー「家庭生活と地域の関係を考える」授業の構想ー	青木香保里
異文化理解と音楽学習	三国和子

名寄市におけるごみ問題・資源リサイクルに関する調査	辻玲子、菅原恵子、只野洋子
心臓病・高血圧症などの栄養指導の実際 —「ヘルシー・ディナーの会」を実施して—	千見寺道子
聞き書き 鷲巣俊誠氏 —障害児教育・地域福祉・自然保護	清野茂
宮川淳一氏と道北の社会教育 —士別農民大学から士別農園への農民の学習の発展—	木村純
寒冷地の薬用植物(11)	本間尚治郎
〈道北地域研究所開所12周年記念講演〉	
地域における在宅ケアの条件	太田貞司
〈第18回シンポジウム報告〉新農政下の地域農業の動向と農協の役割	
〈第19回シンポジウム報告〉地域における保健・医療・福祉の連携	
〈地研ひろば〉	
雪と氷の像に光を	坂田仁
名寄市史編集日記	島影陸
道北地域研究所平成6年度事業報告	

【第14号】1996年4月

北海道における短期大学の一局面	前田憲
名寄市における文化活動史の欠落を埋める(2) —田中長三郎と翼賛短歌会—	松岡義和
小径丸太材によるジオデシックドームの開発と課題—雪室としての利用の可能性—	荒井一成、松岡勝美
ヘルスアクティブな看護婦(士)育成のための看護学生のライフスタイル研究(1)	
—市立名寄短期大学看護学科のカリキュラムに禁煙教育を導入して—	
	寺山和幸、吉田京子、八幡剛浩、安達克己、飯野君子 片岡秋子、若林悦子、荒木美枝、吉川由希子、大西章恵 木戸裕子、中田さよ里、佐々木由紀子、羽原美奈子 岡林靖子、竹内徳男、望月吉勝
知的障害者の地域移動に関する研究	
—知的障害者はなぜ故郷を離れなければならないか—その1.知的障害者の地域移動の現状	
寒冷地の薬用植物(12)	清野茂
	本間尚治郎
〈道北地域研究所開所13周年記念講演〉	
体内リズムと看護	廣重力
(第20回シンポジウム報告)働く女性と地域	
〈地研ひろば〉	
地域情報空間 —人間的インターネット—	吉田清人
肥満よ、お前も遺伝子か!	牧野幹男
名寄発信のカナダの子育て研究	小出まみ
道北地域研究所平成7年度事業報告	

【第15号】1997年4月

地域における新制高等学校の成立	前田憲
ヘルス・アクティブな看護婦(士)育成のための看護学生のライフスタイル研究(2)	
—喫煙防止教育プログラムの実施とその後の喫煙状況—	
	寺山和幸、吉田京子、八幡剛浩、安達克己 飯野君子、片岡秋子、若林悦子、荒木美枝

吉川由希子、大西章恵、佐々木由紀子、中田さよ里
羽原美奈子、岡林靖子、藤井千佳、竹内徳男、望月吉勝

骨粗鬆症検診結果からの考察	吉川由希子、荒木美枝
上川北部地域の発展方向—『名寄市における将来人口推計』をもとにして—	佐藤信
「専門職看護婦(士)のためのリカレントセミナー」実践報告	佐々木由紀子、吉田京子 飯野君子、荒木美枝、岡林靖子、羽原美奈子
国民要求に沿った社会保障の実現をめざして—「公的介護保険」構想から見えてくるもの—	高田哲
寒冷地の薬用植物(13)	本間尚治郎 〈道北地域研究所開所14周年記念講演〉
自然をみつける物語	小野有五 〈地研ひろば〉
地域に根ざした大学	中嶋信
名寄で描いた5枚の絵	小林恒夫
北海道フィンランド協会名寄支部の活動	坂田仁
道北地域研究所平成8年度事業報告	

【第16号】1998年4月

15周年記念号によせて	牧野幹男
地域づくりの現代的課題と主体形成	山田定市
今、「食」と「農」を問う	飯澤理一郎
障害を持つ人に対する社会的支援の重要性	
—名寄地域における障害を持つ人・持たない人の主観的健康感の比較を通して—	羽原美奈子、大西章恵、寺山和幸、森本信子 佐々木奈美子、村上敦哉
高齢女性の整容への意識と行動、及びその効果についての検討	
—特別養護老人ホーム入居女性への調査より—	中田さよ里、飯野君子
名寄地域における保健婦活動のあゆみ	大西章恵、小栗成子、大久保洋子
公的介護保険の開始に向けて専門職員が問われているもの	
—北海道健康学習ネットワーク世話人による話し合いを基調にして—	大西章恵、菊池一春、武田富美子、朝岡幸彦
名寄市における文化活動史の欠落を埋める(3) —人形劇サークル「仔やぎ」—	松岡義和
超新星・S N 1997 efの発見記	佐野康男
地球温暖化と森林について	坂東正美
寒冷地の薬用植物(14)	本間尚治郎 〈第21回シンポジウム抄録〉現代社会における出産 〈第22回シンポジウム抄録〉地域づくり、人づくり —農業のちからを考える— 〈地研ひろば〉
「地域の教育」についての走り書き	川上信夫
「北の天文字焼き」が郷土の火祭りになるために	坂田仁
市立名寄短期大学道北地域研究所開設15周年記念	
ニュージーランド スタディツアー 福祉国家の行政改革と農業視察報告	

市立名寄短期大学道北地域研究所15年の歩み
道北地域研究所平成9年度事業報告

【第17号】1999年4月

- 地域住民の食生活実態と健康意識に関する考察 …… 河合知子、植木郁子、小平洋子、久保田のぞみ
栄養改善活動における市町村栄養士の役割と課題 …… 久保田のぞみ
地域の集団給食施設における学外実習 …… 小平洋子
ナショナルミニマムとしての公的介護保障を―「地域に根ざす」「生活者」としての視点から― …… 高田哲
名寄市における高齢者の生活実態と今後の在宅ケアのあり方 …… 安達克己、大西章恵、岡林靖子、福良薫
更年期女性のかかえる不定愁訴の実態とその背景
―名寄市・美深町の40才～64才の女性の实態調査を実施して― …… 若林悦子、大西章恵、小栗成子
訪中探訪 中国における看護事情 ―日中看護学会に出席して― …… 羽原美奈子
寒冷地の薬用植物(15) …… 本間尚治郎
〈開所15周年記念講演会〉
24時間巡回介護サービス ―いまとこれから― …… 榎本憲一
〈第23回シンポジウム抄録〉地域でそだてる文化活動
〈地研ひろば〉
「生薬の町 名寄」の復活を希って …… 畠山好雄
脳死と臓器移植 …… 中村稔
精神障害者のかなしみ、やさしさ、ねがい …… 安達克己
道北地域研究所平成10年度事業報告

【第18号】2000年4月

- 公共事業が公共性を回復する条件 ―河川事業を中心に― …… 中嶋信
精神科病棟に「遊びリテーション」を導入して(第1報) …… 守村洋、安達克己
更年期女性のかかえる不定愁訴の実態とその背景(第2報) …… 若林悦子、福良薫、大西章恵、寺山和幸
ヘルス・アクティブな看護婦・士育成のための看護学生のライフスタイル研究(3)
―看護学生の喫煙行動と関連要因の分析― …… 寺山和幸、八幡剛浩、安達克己、飯野君子
栗和田美恵、若林悦子、佐藤郁恵、宮崎眞智子
真野佳子、細谷悦子、畑瀬智恵美、羽原美奈子
福良薫、澤田裕子、守村洋、望月吉勝
美深町仁宇布における山村留学の調査研究 …… 中島常安、大坂祐二、守村洋、清野茂
鈴木文明、三国和子、青木香保里
地域障害者計画に関する研究 ―名寄市を事例に― …… 清野茂
名寄の『中学生タイムス』と『学校ニュース』 ―プランゲ文庫所蔵の占領期検閲新聞から― …… 谷暎子
寒冷地の薬用植物(16) …… 本間尚治郎
〈第24回道北地域研究所シンポジウム抄録〉
不登校をめぐる課題―最近の子どもたちの反応―
〈第25回道北地域研究所シンポジウム抄録〉
不登校・いじめ…今、学校・親・地域ができること―これからの教育の可能性を求めて―
〈地研ひろば〉

何にでも興味と批判	鈴木松朗
能と日本人の基層に流れる宗教意識(その1) 一能の大成者 世阿弥一	中村稔
名寄における「はじめて物語」 一日本組合天塩基督教会の歴史から一	薮雅二
道北地域研究所平成11年度事業報告	

【第19号】2001年4月

ヘルス・アクティブな看護婦・士育成のための看護学生のライフスタイル研究(4)	
一看護学生に実施した喫煙防止教育プログラムの効果一	
寺山和幸、佐藤郁恵、守村洋、福良薫、澤田裕子 真野佳子、加藤千恵子、藤井瑞恵、畑瀬智恵美、宮寄眞智子 羽原美奈子、細谷悦子、栗和田美恵、飯野君子、八幡剛浩	
障害をもつ独居者の在宅療養を可能にする条件の研究	
一患者が在宅生活を意志決定するまでのかかわりを通して一	羽原美奈子、前川恭子、菊一好子
臨床実習指導者の実習指導に関する実態調査	栗和田美恵、佐藤郁恵、細谷悦子 羽原美奈子、澤田裕子、飯野君子
わが国の食料自給率低下のメカニズム 一その過程分析と回復のための課題一	七戸長生
米飯給食における地元産米利用とその実態	河合知子、久保田のぞみ、佐藤信
『福祉に生きる19 佐藤在寛』・補遺のために	
一函館盲啞院卒業生・佐藤アイさんに聞く一	清野茂、玉手順子、玉手裕、玉手千晶
〈実践報告〉精神保健ボランティア講座in名寄	守村洋、秋庭恵子、猪原ひろみ、窪田博文 佐藤稔、下道幸恵、高槻祥恵、山口貴代美
〈視察報告〉アメリカの知的障害者施設の栄養管理	小平洋子
〈特別寄稿〉平和でない時代の平和教育	チョン・ユソン
寒冷地の薬用植物(17)	本間尚次郎
〈平成11年度道北地域研究所講演会〉	
いのち、輝いていますか！一いま、改めてボランティアを考える一	藤井英規
〈平成12年度道北地域研究所講演会〉	
この100年の日本と北海道	森山軍治郎
〈地研ひろば〉	
能と日本人の基層に流れる宗教意識(その2) 一能・能舞台・能面と古代の宗教思想・遺骨信仰一	中村稔
道北地域研究所平成12年度事業報告	

【第20号】2002年3月

現局面における過疎地域振興の課題	佐藤信
過疎地域における高齢者の食生活を中心とした生活問題	津田美穂子、河合知子、久保田のぞみ
北海道国立病院・療養所の喫煙に関する職場環境と看護者の喫煙	佐藤郁恵、畑瀬智恵美、寺山和幸 福良薫、澤田裕子、岩見喜久子、小林律子、酒井恵美子
夜間お母さん教室の受講時の父親の精神状態と受講前後の役割変化	加藤千恵子、吉田征子、谷津万里
寒冷地の薬用植物(18)	本間尚次郎
〈第26回シンポジウム抄録〉首長が語る21世紀の地域、わが町の展望	
〈平成12年度公開講座抄録〉天塩川流域と名寄地方の100年	

天塩川と天塩川流域の自然・生活	鈴木邦輝
医療の今とこれから	久保田宏
文化・文化活動と地域	松岡義和
〈第19回講演会抄録〉	
21世紀の地域福祉の展望と課題	二宮厚美
〈地研ひろば〉	
京都学派の総帥 西田幾太郎の哲学(その1)西田哲学・旧制高校—センチメンタルジャーニー	中村稔
黎明期の名寄女子短期大学を形成した人々	
—第二代名寄市長 池田幸太郎と初代名寄女子短期大学学長 半澤洵—	薮雅二
道北地域研究所平成13年度事業報告	

【第21号】2003年3月

名寄市在宅介護支援センターの相談業務から見る高齢者の現状	羽原美奈子、武田かりん、大石正子
住民参加型在宅福祉サービスの可能性と課題 —その1:予備的考察—	大坂祐二
あるろうあ青年の生活史 —その自己実現の軌跡—	清野茂・2001年度清野ゼミナール
「ぼくの人生を振り返って」—知的障害者更生施設利用者Y氏の自分史と提言—	清野茂
実習指導者研修の実際と評価	細谷悦子、飯野君子、栗和田美恵、宮寄眞智子 藤井瑞恵、羽原美奈子
夜間お母さん教室における「妊婦の食事」の理解を進めるための試み	加藤千恵子、吉田征子、谷津万里
〈特集 大学付置研究所の活動と展望〉	
北海学園大学開発研究所の活動について	小田清
旭川大学地域研究所の歩み	竹中英泰
釧路公立大学地域研究センターの活動状況	福田芳弘
市立名寄短期大学道北地域研究所の20年	前田憲
〈平成13年度第27回シンポジウム抄録〉	
道北地域における訪問看護の現状と将来	
〈平成14年度公開講座・講演会抄録〉	
大学編成 —もう一つの考え方—	石川好
市町村合併をめぐる状況分析	小西砂千夫
〈平成14年度第28回シンポジウム抄録〉北海道における市町村合併問題	
〈地研ひろば〉	
京都学派の総帥 西田幾多郎の哲学(その2) —深層心理、精神病理との関わり—	中村稔
名寄市街区公園評価と快適な公園づくり	坂田仁・名寄ロータリークラブローターアクトクラブ
道北地域研究所平成14年度事業報告	

【第22号】2004年3月

ヘルス・アクティブな看護師育成のための看護学生のライフスタイル研究(5)	
—喫煙学生に対する禁煙サポート—	寺山和幸、舟根妃都美、結城佳子、神野朋美、成田円 鈴木敦子、伊藤道子、加藤千恵子、畑瀬智恵美、寺島泰子 藤井瑞恵、根本和加子、池田正子、飯野君子、八幡剛浩、望月吉勝
地域住民の生涯学習支援と高等教育機関の役割	木村純

美深子ども家庭支援センターにおける一指導事例

ー注意欠陥多動傾向児に対する個別的な設定保育の試みー …… 糸田尚史、生川裕野、小川恭子
エコマネーの教育的契機とコミュニティ形成への課題ー北海道栗山町「クリン」の事例ー …… 大坂祐二
農畜産物「贈答品」市場の地域構造 …… 佐藤信
冷却CCDカメラで発見・観測した主な成果 …… 佐野康男
〈実践報告〉地域におけるタッチケア学習会の実践報告 …… 加藤千恵子、成田円、伊藤道子、谷津万里
吉田征子、山田智子、常本典恵、簗島美奈子、岩村博美

〈平成15年度特別講演会抄録〉

地方都市における大学の役割 …… 草原克豪

〈平成15年度公開講座・講演会抄録〉

ヘルスプロモーションと看護活動ーなぜ今、ヘルスプロモーションかー …… 望月吉勝

地域づくりと地域福祉 …… 大橋謙策

〈地研ひろば〉

京都学派の総帥 西田幾多郎の哲学(その3)ー世阿弥・行意的直観・身体感覚=共通感覚・教育ー …… 中村稔
道北地域研究所平成15年度事業報告

【第23号】2005年3月

上川北部地域において冬期間に骨折した高齢者の実態調査 …… 舟根妃都美、神野朋美、結城佳子、寺山和幸福
福祉コミュニティ形成に向けた地域通貨の可能性と課題

ー名寄市における地域通貨「ひまわり」試験運用の結果からー …… 大坂祐二

児童相談所における保育内容(人間関係)と次世代育成支援時代の保育士養成

ー一時保護の子どもたちー …… 田崎洋子、糸田尚史

(平成16年度 講演会抄録)

病気とは何か?治療とは何か?ー地域の健康資源と住民の心理・行動ー …… 大橋英寿

子どもの発達苦悩と地域の教育力 …… 山内亮史

看護の機能ー今、看護に求められている想像力ー …… 佐藤登美

身体をうごかして元気で長生きしよう …… 種田行男

〈地研ひろば〉

大東亜・太平洋戦争(その1)ー大東亜戦争とは何か、何だったのかー …… 中村稔

道北地域研究所平成16年度事業報告

【第24号】2006年3月

妊娠中の女性の心理・社会的状態とソーシャル・サポートの関連

…………… 伊藤道子、加藤千恵子、北田孝子、荒井歩

北海道内の看護学生における移植医療に対する認識調査(第1報) …… 成田円、寺山和幸福

学童期の発達段階に合った関わりについて

ー子どもと家族・医療者へのアンケートから入院生活とインフォームド・コンセントについて考えるー

…………… 伊藤良子、大久保麻梨、近藤愛、佐藤志保里、竹田絵梨子、松岡義和

解釈学的現象学によるデフ・ファミリーの世界観

ーメール・文通・手話通訳を介しての交流からー …… 伊藤良子、石川絢子、今村真理子

タッチケア教室の成果と課題ータッチケアが母親・父親に与えるリラックス効果についての検討ー

..... 加藤千恵子、成田円、伊藤道子、高橋美聡、納富円
李澤好栄、谷津万里、八幡剛浩、佐藤敬

障害児療育と親支援をフィールドワークから学ぶ

ー北海道の地域“諸資源（リソース）を活用した保育者養成ー 糸田尚史
〈平成17年度 講演会抄録〉

今話題の新興・再興ウイルス感染症 ーその正体を探るー 西條政幸

地域性を生かした食育とは ー食の営みをトータルとして捉えることで地域の食を育てるー ... 足立己幸
〈地研ひろば〉

大東亜・太平洋戦争（その2）ー京都学派の総帥西田幾多郎の哲学（その4）、そして京都学派ー 中村稔
名寄市冬対策に関する研究報告 坂東正美
道北地域研究所平成17年度事業報告

【第25号】2007年3月

[研究報告]

ヘルス・アクティブな看護師育成のための看護学生のライフスタイル研究(6)

ー市立名寄短期大学看護学科で実施してきた喫煙防止プログラムの意義ー

..... 寺山和幸、舟根妃都美、澁谷香代、渡邊朋枝、村上正和
鈴木敦子、笠井美希、結城佳子、畑瀬智恵美、加藤千恵子
播本雅津子、伊藤良子、望月吉勝

知的障がい者のエンパワメントに及ぼすアートとしての「さをり織り」の役割 清野茂

「地方」から見たYASAKOIソーランと地域社会（その1） 大坂祐二

上川北部地域の将来方向と課題ー『名寄市における将来人口推計』（2006）を手がかりにー 佐藤信

[ノート]

心理的援助の本質と援助者の資質・役割 小山充道

地方分権改革と北海道の未来 北海道市議会議長会定例事務局会議講演（平成18年8月25日）要旨 白井暢明

地場産品を使用した異世代給食試食会 ー食育の視点からー

..... 小平洋子、秋山真澄、江刺美咲、垣内亜依、川越瑛子、藤井瞳

名寄市立大学におけるホームページ制作の取組 石川貴彦

地域住民による高齢者訪問活動の進め方 播本雅津子

大東亜・太平洋戦争(その3) ー戦争の遠因、近因、誘引(その1)アメリカの排日移民法ー 中村稔

道北地域研究所平成18年度事業報告

【第26号】2008年3月

[研究報告]

いま、なぜ亜麻なのか ー製麻業復活への期待ー 三島徳三

もち米の市場動向と産地対応 ー「日本一のもち米産地」名寄の方向性ー

..... 宮入隆、佐藤信、三島徳三、今野聖士

[ノート]

学生定員確保に対するインターネット支援の方策 石川貴彦、村上正和

社会的・歴史的・文化的な状況の文脈における子どもの心（精神）と発達 糸田尚史

地場産品を使用した異世代給食試食会 ー給食献立の評価と異世代交流の効果ー 小平洋子

ロールプレイングによるカウンセリング研修体験 …………… 小山充道
ミズナラの森造成にみる後期高齢者の課題 ―遠い夢を支えたもの …… 高岡哲子、深澤圭子、紺谷英司
すべての子どもたちが主役であるために ～学齢児童の子どもたちと放課後の生活～
―平成19年度北海道放課後子どもプラン推進事業 安全管理員等研修（道北ブロック）（平成19年11月9日）要旨―………… 傳馬淳一郎

[2006年度 公開講座抄録]

農がつくる美しい国・北海道 ―理想のライフスタイルを求めて― …………… 麻田信二
食育に生かす地域の食材・人材 ―近年の食育の動向と実践事例から― …………… 平本福子
グリーンツーリズムと私 ―農場レストラン・コテージの経営経験から― …………… 中野一成
風土と食生活 …………… 三島徳三

[市民のひろば]

大東亜・太平洋戦争（その4）―戦争の遠因、近因、誘引（その2）
「ホーリー・スムート法」によるブロック経済化・支那における排日・侮日とアメリカ …………… 中村稔
道北地域研究所平成19年度事業報告

【第27号】2009年3月

[研究報告]

名寄市民の生活の質(QOL)実態調査 ―QOL、生活習慣、食習慣、健康習慣の男女比較―
…………… 寺山和幸、舟根妃都美、播本雅津子、結城佳子、村上正和
紺谷英司、大見広規、小平洋子、村本徹、望月吉勝
高校1年生へのピアエデュケーションの試みで得た性知識と性意識の実態
…………… 加藤千恵子、石川貴彦、岸本京子、寺山和幸
病院看護職の職務満足度と職業性ストレス ―病院満足度への影響―
…………… 鈴木敦子、結城佳子、舟根妃都美、加藤千恵子、播本雅津子
村上正和、伊藤美和、寺山和幸、平野智美、渡邊麻衣
三谷有祐美、佐久間めぐみ、菅原玉枝、岩城美幸
特別養護老人ホームで高齢者の死を看取った家族の体験―看取りへの合意―
…………… 深澤圭子、紺谷英司、伊藤美和、高岡哲子
小中学生の学校給食における地元産食材料利用の意識と態度・行動との関連
…………… 久保田のぞみ・石川みどり・大久保美幸・半田未知
ひまわりの栽培・搾油試験と事業化の課題
―地域資源活用型のアグリビジネスの構築をめざして― …………… 三島徳三、雪野繼代、木村洋司
バイオディーゼル燃料(BDF)の事例的考察 …………… 雪野繼代、三島徳三
知的障害者の地域移行の現状と課題 ―先進的施設の事例調査を通じて― …………… 清野茂、忍博次
親子で愉しめる絵本による子どもの心理的発達と教育効果 …………… 糸田尚史
異世代交流施設を軸とした名寄市の中心市街地活性化戦略の構築
…………… 白井暢明、黄京性、鹿嶋桃子、結城佳子、木村洋司

[彙報]

抄録・知的障害者職業自立支援会議 …………… 大坂祐二
道北地域研究所平成20年度事業報告

【第28号】2010年3月

[研究報告]

北海道北部地域における断酒会の活動実態と今後の課題

…………… 篠原百合子、伊藤美和、水野芳子、小林美子、安田美弥子

上川北部地域の看護職員確保対策に関する研究

…………… 播本雅津子、舟根妃都美、村上正和、水野芳子、本田真子

…………… 渡邊加奈子、成澤弘美、岩城美幸、西本敬子、尾針真智子、堀岡恒子

ピアカウンセリング授業に関わった大学生の「8つの誓約」の評価 …… 加藤千恵子、高岡哲子、村上正和

…………… 小野善昭、須藤桃代、石川貴彦、寺山和幸

道北地域における地域資源活用型アグリビジネス起業戦略と成立条件

— 亜麻を対象として — …………… 清水池義治、雪野繼代、木村洋司、播本雅津子、三島徳三

高オレイン酸ひまわりの栽培・ひまわり油成分分析と今後の問題

— 地域資源活用拡大をめざして — …………… 木村洋司、雪野繼代、清水池義治、三島徳三

道北地域資源を活用した地域ブランドの形成と管理

— 「なよろブランド」の可能性 — …………… 清水池義治、工藤慶太、西村直道

栄養士の就業実態・意識調査からみる養成施設の課題 …………… 久保田のぞみ

北海道地方被占領期社会福祉研究序説(1)ー分析の枠組みと視角ー …………… 松岡是伸

名寄・美深地域における子どもの心理発達相談 …………… 糸田尚史

覚え書・礼文町船泊中学校「船中よさこい」の14年 …………… 大坂祐二

[彙報]

地域と大学 —2009年度地域シンポジウム提言集—

道北地域研究所平成21年度事業報告

【第29号】2011年3月

[研究報告]

道北地域における気管支喘息の子どもと保護者の自己管理の現状と課題

…………… 細野恵子、平野至規、今野美紀、蝦名美智子

上川北部地域の看護職員確保対策に関する研究 (第2報)

…………… 播本雅津子、舟根妃都美、村上正和、鉢呂美幸

…………… 水野芳子、石谷絵里、渡邊加奈子、岩城美幸

…………… 西本敬子、尾針真智子、堀岡恒子、宮方佳織

ピアカウンセリング授業に関わった大学生の変化 — 8つの誓約の年次比較 —

…………… 加藤千恵子、高岡哲子、村上正和、小野善昭

…………… 石川貴彦、舟根妃都美、結城佳子、寺山和幸

高校2年生のジェンダー・アイデンティティ「自己の価値観、他者からの影響」の変化から見る

ピア・エデュケーション授業の効果 …………… 加藤千恵子、柴田美有紀、大瀧順子

北海道における子どもの権利と教育について …………… 松倉聡史、家村昭矩、塚本智宏、加藤千恵子

赤ちゃんと人権 — 地域における子どもの権利と教育 …………… 加藤千恵子

礼文島の「ふるさと学習」における中・高校生の地域意識—第1報：中学生アンケートの分析— …… 大坂祐二

亜麻栽培を通じた地域ブランド価値の向上メカニズム

— 新規作物導入による「6次産業化」戦略の検討 — …… 清水池義治、雪野繼代、木村洋司、播本雅津子

フランス地域自然公園制度(PNR)を活用したボトムアップ型地域振興の可能性

一塩川流域を対象として一	清水池義治、神沼公三郎、佐藤信、吉田俊也 奈須憲一郎、三島徳三
高オレイン酸ひまわりによる第6次産業化の取り組みとアメリカにおけるひまわり関連産業	
一ひまわりによる地域活性化をめざして一	木村洋司、雪野繼代、清水池義治、安藤清一
A短期大学部児童学科学生が抱く気になる子どもの行動に関する調査	
一小児保健実習講義前後、実習後を比較して一	鈴木敦子、傳馬淳一郎、大山有希、寺山和幸
[彙報]	
老年看護実習における学生の力	一地域の实習施設でのレクリエーションの取り組み、5事例の紹介一
	廣橋容子、長谷川博亮、鉢呂美幸、岩坂信子、結城佳子
学生とともに地域で学んできたこと(1)一オホーツク・紋別で	清野 茂
Overview of welfare,health and social care system in England:labour	
government's welfare reform between 1997 and 2010	Kyung Sung HWANG Jinpil UM
地元農家組織と連携した食農教育の実践	
一名寄市立大学保健福祉学部教養教育科目「北海道の農と食」の事例から一	清水池義治
名寄市立大学・名寄市立大学短期大学部 学生生活実態調査	寺山和幸、今野道裕、長谷部幸子 播本雅津子、黄京性、白井暢明
地域と大学	一大学・学生と連携した地域活動一
道北地域研究所平成22年度事業報告	

【第30号】2012年3月

[研究報告]

高齢者施設職員の介護意識に関する調査	廣橋容子
自己肯定感・自己効力感を高めるピア手法の実践	加藤千恵子、石川貴彦、村上正和 中出佳操、高村寿子
看護大学生の社会的スキルに関連する生活および実習体験	武田かおり、鉢呂美幸、工藤恭子
高齢者の生活満足度とこれからの生活への準備性に関する研究	山本里美、長谷川博亮、結城佳子
上川北部地域の看護職員確保対策に関する研究(第3報)	
～平成22年看護師等業務従事者届の分析から～	播本雅津子、舟根妃都美、村上正和、鉢呂美幸 水野芳子、岩城美幸、太田泰子、石谷絵里、川村武昭 西本敬子、松本房子、尾針真智子、堀岡恒子、宮方佳織
初期養老施設の処遇観	李相済
北海道における子どもの権利と教育について	松倉聡史、塚本智宏、家村昭矩 加藤千恵子、喜多明人、和田真也、伊藤義明
農作業体験を含む食農教育が大学生の食意識に与える影響	
一名寄市立大学保健福祉学部食農教育科目受講者を対象として一	清水池義治
名寄市民の生活の質(QOL)実態調査(第2報)	
一QOL、生活習慣、食習慣、健康習慣の年代別比較一	寺山和幸、村上正和、廣橋容子、鉢呂美幸 水野芳子、大見広規、望月吉勝
地域資源としての亜麻の繊維・食品などへの活用可能性の研究	
～フランスなどの亜麻栽培産業から第六次産業化を探る～	木村洋司、刀禰聡美、清水池義治、安藤清一
[彙報]	

学生とともに地域で学んできたこと(2) ー児童専攻、サークル、地域実践のことー …………… 清野茂
産学連携地域シンポジウム 地域資源の掘り起こしと産業化の取り組み
～第六次産業化による地域の活性化をめざして～ …………… 柴田敏郎、白井清太、井上幸人、木村洋司
道北地域研究所平成23年度事業報告

【第31号】2013年3月

[研究報告]

保育所給食施設における衛生管理マニュアル作成のための実態調査 …… 市川晶子、菊地由希子、吉原敦子
学校給食における地場産物の活用と栄養士業務の特質 …………… 久保田のぞみ、佐藤信、市川晶子
「保健講話」で捉えた高校生の自己概念 …………… 加藤千恵子、佐藤恵子、石川貴彦
実習体験が看護大学生の保健・看護職としての成長におよぼす要因 …… 武田かおり、鉢呂美幸、水野芳子
指尖脈波の非線形解析によるハンドマッサージの効果 …………… 廣橋容子
A Study of the Emotional Labor on the Care Workers and Finger Plethysmograms

Yoko Hirohashi, Sang-jae Lee, Miyuki Hachiro

精神保健ボランティア講座の開催による地域精神保健福祉活動の組織化

ー「なよろでまなぶ精神保健ボランティア講座」に関する一考察ー …………… 小銭寿子
福祉系大学生の進路としての高齢者福祉施設のニーズ・意識研究

ー道北・道央の特養へのインタビュー調査からー …… 佐藤みゆき、家村昭矩、長谷川武史、濱谷紀子
A review of English Long-Term Care System and Policy Developments:

from Royal Commission 1999 to Dilnot Commission 2011. …………… Kyung sung Hwang, Jinpil Um
戦後の北海道における貧困調査研究の史資料の収集と整理(1) …………… 松岡是伸、吉中季子、石塚翔平

地域に根ざした教育の課題と可能性 ー道内の自主夜間中学を中心としてー …………… 加藤隆
A Conceptual Model for Regional Brand Management:

A Case Study of Shimokawa Town, North Hokkaido …………… SHIMIZUIKE, Yoshiharu
[彙報]

2012年度 名寄市立大学・名寄市立大学短期大学部 学生生活実態調査

…………… 大見広規、李相濟、鹿嶋桃子、長谷川博亮
関朋昭、結城佳子、寺山和幸

北海道における公立保育系4年生大学の存在意義

ー北海道における保育の質向上と保育者養成ー …………… 三国和子、今野道裕、中島常安、糸田尚史
宮内俊一、傳馬淳一郎、鹿嶋桃子

2012年度地域シンポジウム 抄録 子育て支援のネットワークづくり

～親の育ちを支え合う～ …………… 河野和枝、奥村澄子、住友美和、三品百合子、吉田征子
道北地域研究所平成24年度事業報告